
インペリアル・ガード

島隼

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

インペリアル・ガード

【Nコード】

N2080T

【作者名】

島隼

【あらすじ】

王家に忠誠を誓い、王家を護る者……近衛騎士。

近衛騎士達は常に当たり前の如く、王宮に住み王家の守護に付いている。

朝も、昼も、夜も……「何故？」などという疑問も抱かずに。

そんな折、隣接する大国が不穏な動きを見せ始めた。

王家を護るとは何か……国家が危機に瀕する時、その真の意味が問われる。

これはとある国の近衛騎士の物語。

ご案内

この小説は自サイト「Four Tribes」(URLは下の方を参照)に掲載されている同名小説の二重投稿作品です。

プロローグ【1】

「評議会の結論は出たか？」

ここは大陸の北西部、広大な領土を有する大国ベルドラス帝国の帝都ベルド、その中心にそびえ立つ絢爛なる宮殿の最上階にある国王の執務室である。

その部屋の奥にある巨大な窓の窓際に、齢六十半ば、髪と顔には歳相応の白髪と皺を刻み、くすんだ赤色のマントを羽織った大柄の男が窓より夕日に染まる帝都ベルドを見降ろしていた。

その男の口から発せられた低いがはつきり聞こえる声の問いかけに、窓の反対側の扉の前にいた若い男が答える。

「はい。評議会は陛下の提案を承認しました」

「そうか」

結論がわかっていたのか、男の声に感情はない。

「他に何かあるか？」

「別件ですが、先ほど彼らからの返事が届きました。条件次第では協力することです」

「条件とは？」

「制圧後の領地維持と、交易の独占権です」

「身の安全と金……か、単純だな。その他の要求は？」

「ありません」

「欲の無いことだ」

男は振り向くと、すぐ後ろにあった執務用の机に座った。

「承知したと伝える」

「かしこまりました」

「こちら側の軍の準備はどうなっている？」

「各地に展開していた外征軍に対し帝都への招集を通達しました。

しかし、周辺諸国に警戒感を与えないように行動しているため、召

集の完了にはしばらく時間が掛かると思われます。国境警備軍の一部へは連絡済みです」

「わかった。下がれ」

「はっ」

若い男は一礼し、扉から外に出て行った。

「ダルリアの制圧。これが成ればの大陸に覇を唱える日も大きく近づく」

そう呟くと、この部屋の主、国王ドイズ・ベイルは静かに目を閉じた。

第一章 【1】

ここは大陸の南側、北西をベルドラス帝国、北東をロビエス共和国の二大国と国境を接し、西のセシル王国と東の都市同盟に挟まれた地域に位置するダルリア王国である。

国王ウォルト・カイザスを君主とし、大部分の土地は肥沃な草原であり所々に森が生い茂っている。

王国内のほぼ中央に位置する王都ルキアを中心に大きな街道が十字に伸び、その周りやそこからの枝道沿いに大小の街が点々と存在していた。

また、国内には人族の他にエルフ族とドワーフ族が共に住んでおり、エルフ族の織物とドワーフ族の加工金属製品は人族の造る同種のものとは比べはるかに優れ、彼らから仕入れたそれらの品物がダルリア王国の主要な交易品となっていた。

エルフ族とドワーフ族は共に閉鎖的であり、それでもドワーフ族と交流がある国や街は多少なりとも存在するが、エルフ族と交流のある国はほぼ存在せず、大陸中でもダルリア王国のみであった。

そして今日は、王都ルキアの北端に位置する王宮の敷地内にある元老院で、三カ月に一度の元老会議が開かれていた。元老会議とはダルリア王国の政を司る機関である。

元老院はこの国の政治の中心となっており、内部は実務を担当している文官達の作業場となっている。そして、元老院内の奥まった場所にある一室が元老会議専用の会議場となっており、会議場の内部は外に面していないため調光用の窓は無いが、天井の中心にある大きな魔石と壁際の絵画や壺などの装飾品の間にある魔石の光で明るく照らされていた。壁と床は白を基調として美しく磨かれた石造りとなっており、部屋の中央には大きな円卓がある。

そして、その周りには元老と呼ばれるこの国の政の方針に意見す

る権限を持つ五人の貴族達と、この国の大公ハース・シルクス、そして国王ウォルト・カイザスが座っていた。

ウォルトとハース以外の元老は色違いだが似たような全身を覆うフードを身につけており、フード自体は頭の後ろに垂らして顔は見えるようにしていた。ウォルトとハースは王族として元老とは違う要所には各々の家の紋章が入った服を来ており、その上からマントを羽織っている。この国の大公であるハースはウォルトより七つほど年齢が下であり、威厳を内から漂わせるウォルトとは違い、どちらかという痩身で銀色の髪と青い眼をし、常に優しい表情を浮かべているような印象の男だった。

大公とはダルリア王国を建国した初代国王の弟が起こしたシルクス家が代々務め、王位継承権をも保持するこの国の要人である。但し、王位継承権は現王家であるカイザス家の血筋が途絶えた時のみ行使されることになっているため、過去にシルクス家の者が王位に着いたことはない。大公の納める公都シーキスは防衛権と外交権以外の自治が認められている。

円卓に座る者たちは皆、年齢は五十代から六十代前半のように見えた。

「本日の議題は以上だ。他に何かあるか？」

予定にあった議題が終了すると、会議卓の一番奥に座っていた元老会議の議長も務める国王ウォルトが大公ハースと他の元老達に持ち込みの議案が無いかを確認した。

「陛下、一つよろしいか？」

ウォルトの右隣に座っていた白髪だが年齢的には一番若く、黒く力強い眼つきをした男、元老の一人であるドイル卿ガートン・ドイルが軽く手を上げ国王に発言を求めた。他の元老達は特に議案は無いようであった。

「なんだ？」

「ロビエス共和国と都市同盟でエルフ族の作る織物の需要が増しています。しかし、エルフ達はその需要を満たそうとせず品切れの状

態が相次いでいます。生産量を増やすように依頼してもエルフ達は聞く耳を持ちませぬ。陛下から生産量を増やすように命じてもらえませんか？」

ガートンは不満を隠そうともせずウォルトに訴えた。エルフ族の造る織物は絵柄がきめ細やかで肌触りもよく、この辺りではダルリア王国以外では手に入らないため周辺諸国では高値で取引されていた。

「何を言っている。他種族とは内政不干涉が原則、依頼ならまだしも命ずるなどもつてのほかだ」

ウォルトは厳しい視線をガートンに送ったが、その視線に気付いていないのかガートンはさらに言葉を続ける。

「しかし、交易量が増えればその分エルフ族の収益も増える。エルフ族にとつても利はあるはず。陛下のお言葉であれば、エルフ族も耳を貸すでしょう」

「エルフ族がそれほど金銭を欲しているとは思えません。エルフ族の利ではなく、他国との交易を取り仕切るあなたに一番の利があるからではないのですか？」

ウォルトとガートンの話しを聞いていたハースも、日頃の優しい表情とは違い厳しい視線をガートンに送っている。

「否定はしません。だが、エルフ族とそれにドワーフ族もそうだが、単独では他国との交易を行えず我々に依存しているのが実情だ。それに国家防衛についてもわれわれに任せきりだ。いつまでも自由にさせておかず、そろそろ王国の支配下に置くべきではありませんか？」

ハースの視線にも臆せずガートンは逆にハースに問い返す。

「エルフ族やドワーフ族は他国との交易を望んでいるわけではない。我々が他国との交易品として仕入れているだけだ。そもそも他国との国境線を敷いたのは我々人族だ。当然その防衛も我々の責務。他種族にとって身に覚えのない国境線の防衛に参加しろというほうがおかしいであろう」

ウォルトは興奮してきているように見えるガートンを宥めようとしたのか、ゆつくりとした穏やかな口調になっていた。

「しかし・・・」

「もうよい。この話、聞かなかったことにする。他になければ本日はこれにて散会とする」

尚も言葉を続けようとするガートンをウォルトの言葉が遮った。

ウォルトが散会を宣言するとハースを除く元老達は立ち上がり、ウォルトに深々と礼をし会議場から退室した。ガートンは散会后もウォルトに何かを言おうとしたが、ハースに止められたため渋々会議場を立ち去っていった。

「困ったものですね」

会議場に残ったハースが呟くような声を漏らす。

「そうだな。ドイル卿は有能ではあるのだが我欲が強すぎる。元老になってから日が浅いためか他種族との関係を誤解しているところもあるようだ。もう少しこの国を導く元老としての自覚が欲しいものだな」

そう言いながらウォルトは立ち上がり、ハースもそれにならった。

「それはそうとハースよ、五日後の調印式にはお主も見届け人として参加してもらいたい」

ウォルトは元老院の出口へと向かいながら隣を歩くハースに語りかけた。

「調印式？ああ、セシル王国との同盟の議ですね。では五日後ですとシーキスに戻っては間に合いませんので、それまでこちらに滞在させてもらってもよろしいか？」

ハースが居を構える公都シーキスまでは王都ルキアから片道三日程の距離である。

「それは構わん。では、よろしく頼む」

「承知しました」

ウォルトとハースは元老院を後にした。

第一章 【2】

夕暮れの今にも地平線に沈もうとしている太陽の残り火が、王宮内の最上階にある国王の執務室へと続く長い廊下を照らしている。

廊下には赤い絨毯が敷かれているため、空間全体が赤色に染められているように見えた。その廊下を短い薄茶色の髪、その髪と同じ色の力強い眼を持った精悍な顔立ちをした若者が歩いていった。

その体には、ドワーフ族作の金色と銀色を混ぜたような美しく不思議な色をした近衛騎士専用の鎧を全身に身に纏い、背には純白のマントを羽織っていた。重装備で重く動き難そうに見えるが、素材はドワーフ族のみが製法を知る特殊な金属であり、非常に硬いが重量はそれ程でもなく、動いても金属が擦れる音さえしない。

（急に何だろうか。元老会議の後は不機嫌な事が多いからな…）
ウォルトが元老会議から戻った後、自室に来るように呼び出しがあったのだ。

執務室の前まで来ると扉を軽く叩いた。

「近衛騎士団長レッド・エストール、参りました」

「入れ」

レッドは部屋の中からの返事を確認すると扉を開けて中に入った。執務室の中は広く扉の向かいには大きな窓があり、その前に執務用の机が置かれている。壁際には装飾品の他に大きな本棚があり、多くの書物が置かれていた。部屋の天井にある魔石には既に光が灯り内部を明るく照らしている。そして、執務用の机には国王ウォルト・カイザスが座っていた。年齢は五十代後半、短髪だが癖のある黒髪には白髪は少なく、年齢よりは若く見える。普段は意思の強さがそのまま表れているような黒い瞳は今固く閉じられていた。内部にはウォルト以外の人影はない。

「お呼びでしょうか」

「ああ」

机の椅子に深く腰を掛けたウォルトは、目を閉じたまま何かを考えているようだった。

「うかない顔ですね」

（何があつたのやら・・・）

しばらく何も答ええないウォルトにレッドは不安を覚えた。八つ当たりをされるようなことはないが、元老会議で決まった細々としたことが任されることは多々あつた。

「そうだな……、よくよく考えてみると、そもそもの原因はお前だ」
ウォルトは目を開けると、意地悪そうな笑みを浮かべながらレッドを見た。

「え？……ドイル卿、ですか。……申し訳ございません」

思いがけないウォルトの言葉にレッドは一瞬言葉に詰まつたが、事情を察したのかウォルトの笑みに苦笑で返した。

元老貴族は世襲制であり、レッドの家柄であるエストール家も元老貴族の一つだったが、現当主であるレッドが故あつて元老の地位を放棄したため、新しくドイル家が元老貴族となり当主であるガートン・ドイルが元老の座に着いていた。

「冗談だ。呼んだのは別件だ。五日後の調印式だがハースにも見届け人として参加してもらうことにした」

ウォルトは笑いながら本来のレッドを呼びだした要件を伝え始めた。

近衛騎士は調印式の警備を担当するためその連絡である。大公ハース・シルクスも下位とはいえ王国の王位継承権を持っている。その守護も近衛騎士の職務である。

「わかりました。守備体制を見直します。以上でしょうか？」

「ああ、頼むぞ」

「かしこまりました。失礼致します」

レッドは右手を胸の前で曲げ、騎士流の敬礼をすると執務室を後にした。

執務室を出ると既に日は沈んでおり、壁に等間隔で設置された魔石から発せられる淡い光が本来であれば闇に包まれている廊下を照らしている。窓の外に見える王宮の庭では、要所に立っている見張りの交代が行われていた。

（もう、そんな時間か。……シードに話とかなければ）

レッドは王宮の一階にある近衛騎士の待機部屋へと向かった。待機部屋とは近衛騎士の会議や休憩所、哨戒しやうかいの交代等が行われる部屋である。

途中、一階に降りる階段の所で、同じく下の階に向かって歩いている近衛騎士団の副団長ポスト・バンテスがいた。

「ポスト殿、お久しぶりです」

レッドはポストを見つけると声を掛け近づいていき、追いつくと横に並んで共に歩き始めた。

「おお、団長、お久しぶりです。……団長、私への敬語はお止め下さい。あなたは団長で私は副団長なのですぞ。他の者が聞いたらあらぬ誤解を招きますぞ」

ポストはレッドにしか聞こえないように小声で耳打ちをした。

「……ああ、すまない」

ポストは前近衛騎士団長時代からの副団長で、年齢は二十代後半のレッドのほぼ倍の五十代半ば、髪は濃い茶色で顔には歳相応のシワが刻まれている。

前団長が近衛騎士を勇退した際に、近衛騎士団長の任命権をもつ国王ウオルトより次ぎの近衛騎士団長に打診されていた。しかし、近衛騎士としては年老いた自らが団長になれば近いうちに再度近衛騎士団の団長が交代することになり、それでは近衛騎士の士気を保つのは難しい。また、王家との信頼関係を築くためにも長期に渡って団長を勤められる者を任命した方が良いのではないかと国王に進言し、王家との関係も深く才能もあり、当時若くして参謀長となつたレッドを次の近衛騎士団長に推薦していた。それをウオルトも認め、現在はレッドが近衛騎士団長の座に着いている。その為、レッ

ドも普段は意識してポストに敬語を使わないようにしているが、ポストに対する尊敬の念もあり無意識の時には敬語になってしまう。

「ポスト殿も待機部屋に？」

「ええ、大公殿下が調印式までこちらに滞在されることになりましたので、久しぶりに顔を出そうかと」

「ああ、そうらしいな。私もさつき陛下に聞いた」

近衛騎士団の副団長は大公の守護を責務としているため、普段は王宮ではなく公都シーキスにある大公宮にいる。三か月に一度開かれ、大公も参加する元老会議のためにハースと共に王宮に来ていた。二人は一階まで降り謁見の間の前を通り過ぎると、その先にある待機部屋へと向かった。レッドは待機部屋の扉を開けると、中では中央にある会議卓で哨戒任務についていた近衛騎士達の引継ぎが行われていた。定位置で見張りを行っている近衛騎士の引継ぎはその場で行われるが、哨戒の引継ぎは待機部屋で行われる。

会議卓にいた近衛騎士がレッドとポストに気付いて立ち上がり敬礼をすると、レッドとポストはそれに軽く手を上げて応じた。部屋の奥には机が二つ並べてあり、その一つにレッドより少し長めで中央で分けられた金色の髪と、整った顔立ちに良く合う青色の眼をした近衛参謀長であるシード・デイルが座っている。シードは何か書き物をしていたが、二人を見ると立ち上がり敬礼をした。

「ポスト殿、久しぶりですね」

既に公都シーキスへの帰路に着いていると思っていたのか驚いたようにそう言うと、近くにあった椅子をポストに勧めた。レッドは隣の自分の机に腰を掛けた。

「公都には戻られないのですか？」

ポストは椅子に座りながらシードの問いに頷いた。

「そのことで、話があるんだ」

ポストの代わりにレッドがその問いに答えると、シードはレッドの方に向き直りレッドに聞き返した。

「話？」

「ああ。今度の調印式に大公殿下も参加されることになった。その為大公殿下も調印式の日まで王宮に留まられる。それを考慮に入れて王宮の守備体制を見直して欲しい」

「それでポスト殿も。わかりました。守備体制を見直します」

近衛参謀長は近衛騎士団の作戦立案者であり、今回の同盟の議の警備態勢もシードが作成している。近衛参謀長は近衛騎士団の要職の中で一番忙しいと言われているが、シードは特に苦もなくこなしていた。

「大公宮の近衛も何人か連れてきておる。その者達も調印式までの体制に組み入れてくれて構わない」

「わかりました」

シードはポストの言葉に應えると椅子に座った。

しばらく三人で談笑していると、哨戒の引継ぎが終わり休憩時間に入った近衛騎士の一人が三人に近づき声を掛けて来た。

「三騎士が揃うのもめずらしいですね」

近衛騎士団の団長、副団長、参謀長は近衛三騎士と呼ばれ、近衛騎士からはもちろんだが、国民の間からも尊敬と憧れの対象となっている。

「そういえばそうだな。そもそもポスト殿が王宮に数日滞在することめずらしいからな」

「そうですね。私は前回の元老会議の時には王宮を離れていたのだから半年振りですよ」

「それでか、道理でシードとは随分と久しぶりな感じがしたはずだ」
ポストの言葉に三人が笑っていると、突然待機部屋の扉を叩く、というよりも何か重い物をぶつけるような音が部屋の中に響いた。と、そのすぐ後に若い女の苦しそうな呻き声とも聞こえる声が聞こえてくる。

「ジュ、ジュリア・ウェンフィー……ルド……で……
す。あ、開けて………くだ……さ……い」
「なんだ？」

レッドは訝しんだが、身振りで扉の近くにいた近衛騎士に開けるように合図をした。

近衛騎士の一人が扉を開けると、そこには大きな青い瞳をした若い女、近衛騎士見習いのジュリア・ウエンフィールドが、大きな木箱を抱えて倒れそうになりながらよろよろと部屋の中へと入って来た。

ジュリアは部屋に入ると木箱を部屋の中央にほとんど落とすように置いた。長く美しい金色の髪が汗で頬に張り付いている。

置かれた木箱の中には十本程度の剣が納められているようだった。「ガイさんに依頼していた……、剣が届きました」

ジュリアは木箱を床に置いた姿勢のまま肩で大きく息をしていて、なかなか体を起こせないでい

た。ジュリアはまだ見習いのため正式な任務に付かず、普段は近衛の役割や魔法、剣術を学びながら空いた時間はこういった雑務をこなしていた。ガイとは王都に店を構える近衛騎士団御用達のドワーフ族の鍛冶屋である。

騎士にとって消耗品である剣は、欠けた場合や折れた場合の他に数年に一度交換される。今回は調印式に合わせて十本程、ガイに制作を依頼していた。近衛騎士の剣は両手でも片手でも使用できるバスタードソードで、王家の傍に仕える近衛騎士らしく柄や鞘等には細かな装飾が施されていた。

「お疲れさん」

ポストがジュリアに声を掛けると、ジュリアは聞き覚えのある声に驚いたように急いで顔を上げた。

「あ、ポスト様！お久しぶりです。どうされたのですか？」

そう言いながら、慌てて敬礼をした。

「ああ、数日王宮にやっかいになることになった」

ポストは椅子から立ち上がり木箱に近づいて中を覗き込むと、中に一本他と違う剣があることに気づき、その剣を箱から取り出して鞘から抜いた。

「なんだ、これは？」

その剣は他の剣よりやや短く、そして軽かった。

「……わ、私のです」

ジュリアは申し訳なさそうに言うと、後ろから近づいて来たレッドが木箱から別の剣を一本抜いてポストが持っている剣の横に並べた。

「見習いになって日も浅くまだまだ鍛錬中で。こっちの近衛への支給品の剣ではまだ重くて扱えないんだ。で、その特別仕様の剣を作ってもらった」

近衛騎士には王家の紋章の入った統一された剣が至急されている。しかし、あくまで成人男性向けであったため、女性としては背が高い方ではあるが、まだ十八歳で見習いとして半年程しか鍛錬を積んでいないジュリアには長く重いため使いこなすことはできなかつた。

「なんだジュリア、我らでさえ支給品なのにお前は特注品なのか」
ポストはわざとらしくそう言う。待機部屋が笑いに包まれた。ジュリアは恥ずかしそうにしている。

ポストは剣を鞘に納めてジュリアに手渡すと、手のひらでジュリアの頭を軽く叩いた。

「まあ、使えない剣を帯剣たいけんしても仕方がない。自分に合った剣を使うのが一番だ。だが、軽い剣は折れやすく相手の剣を受け止めづらい。いずれは他の皆と同じ剣を使えるようになるのだぞ」

「はい！」

ジュリアは敬礼をしながら返事をする。ポストは満足そうに頷いた。

「さて、私はそろそろ大公殿下の所に戻ります。シード、守備体制が決まったら教えてくれ」

「わかりました」

「では」

ポストはレッドに敬礼をすると部屋を後にした。

「俺もそろそろ部屋に戻る。シード、頼んだぞ」

「はい、明日までには」

待機部屋を出たレッドは、王宮の最上階にある自らの私室兼執務室へと向かった。一般の近衛騎士は、王宮の敷地内にある王宮とは別の専用の宿舎に交代で寝泊まりをしているが、団長と参謀長は王宮内の王家と同じ階層に、副団長は大公宮内に自室を持っている。これは防衛上の観点からであり、王家の私室へはこの前を通らないと辿りつけない配置になっている。例外としてジュリアだけは王宮の一階に自室を持っていた。理由はジュリア以外の近衛騎士は全員男であるため、同じ宿舎での寝泊まりは好ましくないとの配慮である。

レッドは自室に戻ると部屋の天井にある魔石の明かりを付け、近衛騎士の正装である鎧を脱いで壁際の専用の台に掛けた。部屋の奥の窓の正面にある机の椅子に座り、引き出しの中から趣味である葉巻を一本取り出すと魔石で火を付けゆつくりと燻くゆらせた。

近衛三騎士は見張りや哨戒などの固定に職務はないが、王宮に住んでいることも含め執務時間が曖昧であり、常に執務中とも自由時間ともいえる状態にある。その為、あまり個人的な行動が出来ないレッドにとつての唯一の趣味であった。

しばらく葉巻を楽しんでいると、部屋の扉を叩く音が聞こえた。

「ジュリア・ウエンフィールドです」

扉の外からジュリアの声が聞こえた。周りを気にしているのか、声が少し小さめだった。

（なんだ、こんな時間に）

ジュリアがレッドの部屋に来ることはめずらしくないが、大分遅い時間になっていた。

「入っていいぞ」

そう言うと、扉が開きジュリアが入って敬礼をした。

「どうした？」

「あのー……。お願いがあるのですが……」

「なんだ？」

「明日、私の鎧をガイさんの所に取りに行くのですが、、替えの分も含めて三組あるんです」

ドワーフ族は王都に住んではいても王国に属しているわけではないため、例え王宮からの依頼でも一般の客と扱いが変わらない。そのため、まとまった量でもなければ配達は望めず自分で取りにいかなければならない。

「それで？」

レッドはなんとなく言いたいことがわかったようだが先を促した。

「王宮まで運ぶのを手伝ってもらえませんか」

ジュリアは申し訳なさそうに言った。ちなみにジュリアは今まで自分の鎧がなかった。これまでは見習いとして主に近衛騎士団の雑用をこなしていたが、近々哨戒も行うことにしたため鎧を用意することになっていた。

「ほお、おまえは見習いのくせに団長の俺に荷物持ちをしると？」

レッドは意地悪にそう言った。レッドの言うとおり本来見習いのジュリアが近衛騎士団の団長であるレッドに頼むようなことではなかったが、ジュリアがレッドに頼むのにはそれなりに理由があった。

二十年程前にレッドの実父であり元老の一人だったバスコ・エストールが死去した。エストール家はダルリア王国建国時からの元老貴族であり、この国では王家、大公家に次ぐ名門中の名門の家柄である。母親はレッドが生まれてすぐに病死しており、当時一人残された幼少の跡取りであるレッドの処遇が問題となった。

高級貴族のため孤児院に預けるわけにもいかず、さらに元老貴族であるため、他の貴族の家に養子に出すこともためらわれた。そもそもエストール家には子がレッド一人だったため、養子となれば元老貴族であるエストール家が断絶してしまう。その為、最終的に成人するまで元老の地位は保留され、王家預かりとなり王宮で育つことになった。当時まだ子がいなかった国王ウォルトと王妃フロリア

はレッドをわが子のように育てていた。第一王位継承者となるメルルが生まれて以降はレッドがメルルに遠慮し一定の距離を保つようになっていったが、ウォルトとフロリアにとっても感謝しており、その恩返しの意味も込めて近衛騎士として王家を守護すると誓い、近衛騎士に志願した。成人前とはいえ、エストール家の当主でもあるレッドが近衛騎士に志願することはウォルトも含め周りは猛反対したが、レッドの意思は固くウォルト達は説得を諦めた。ウォルトはレッドが成人した際に、再度元老となるか近衛騎士として生きるか意思を確認したが、レッドは一切迷わず近衛騎士を選択した。元老貴族としてのエストール家を維持するための措置として王家預かりとなったはずであったが、最終的にはレッドの意思によりエストール家は元老貴族の地位を放棄した。

その後しばらくして、欠員となった元老の地位の補充が求められ、当時豪商としてこの国の経済面での地位を築いていたドイル家が元老に就任することになった。

ジュリアも親が幼少の頃に亡くなったため、出自は違えど同じ境遇のレッドに親しみを持っていた。

ジュリアはダルリア王国の北西、帝国との国境近くにあった小さな村ヒリーフの出身である。十二年前の帝国との国境紛争の際に帝国に攻め込まれ、村は一時帝国の支配下に置かれた。その後、王国騎士団の活躍により村の奪還に成功したが、ほぼ壊滅状態となっていた。戦後、村を視察に訪れたウォルトは、村奪還時の戦闘に巻き込まれて両親亡くし、村で一人泣いているジュリアを見つけた。国家間の紛争に巻き込んでしまった自責の念に駆られたウォルトはジュリアを連れて帰り、最初は王都にある孤児院に預けたが、次の王位継承者が娘であり将来的に女の近衛騎士が必要と考えたウォルトは、ジュリアを孤児院から引き取り王家で育てることにした。フロリアもジュリアを実子のメルルと同じようにわが子として接し、メルルとその後生まれた第二子のミーナと共に姉妹のように育てら

れた。また、それ以前から王家で暮らしていたレッドを兄のように慕い、またレッドも境遇は違えど共に親を亡くしたジュリアを妹のように可愛がっていた。そして、今から半年程前に十八歳になったのを機にフロリアの猛反対を押し切って自ら近衛騎士に志願した。ウォルトとしては望んだことではあったが、ウォルトが勧めたわけではなくどちらかというとレッドの影響である。

このような関係もあり、兄のような存在のレッドに頼む方が他の近衛騎士に頼むよりもジュリアにとってはずっと頼みやすかった。「だ、だめですか？」

ジュリアは悲しそうな顔でレッドを見た。

(まったく、そんな眼で見るなよ……)

レッドは妹のような存在のジュリアに何か頼まれると甘いとは思いつつも断れないことが多かった。

「構わないよ。ただ、シードに見つかる大変だから午前中の早い時間ならな。シードは今日は守備体制の見直しで遅いだろうから明日の朝は休んでいるだろう」

参謀長であるシードは礼儀など、こういうことには非常に厳しい。

「ありがとうございます！明日の朝また来ます！！」

そう言つとジュリアは喜びの表情を浮かべた。

「ああ」

ジュリアは敬礼をしてレッドの部屋を後にした。

(甘いかな……)

そんなことを考えながらレッドは葉巻を一通り楽しむと、扉を隔てた隣の寝室へと入っていった。

第一章 【3】

翌日、レッドは向かえに来たジュリアと共に王都に向かった。

王宮の周囲は城壁で囲まれており、さらにその外側に堀が掘られ大量の水が流されている。二人は正門をくぐり、掘りに掛けられた石橋を渡り王都に入った。石橋の先はすぐ王都の中央を通る大通りに出る。大通りは普段は賑やかな喧噪に包まれているが、今はまだ朝早いためか大通りの両側にある店はまだ、開店の準備をしている店が多かった。レッドはさすがに鎧を着て王都に出るは目立つので、変装というほどでもないがダルリア王国の男がよく着用している簡易的な布の服を身に纏っていた。ジュリアも同様な服装をしている。「レッド様と王都に出るのも久しぶりですね」

ジュリアはうれしそうにレッドを見た。

「そうだな。最近は俺も忙しいし、昔と違ってさすがに立場上そうそう二人で来れないしな」

ジュリアは小さい時によくレッドに王都に遊びに連れてきてもらっていた。

「すみません。付き合ってもらってしまって」

「ん？まあ、頻繁には難しいがたまには構わないだろ。シードに見つからなければ……」

「シード様、厳しいですよね」

シードの顔を思い出したのかジュリアは顔は緊張したようだった。

「はっはっはっ。ジュリアはシードが苦手だよな？」

「に、苦手じゃないですよ！ただ、ちょっと厳しいから怖いというか……」

ジュリアは幼少の頃から接して来た王家の人間やレッドにどうしても家族のような接し方をしてしまう。子供の内はそれでもよかったが、さすがに見習いとはいえ正式に近衛騎士団に志願したからには王家の人間とはそれなりの接し方をしなければならない。

シードも事情はわかつてはいるが、立場上厳しくジュリアに接していた。無論、近衛騎士団長であるレッドも厳しくしなければならぬが、ジュリアの事情の当事者ということと、レッド自身もあまり細かいことを気にしない性格のためどうしても甘くなりがちだった。

「レッド様とシード様は性格がまったく違うのに気が合うというか、よく一緒に飲んだりしてますよね」

二人はちょうど王都の中心に位置する中央に噴水がある広場あたりまで来ていた。この場所から十字に王国内の端まで続く道が伸びており、正に王国の中心部となっていた。

「まあ、付き合いが長いしな」

参謀長を務めるシード・ディールは元老の一角を担うディール家の次兄であり、レッドとは同世代ということもあり、幼少の頃より交流がある。

同時期に近衛騎士に志願し、共に鍛錬を積んできた親友とも言うべき間柄だった。礼節に厳しい性格もあって普段人前ではレッドに団長として敬意払い敬語で話しているが、二人の時は友人同士として話をしている。

レッド達は噴水の広場で東に向きを変えるとすぐに脇道に入った。朝早いということもあるが、その道は大通りと比べると閑散としていた。ドワーフは日頃広大な洞窟に集落を構え住んでいるためか、人の街に店を出す場合は人通りの多く明るい大通りよりも、こういう人通りが少なく幾分薄暗い場所を好むようだった。

「ガイ殿に会うのも久々だな。昨日はなんで剣と一緒に持ってきてくれなかったんだ？」

「なんでも、『鎧の出来が納得がいかない』そうです」

レッドの問いにジュリアが少し苦笑しながら答えた。

ドワーフ族は非常に職人肌で自分が納得できないものは絶対に人前には出さない。

「大丈夫か？作り直してないだろうな……」

「多分……。ガイさんは今日取りに来てくれと言っていたので……」
二人は一抹の不安を感じながらしばらく路地を進んで行くと、ガイの店の前に辿り着いた。店といっても入り口の扉に申し訳程度に木製の武具屋の看板が掛かっているだけで、気を付けていないと見過ごしてしまいそうな近衛騎士団御用達とは思えない店構えである。ジュリアはドアを軽く叩き、扉を開けた。
窓は全て閉じられており、中は薄暗く雑然とし、建物が石造りなこともあって家の中というよりは洞窟の中のようなだった。

壁際に鍛冶の炉がありその周りには鍛冶道具が雑然と置かれていた。

「おはようございます。ガイさんいますか？」

人影が見当たらないのでジュリアが大きめの声で家の奥に向かって呼びかけると、奥から低く太い声で返事があつた。

「誰じゃ？」

声と共にジュリア達の向かいにある奥に続く通路から、背が低く焦げ茶色の髪をボサボサに伸ばし、大きな頭とがっしりとした体格をした一人の男、ドワーフ族のガイが姿を現した。

顔にはドワーフ特有の長いあご鬚と口髭が生やされていた。

年齢は見た目は五十前後に見えるが、ドワーフ族は人間よりもかなり寿命が長いいため正確な年齢はわからない。本来ドワーフ族はエルフ族程ではないが閉鎖的であり、人族の街に出てくることはあつても住むことはほとんどない。

そんなドワーフ族の中で人族の街に店を構え住んでいるガイはかなりの変わり種のドワーフであつた。何故、ドワーフの村ではなく人族の街に住んでいるのかは定かではない。

「おお、ジュリアか？昨日はすまんかったの。ん？後ろのは、レッドか？めずらしいな。最近はとんと顔も出さんと」

「久しぶりですね、ガイ殿」

「今日はどうした？ジュリアの荷物持ちか？」

「御明察」

レッドの答えにジュリアは気まずそうな顔をしている。

レッドも見習い時代にここに通っていたため、ガイのことはよく知っていた。

「がっはっはっは。団長が荷物持ちじゃ締まらんの」

ガイは豪快に笑うとジュリアを呼び炉の近くへと連れていった。

そこには近衛騎士の鎧特有の金と銀の輝きを放つ美しい鎧があった。近衛騎士の鎧の造りと装飾は統一されているが、ジュリアの鎧は女性用のため、胸の部分等の造りがレッドや他の近衛騎士のものとは若干違つようだった。

「ちょうど朝方仕上がったところだ。まだ、箱に詰め取らんから自分で入れて持つて行つてくれるか」

ガイは部屋の隅にあった木箱をジュリアに渡した。

「わかりました。ありがとうございます」

ジュリアは箱を受け取ると表情をほころばせながら鎧を丁寧に箱に入れ始めた。

(年頃の女が自分の鎧を笑顔で箱詰めしている姿は滑稽だな．．．自分の鎧が出来てうれしいのだろうが．．．育つた環境が悪かったか．．．俺のせいか．．．)

レッドも見習い時代初めて自分の鎧を手に入れた時に、ジュリアに見せびらかしたの思い出していた。

「久々に女用の鎧を造つたわい」

ガイがレッドの側に歩みよつてきた。

「ありがとうございます。今回頂いた剣も素晴らしいものでした」
「当たり前じゃ。だから渡した」

レッドは感謝の意を示したつもりだったが、ガイにはそう受け取ってもらえなかったのか多少不機嫌に応えた。

レッドもドワーフ族とは何度も話しているが、まだ文化等の違いには把握しきれないところがあった。

その後もしばらくガイとレッドが話しをしていると、鎧を箱に詰

め終わったジュリアがレッド達の方を振り向いた。

「レッド様、終わりました」

「ああ、わかった」

レッドはジュリアに近づいていくとジュリアの足元に箱が三つ置かれていた。

「ひょっとして……俺が二つか？」

「は、はい……」

「ま、まあ鍛錬にはちょうどいい」

レッドは箱を二つ重ねて持ち上げ、もうひとつの箱をジュリアが持った。

「それでは、ガイ殿。世話になりました」

「ガイさん、ありがとうございます」

「うむ」

レッド達は店を出ると来た道を王宮へと戻って行った。大通りに出ると店もほとんどが開いて来ていた。

二人は王宮から戻ると、あまり人には見られないように、裏口から王宮内に入りジュリアの部屋へと向かった。その途中の廊下で、正面から長く緩やかに波を打った青い髪と青い眼、簡易的なものではあるが淡い乳白色のドレス身に付けた美しい女性、王妃フロリアが歩いて来る。どうやらジュリアの部屋に行ったが、いなかったのて戻る途中のようだった。

「あ、母さ……」

「ジュリアー!!」

ジュリアが王妃に対して『母様』と呼ばうとしたのをレッドが咄嗟に制し、周りに人がいないか確認した。

「レッド、良いのですよ」

フロリアもレッドの声に驚いたようだったが、微笑みを浮かべながらレッドにジュリアを許すように言った。

「いけません。王妃様。ジュリアは見習いとはいえもう近衛騎士な

のです。近衛騎士が皆の前で王妃様を母と呼ぶことは許されることではありません」

「そう……ですね。その通りかもしれません」

フロリアは何かを言いたげではあったが、レットの言うことが正しいと思ったのか何も言わず、哀しそうな目でジュリアを見た。

「申し訳ありません、王妃様」

ジュリアもフロリアに謝罪すると、その言葉はフロリアをいっそう哀しませた。

「……大きな荷物ですね。二人でどちらへ？」

フロリアは何か話題を変えようと思ったのか二人が持っている荷物に目を向ける。

「ジュリアの鎧が出来たのそれを取りに王都へ行って参りました」

「鎧、ですか。ジュリア、がんばるのですよ」

「はい!!」

ジュリアは大きく返事をする、フロリアは微笑んだが目はやはり哀しそうであった。

フロリアはジュリアが近衛騎士に志願することを最後まで反対しており、今でもその気持ちは変わらないことはレットも重々承知している。先ほどの応援の言葉も本音では無いことはわかっていたが、ジュリアの意思も固くこの件に関してはレットもつらい立場にあった。

二人は荷物を持っていたので敬礼ではなくお辞儀をしフロリアと別れた後、またジュリアの部屋へと向かった。

「ジュリア、近衛騎士になると決めたのなら分別をつけなくてはだめだ」

「はい……」

ジュリアは哀しそうに下を向いた。

「それとも……辞めるか？」

「いやです!! 私は育てて頂いた王妃様や陛下、それにメ……、両王女をお守りします!!」

ジュリアは正面を向き、しっかりとした声で力強くそう答えた。それはレッドと同じ気持ちだった。

「そうか……」

レッドもそれ以上何も言わなかった。

程なくジュリアの部屋に入り壁際に荷物を置いた。ジュリアの部屋は白を基調とし窓も広く明るかったが、部屋自体はそれ程広くはなく、ベッドと机それに部屋には不似合いな大きな鏡台が置いてあるくらいだった。鏡台はフロリアからの贈り物である。

「……なんか……殺風景というか、生活感の無い部屋だな？」

レッドは素直な感想を述べると、ジュリアは少し恥ずかしそうに目を一度逸らした。

「い、いろいろ飾り付けをしたいけど……見習いの給金が……思いのほか低くて……」

ジュリアはレッドにちらちらと視線を送った。近衛騎士の給金は総じてかなり高給だが、さすがに見習いはそうは行かない。そして、給金について決定権を持っているのはレッドだった。

(しまった……触れるんじゃないかな……)

「いつから哨戒につくんだ？」

「え？あれ？あ、今日の午後からです」

強引に話しを変えたレッドに対しジュリアは少し不満そうにレッドを見た。

「そうか、がんばれよ。」

レッドは足早に逃げるようにジュリアの元を離れ、一度自室へと戻っていった。

第一章 【4】

ジュリアの部屋を出た後一度自室に戻ったレッドは鎧を纏い、いつも通り近衛騎士の待機部屋に向かった。

待機部屋の中に入るとポストの他に近衛騎士が数人いたがシールドはまだ来ていないようだった。

「おはようございます。」

中の近衛騎士がレッドにあいさつをし、レッドもそれに応えた。

「おはよう、シールドは？」

「はっ、今日はまだこちらにいらしていません」

「そうか、やはり昨日は遅かったか」

そう言つと自席に座ったレッドにポストが近づいて来た。

「おはようございます。団長も遅かったですな」

ジュリアの鎧運びが思った以上に時間が掛かったため、既に時刻は昼近くになっていた。

「ああ、ちよつと用があつて朝から王都に行つていた」

さすがにジュリアの鎧を取りに行ったとは言えないのかレッドは曖昧な返事を返したが、ポストはそれ以上は聞いて来なかった。

「公都の近衛は既に体制に組み入れられたのか？」

「ええ、昨晚の内に夜の守備担当に引きついでいたようです」

ポストは答えながらレッドの近くの椅子に座った。

しばらくポストとレッドが話をしていると部屋の扉から真新しい近衛騎士の鎧に身を包んだジュリアが入ってきた。

さすがはドワーフ作というべきか、サイズもちょうど良く傍目には一人前の近衛騎士に見える。

「おはようございます!!!」

ジュリアは部屋に入ると大きな声で、誰にもなくあいさつをした。初の近衛の正式な任務を前に緊張しているのか表情が硬いように見える。

「遅いぞ、ジュリア！」

「す、すみません。鎧の纏うのに手間取ってしまつて……」

扉付近にいた短く濃い茶色の髪と掘りの深い顔立ちをした近衛騎士、バルクードに突然叱責されたジュリアは驚きのあまり硬直している。

確かに鎧は慣れないと身につけるのはなかなか難しい。バルクードもそれがわかつているのか、叱責はしたもののそれ以上は言わなかった。

「そろそろ、哨戒が戻つて来る。引き継ぎを行つて私と共に哨戒に出るぞ」

「は、はい！！」

その後、程なく哨戒に出ていた近衛騎士が二人、待機部屋へ戻つて来た。

哨戒の交代は一度に全てが交代するわけではなく、順次行い哨戒の穴が空かないようにしている。近衛の通常の職務には見張りとは見張りがある。見張りは王宮の入り口や屋上及びお王宮内の王家の私室へと続く廊下等で定位置からの見張りを行っている。また、王家の行動によっては通常見張りを立てていない場所にも立つことがある。見張りは基本的に一人で定位置に立つため、さすがに見習いに任せられる職務ではない。

今回ジュリアが行うのは二人で行動をする哨戒任務である。哨戒は二人一組となつて見張りでは目の届かない場所の見回りをする。経験の浅い近衛騎士はベテランの近衛騎士と組み哨戒から始めるのが通例となつていた。

ジュリアは戻つて来た近衛騎士二人とバルクードと共に会議卓に座ると引き継ぎを始めた。

ジュリアは引き継ぎ事項やバルクードから哨戒時の注意点等を聞きながら必死にメモを取つていた。

（あいつ、メモを見ながら哨戒する気じゃないだろうな……）

「近衛史上初の女性騎士か。なかなか似合っていますな」

ポストが孫を見るような眼でジュリアを見ながら小声で言った。

王国騎士団には女性騎士が現在も何名か籍しているが、近衛騎士団は創設以来特にそういう規則があるわけではないが女性騎士がいたことはなかった。

「そうだな」

レッドは不安そうに眺めていると、会議卓にいた四人が立ち上がり互いに敬礼をして終了した。

バルクードとジュリアはレッドとポストにも敬礼をし、哨戒のためにも部屋を出た。

(固くなりすぎだな。まあ、バルクードと一緒になら心配ないだろう)バルクードは年齢的にはレッドよりも上の三十半ばの経験豊富な近衛騎士であり、経験年数もレッドとさほど変わらない。レッドとシードはかなり若い時から近衛騎士団に入団しているため、年齢は下だがバルクードと同じ世代の近衛騎士よりも経験は上である。

「さて、俺も少し見回りをしてくる。ポスト殿はどうする?」

レッドは立ち上がりながらポストに声を掛けた。

「私はもうしばらくここにいます。久々の王宮ですからな。ここにいれば皆に会えるでしょう」

「そうか。では行って来る」

レッドは待機部屋を後にした。

近衛騎士団の団長と参謀長は哨戒の体制には入っていないが、不定期に王宮内の見回りを行っている。

レッドは王宮内や庭などを見回っている途中、たまたま通りかかった王宮の屋上に立ち寄ると屋上の端で二人の王女が中庭を見降ろしているのを見かけた。

「どうされました?」

レッドが二人の王女に声を掛けると二人はレッドの方を振り返った。

「これは、レッド殿。いえ、中庭でジュリアが哨戒をしていたのを

見かけたものですから」

第一王女であるメリルはそう言うと中庭に眼をやった。メリルはフロリアと同じ青い髪と目を持ち、顔立ちや物腰もフロリアに良く似ていた。

「ジュリア面白いよ。なんだかすぐくぎこちない動きになってる」
メリルの隣にいた第二王女であるミーナもそう言うと、レッドの腕を引きジュリアを見るように促した。ミーナはどちらかというとうォルト似であり、メリルと違い茶色い髪を短くまとめ、見るからに活発そうな王女である。

レッドもジュリアに眼をやると慣れない鎧を身につけている上にバルクードの歩幅に合わせ大股になっていて、確かに不自然な動きで歩いている。

(やれやれ……)

「申し訳ありません。王宮の警備については万全を期していますので、しばらく見守って下さい」

そう言うとレッドは両王女に頭を下げた。

「あ、いえ、申し訳ありません。そのような意味ではないのです…

…」

メリルは慌ててレッドに頭を上げさせた。

「どうしたの？」

ミーナはそのやり取りがよくわからないという感じだった。

「なんでもありませんよ」

メリルはそう言うとミーナに優しく微笑んだ。

王家の守護についている近衛騎士を、良く知っている人物とはいえ面白がって見てしまったことにメリルは罪悪感を覚えたようだったが、ミーナは近衛騎士の責務も誓いもまだ理解できていないようだった。

メリルは第一位、ミーナは第二位の王位継承権を持つ正統なこの国の王女であるが、小さい頃に王宮に引き取られたジュリアとは年齢が近いこともあり、姉妹のようにして育った。その為、ジュリア

が哨戒任務に着くと聞き興味を持って見にきたのだろう。

メリルとミーナはレッドに対しても年齢は離れているが小さい頃はよくレッドに遊んでもらっていたため、兄のように慕っていた。

二人とも小さい頃はレッドを「レッド兄様」と呼んでいたが、メリルは今は王家と近衛騎士の分別を付け、レッドを「レッド殿」と呼んでいる。ミーナは「レッド」と呼んでいるが悪気はなく、「レッド兄様」と呼ぶのをメリルに注意されたので単に「兄様」を取っただけである。

「それはそうとミーナ様、そろそろ魔法学の勉強のお時間ではありませんか？」

レッドはいたずらな笑みを浮かべながらミーナを見た。

ミーナは魔力を持つていたため、普段の勉学の他に週に一度魔法学を学んでいた。メリルは魔力を持たないため、魔法学は学んでいない。

「えっ・・・、今日はジュリアの初哨戒任務の日だし、やらなくてもいいんじゃないかな・・・」

ミーナは魔法学の勉強が好きではないようだった。

「関係ありません。駄目ですよ、ミーナ。魔法は誰でも学べるものではないのですから。魔力を持つ者はしっかりと学ばなければ」

メリルにそう言われるとミーナはふてくされながら王宮内へと戻っていった。

「せっかく魔力を持つているのに学ぼうとしないなんて。私にはうらやましい限りですのに」

メリルはそう言うとレッドに向き直った。

「それではレッド殿、私もそろそろ失礼致します」

そう言うと、レッドに軽く会釈をし、王宮へと戻っていった。

レッドも敬礼をし、メリルを見送った。

(メリルもりっぱになっただな)

レッドはもう一度中庭に眼をやると既に別の場所に移動したのかジュリアの姿はなかった。

(オレも戻るか)

レッドもその場を離れ見回りへと戻って行った。

第一章 【5】

数日後、同盟締結前日の昼前、王宮の正門を抜けた所の石橋の上でレッドと馬に跨ったシード、他に近衛騎士の五名程が話をしていた。

「それでは行ってまいります」

「ああ。最近瘴獣が頻繁に出ているとのことだ。王国騎士団の方で相当片づけたようだが、道中注意を怠らないようにしてくれ」

「わかりました」

そう言つと、シードは馬の腹を蹴り王都の道を進んで行つた。

セシル王国の国王の一行が、明日王宮で行われる同盟締結のために、王都ルキアの西にあるリーフ湖畔の街、リーフポートまで来ることになっていた。

一行はリーフポートで宿泊し、明日の午後に王宮に来ることになっている。

セシル王国の国境からリーフポートまでは西方師団が先導し、リーフポートから王宮までは近衛騎士団が先導する手はずになっているため、シード達は今日の内にリーフポートに向かい一行と共に明日王宮に来ることになっていた。

リーフポートは元老の一人であるディール卿シャロン・ディールが納めるリーフ湖沿岸の美しい街である。そして、シャロンはシードの母親でもある。

シードはディール家の子息であるが次兄であり、跡取りではないため近衛騎士に志願していた。レッドもそうであるが、近衛騎士団はその性質上、王国騎士団に比べて貴族出身者の割合は比較的多い。もともと、危険な職務でもあるため志願しているのは次兄以下の跡取り以外の者であることがほとんどである。レッドのように子息どころか当主そのものが近衛騎士となっている者は他にはいない。

(さて、俺も明日に向けて準備を始めるか)

レッドはシード達をしばらく見送ると、王宮に向かって歩を進めた。

同盟締結の議が行われることになっている謁見の間では、侍従や文官達が準備に追われていた。近衛騎士達もレッドが外に出る前に指示した通り警備態勢の見直しと手順の確認を行っていた。

「団長！！」

謁見の間の様子を伺っていたレッドに近衛騎士の一人が声を掛けてきた。

「ん？どうした、バルクード」

レッドは呼ばれた方を振り向きながら近づいてきた近衛騎士のバルクードに声を掛けた。バルクードは謁見の間で他の近衛騎士達を指揮していた。

「はい、明日の警備態勢ですが、セシル王の警護に人が割当たっていないのですが誰か付けますか？」

バルクードは手に持った警備計画書を見ながらレッドに問いかけた。

「いや、セシル側からも近衛兵が来ることになっている。セシル王の警護はその者達が行うことになっているので、こちら側で人は付けなくていい。それよりも王宮の警備を入念にチェックしておいてくれ」

「ああ、向こうからも来るのですね。承知しました。では」

バルクードは敬礼をするとその場を離れた。

（ふむ。ここはバルクードにまかせておけば大丈夫そうだな。俺もポスト殿と明日の手順を確認しておくか）

レッドは待機部屋に向かって歩き始めた。

シード達は王都からリーフポートに行く途中にある大きな森の中に続く街道を馬で進んでいた。リーフポートはこの森を抜けた先にある。特に名のある森ではあるが、広大な森であり、面積は一般的な街と同じくらいある。周りの木々は街道の上まで枝葉を伸ばし、

上を見上げると木漏れ日が眩し

い。森林浴にはちょうど良い時期ではあるが、今はリーフポートに
急ぐ必要があった。

「久しいな」

思わずシードは頭で考えていたことが口から出た。

「シード様、どうかされました？」

シードの声を聞いた近衛騎士がシードに訪ねてきた。

「ああ、すまない。気にしないでくれ」

シードは慌てて手を振った。

母親のシャロンとは三か月の一度の元老会議の際に王宮に来るた
めたびたび会ってはいたが、故郷のリーフポートに戻るのは数年振
りだった。

・・・カサツ・・・

しばらく森の中を進んでいると、脇の木陰が一瞬動く。その音に
気づいたのはシードは馬を止めた。

「シード様？」

「何かいるようだな」

シードは馬を降りると他の近衛騎士達もそれに倣った。

「瘴獣のようですね。増えているという話しは本当でしたか」

瘴気の気配に気づいた近衛騎士が回りを見まわしながら言った。

瘴獣とは動物の死骸に瘴気が取りつき異形の生物と化した、いわ
ゆる怪物である。取りつかれた動物の死骸は巨大化したり皮膚が硬
質化等の変化をもたらし、大抵は好戦的で凶暴化している。それほ
ど頻繁に発生するわけではないが、昨冬は寒さが厳しく、多くの生
き物が死んだのか最近は数が増えていた。

「探して退治するぞ」

瘴獣退治は本来王国騎士団の役目であり、この辺りでは西方師団
が瘴獣退治を行っているが、見かけておいて素通りはできない。ま

して明日は他国の王を連れてこの道を通ることになっていた。

「我らが先に行きます」

シードが進んだのを見ると二名の近衛騎士がシードの前に出て進んで行った。他の近衛騎士は荷の番の為にその場に残った。

そして、それは程なくそれは見つかった。

「バジリスク・・・」

近衛騎士の一人が呟いた。その近衛騎士の前に二匹の鋭い牙を持ち、黒い鱗に覆われ赤い眼をした瘡獣がこちらを見ていた。

バジリスクとは元はトカゲの瘡獣である。四つん這いではあるが、立ち上がれば成人の胸くらいまでの大きさはありそうだった。

「我らが」

そう言うのと近衛騎士二人がバジリスクと対峙した。シードは二人の後ろでその様子を見ている。

バジリスク達はすぐさま前にいる近衛騎士に飛びかかり牙による攻撃をしかけたが、精強を誇る近衛騎士の敵ではない。

近衛騎士の一人は経験豊富な騎士であり、バジリスクの牙や爪の攻撃をなんなく捌き倒すのは時間の問題に思われた。もう一人の近衛騎士は見習いではないがまだ経験の浅い騎士であり、バジリスク相手に押されることはないが下からの攻撃は防ぎにくく若干手こずっているように見えた。

若い騎士が上から振り下ろした剣は固い鱗に阻まれ弾かれてしまった。一度離れたバジリスクは一瞬間を置くと見た目とは違い素早い動きで若い騎士に接近した。若い騎士が身構えるとバジリスクは飛びかからずにその横を通り過ぎ、後ろにいたシードへと飛びかかった。

「あつ、シード様！！」

若い騎士が慌ててシードに声を掛ける。バジリスクは口を大きく開きシードの腕のあたり噛みつこうと大きく飛びあがっていた。

シードはそれを避けようともせず、剣を抜くと一閃、バジリスクの口を横に大きく薙いだ。バジリスクは口を裂かれるように胴体の

中央まで切り裂かれるとそのまま地面に落ち絶命した。シードは近衛参謀長としてレッド、ポストと共に近衛三騎士に名を連ねる者である。バジリスクなどもの数ではなかった。

地面に落ちたバジリスクは肉体が消滅し、後には黒い輝石が残された。

輝石とは動物の遺骸に取りついた瘴気の結晶だと言われているが、未だ確かなことはわかっていない。魔力を吸収する性質があり、魔力を吸収した輝石は魔石と呼ばれ、さまざまな用途に使用される。

「シード様！！お怪我はありませんか！！」

シードは輝石を拾い上げ、近づいて来た若い騎士に渡した。

「我々の責務は攻めることではなく、守ることだ。敵を後ろに逸らすようなことはするな」

「も、申し訳ありません」

「シード様、こちらも片付きました」

同時にもう一匹のバジリスクを相手にしていた近衛騎士が剣を収めながらシードに歩み寄った。

「よし、戻るぞ」

そう言つとシード達は他の近衛騎士達の待つ街道に戻り馬を進めた。

日は既に傾き始めていた。

「瘴獣のせいで少し時間が掛かってしまったな。セシル一行より後に到着するわけにはいかない。少し飛ばそう。」

そう言つとシードは馬を腹を蹴り速度を上げ、他の近衛騎士達も後に続いた。

第一章 【6】

しばらくして、シード達が森を抜けると正面に大きな湖、リーフ湖が見えて来た。湖面は日の光を反射し直視出来ない程の輝きを放ち、湖畔にはリーフポートの白い街並みが広がっている。シード達はリーフポートへと続く街道をかなり早い速度で馬を走らせていた。リーフポートに着くとシード達はディール卿シャロン・ディールの館に向かった。街の雰囲気を見る限りセシル一行はまだ到着していないようだった。

途中大勢の人達がシードに挨拶をしに近づきシードもそれに応えていた。この街を収める元老の息子でもあり、近衛参謀長でもあるシードはこの街では英雄的な存在であった。

リーフ湖の沿岸に面した街並みの中央にディール家の館はある。シード達は館の入り口にある大きな石造りの門をくぐり、よく手入れされた庭に敷かれた石畳の上を進んで扉の前に着くとその扉を軽く叩いた。

「どちら様でしょうか？」

少しの間をおいて、中からシードのよく知っている男の声が聞こえた。

「近衛参謀長シード・ディールと申します。セシル王国国王御一行を王宮へ先導する任のため参りました」

シードは中の人物に聞こえるよう少し大きめの声で名と目的を告げた。するとすぐに扉は開き中から背は低いが正装を身に纏った年老いた男、先ほどの声の主が現れた。

「これはシード坊ちゃま。お帰りなさいませ」

そう言つと男は深々と頭を下げた。

「……ロバス。今は任務中だ。坊っちゃんまは止めて欲しい。参謀長と呼んでくれないか……」

シードは後ろの近衛騎士からの気まずい雰囲気を感じながら小声

でロバスに言った。ロバスは長年ディール家の執事を務めこの館の一切の雑務を取り仕切っていて、シードのことも子どもの頃からよく知っていた。

「あ、これは申し訳ありませんシード参謀長。中でディール卿がお待ちです」

ロバスは慌てて言い直し、シード達を中へと招き入れた。

中に入るとすぐに広いロビーとなっており、壁には絵画や観葉植物、魔石のランプがあり、正面の階段は二階へと続いている。階段の両側に一つづつ扉があり、側面の壁にもいくつかの扉があった。

シード達が内部に歩を進めると、正面の階段の上から美しい赤色のドレスを身に纏い、シードと同じ金色の髪を肩まで伸ばした五十歳半ば程の女性、ディール卿シャロン・ディールがシード達を迎えた。

「おかえりなさい。シード」

シャロンはシードに微笑んだが、シードはそれには答えずシャロンの目を見据える。

「近衛参謀長シード・ディール、セシル王国国王御一行の先導の任のため参りました」

それはシードのシャロンに対する抗議の表れのようにもあった。

「ふう。相変わらずですね、シード。あの人にそっくり。…わかりました。では…シード参謀長、先ほど西方師団から早馬が参り、あと一刻程で到着との連絡を受けました。館に部屋を用意しましたから到着までの間こちらで待機して下さい」

シャロンは、シードは態度を崩さないと悟ったのか、今回は息子として扱うのは諦めたようだった。『あの人』とは、八年程前に病死したシードの父親であり近衛騎士でもあったキーバス・エル・ディールのことである。

シャロンはロバスに案内するように指示し、二階へと戻って行った。シード達は案内された部屋に入りひとまず腰を落ち着ける。シ

ードは館に自室を持っているが、ロバスに頼み他の近衛騎士達と同じ客室を準備してもらっていた。

「シード様、よろしいので？ 久々の御実家ですから我々に気にせず
に……」

ロバスが部屋を出ると近衛騎士の一人が口を開いたが、シードは手でそれを制した。

「もう、母親に甘える歳ではないよ。それに今は職務中だ。すまな
いな気を遣わせてしまって」

シードはそう言つと近衛騎士達もそれ以上は言わなかった。

シードと近衛騎士達はセル王国の一行が到着するまでの間、先
導と護衛の手順を打ち合わせ
た。

……コンコン……

「シード参謀長、セル王国国王の一行がリーフポートに到着され
たとのことです。間もなくこちらにいらっしゃいます」

ちょうど一刻程経った頃、部屋の扉が叩かれロバスがセル一行
が到着したことを告げた。

「わかりました。すぐに参ります」

シードは参謀長としての返事を返すと他の近衛騎士達と共に部屋
を後にした。門の所まで来ると既にシャロンが出迎えの為に来てお
り、シードは近衛騎士達を正面の道に沿って整列させると、自らは
シャロンの一歩後ろに下がりセル国王を出迎える体制を整えた。
程なく正面の道の先に西方師団の小隊に先導された馬車と、セル
ル王国の護衛の兵士と思われる一団が見えてくる。

「シード、……参謀長。いらっしゃったようです」

「はっ」

一行は一度シャロンの屋敷の前で止まり、二十名前後の護衛の兵
士達もそれに続いた。先導していた西方師団の騎士達が馬をおり、

シャロンに敬礼した後、後ろの馬車に道を譲り、馬車がシャロンの目の前まで来た。馬車の従者が一礼をして後ろの扉を開けると、歳は五十半ばながら髪はほぼ白く、中肉中背の体にセシル王国の正装を身に纏ったセシル国王が馬車から降り立ちシャロンに歩み寄った。近衛騎士達はシードも含め全員が敬礼の姿勢を取ったが、セシル国王は特に気に掛ける様子はなかった。

「あゝ、シャロン・デイル殿だったかな」

「はい。この国で元老を務めます、シャロン・デイルと申します。シャロンとお呼び下さい、ビント・セシアル閣下」

シャロンはそう言うのと深々とお辞儀をした。

「うむ。そっちは？」

ビントはシードの方に視線を移した。

「はっ、明日の王都までの先導を務めさせていただきます、ダルリア王国近衛騎士団参謀長シード・デイルです」

シードは答えると改めて敬礼をしたが、それほど興味がなかったのかビントは「そうか」と一言言うとシャロンに向き直った。シャロンと姓が同じであることには特に気が付かないようだった。

「さっそくで申し訳ないが、長旅で少々疲れた。少し休ませてもらいたいのだが」

「かしこまりました。では、夕食までまだ時間がありますので、それまで部屋でお休み下さい。護衛の方々はこれにいるロバスが案内致しますのでお待ち下さい」

シャロンは後ろで控えていたロバスに護衛の兵士を案内するよう伝え、自らはビントの案内役となり館へと入っていった。

その間にシードはセシル一行をここまで先導してきた西方師団の小隊長に歩み寄ると、小隊長は馬は降り敬礼してきたためシードもそれに応えた。

「先導ご苦労。一つ王国騎士団に依頼したいことがあるのだがよいか？」

「はい、なんでしょう？」

「王都からここに来る途中の森でバジリスクに遭遇した。それらは退治したのだが、明日セシル一行を連れて同じ道を通ることになるので王国騎士団の方でも見回っておいてもらえると助かるのだが」「わかりました。皆に戻り、大隊長の指示を仰ぎます」「よろしく頼む」

小隊長はシードに再度敬礼し馬に跨ると、他の王国騎士達と共に師団の皆へと戻っていった。

王国騎士団の小隊長と近衛騎士団の参謀長であるシードでは圧倒的にシードの方が立場が上だが、王国騎士団と近衛騎士団は別の組織であるためシードに王国騎士団への命令権は例え末端の騎士に対しても無い。その為、シードも王国騎士団に対しては依頼することしかできず、小隊長もその場で了承することはできない。

シードが小隊を見送って館の方に向き直ると、ロバスと護衛の兵士達も館と街に確保した宿に別々に移動を開始していた。いくら広い屋敷とはいえ、護衛全員を館に泊めることはできないため、街にも宿を数部屋確保していた。

「よし、我々も行動に移ろう。全員計画通りに明日の出発まで細心の注意を払って警備に当たってくれ」

『はっ』

近衛騎士達は返事をするると各々の持ち場へと移動し、シードも館へと戻っていった。

その夜、シャロンの屋敷の食堂では小規模ながら歓迎の宴が催された。その宴にはビントだけでなく従者と館に泊まっている護衛の兵士も招待された。街で宿泊している兵士達は宿の方で豪華な食事が用意されることになっている。

厨房では、リーフポートの街から腕自慢のシェフが呼び寄せられその腕を振るっていた。リーフポートは観光の街としてリーフ湖から取れる魚を使った料理を名物としており、館の食堂にある大きなテーブルに所狭しと並べられた魚料理を前にセシル一行も満足の様

子だった。シード達近衛騎士は食堂の入口及び壁際で警備の任に
いている。

「すばらしい料理だった。魚がこのあたりの特産なのかね？」

ビントはひと通りの食事が終わると、食後に供された葡萄酒と自
らの葉巻を楽しみながらシャロンと話始めた。

「はい。リーフポートはリーフ湖の畔にありますので、この街では
リーフ湖の魚の料理を名物としております」

「なるほど。来る時に通ったがとても美しい湖だったな」

ビントは葉巻を吹かした。

「話しは変わるが、この街には騎士団はおらぬのかね？街中に入る
と先導してくれた騎士以外は見かけなかったが？」

「この街に、ですか？街所属という意味ではありません。憲兵隊が
街の警備を行っているくらいです。ですが、リーフポート周辺は西
方師団の防衛範囲となっておりますので、瘴獣を街中で見かけるこ
とはまずありませんからご安心下さい」

「ほう。この周辺は西方師団だけで防衛しているのかね？」

「はい。接する国境は貴国のみですので」

「なるほど。さぞかし精強な騎士団なのだろうな。規模も大きいの
かね？」

「……申し訳ありません。今はまだ同盟前ですので、これ以上は申
し上げられません。明日、同盟後に国王ウォルトにお聞きください」
そう言うときシャロンは頭を下げた。

「いや、これは申し訳ない。深い意味はないのだが、今回の同盟は
軍事同盟なのでな。こちらの軍事についても興味を持ったただけだ。
確かに同盟前でいろいろ聞くのは拙速せつそくであった」

ビントは軽く頭を下げた。

「まあ、近い内に軍事同盟だけでなく文化や交易の面でも交流を持
てるようになりたいものだな」

ビントは葡萄酒を一口飲んだ。

「そうでございますね。ダルリアとセシル王国は歴史的にも敵対し

たことはないのに不思議と交流もありませんでした。今回の同盟を期に両国が関係が深くなることを心より願っております」

「うむ。そうだな」

ビントは表情を変えずに頷いた。何か他のことを考えているようにも見えたがシャロンは気に止めていなかった。

その後しばらく談笑が続いた後、宴は終了した。

第一章 【7】

翌日、リーフポートからの王都へと向かう朝、館の正門の前にセシル王国の馬車とその周りに護衛の兵士達、そして先導のシード率いる近衛騎士が通り側に控えていた。ビントはシャロンと共に何か話しをしながら館から出て来た。

「それではビント閣下、王都までの道中お気をつけ下さいませ」

「うむ、帰りの料理も楽しみしているとシェフに伝えておいてくれ」

セシル一行は帰りもリーフポートで一泊することになっている。

「かしこまりました」

シャロンは深々とお辞儀をするとビントは軽く頷き馬車へと乗り込んだ。シードはセシル一行の準備が出来たことを確認すると近衛騎士達を先導の配置につかせ、馬車の従者に付いてくるように伝え、とデイル家の館を後にした。

シードがリーフポートを出発してから半日程が経過した王宮の待機部屋の前でレッドはバルクードと話をしていた。

「バルクード、そろそろ到着だ。準備は？」

「問題ありません。儀仗ぎじょうの近衛は全員正門の前で整列済みです」

「そうか。さつき早馬が来てあと半刻程で王都内に入るようだ。俺も陛下と共にすぐに行く。ポスト殿にも大公殿下をお連れするように伝えてくれ」

「はっ。了解しました」

バルクードはその場を離れ、ポストの元へと向かって言った。レッドもウォルトの執務室へと向かう。

今日は他国元首を迎える儀礼に則り、国王及び王妃、そして大公が正門で出迎えることになっていた。儀仗を行う近衛騎士達も普段

の鎧の他に、上から純白で背中だけでなく全身を覆うようなマントを羽織っている。普段は手が使い難いため背中だけのものだが、何かしらの儀式や祭事の際はこのマントを着用することになっている。レッドは執務室の前まで来ると扉を軽く叩き要件を告げた。

「レッド・エストールです。セシル王国の御一行がもうじき到着されます。ご準備の方をお願いします」

「わかった。すぐに行く」

ウォルトがレッドの呼びかけに応えると、程なく扉が開いた。

普段の格好とは違い、ダルリア王国国王としての正装を身に纏い手には杖を持っている。ウォルトの後ろには同じく正装を身に纏ったフロリアがいた。

「予定通りだな。ハースは？」

「ボストがお連れします」

「そうか。では行こう」

「はっ」

レッドはウォルトとフロリアを先導し、王宮の入り口に向かった。入り口に到着すると既に近衛騎士が正門の前の石橋から中庭、王宮の入り口掛けて等間隔に整列している。

レッドもその列の王宮入り口側の端に共並んだ。ウォルトとフロリア、そして先に来ていたハースは入り口の前で到着を待った。程なくして正門の先からシード達近衛騎士に先導されたセシル王国の馬車の一行が視界に入ってくる。馬車は石橋の前で止まり、先導してきた近衛騎士は整列している近衛騎士の最後尾に共に並んだ。馬車からセシル国王ビンント・セシアルが降りたつとレッドの近衛騎士達に対する号令が響く。

「セシル王国国王ビンント・セシアル閣下に敬礼！！」

レッドの号令をと同時に並んだ近衛騎士が一斉に剣の抜き胸の前で垂直に立て、ダルリア王国流の儀仗礼の構えを取った。

ビントは儀仗礼を行っている近衛騎士の間を進みウォルトの前まで来ると固い握手を交わした。

「よくぞ参られた、ビント殿」

「なんの、こちらこそ申し出を受けて頂き恐悦の至りです」

その後、ハースやフロリアとも挨拶を交わし王宮へと入っていた。

「直れ！！」

レッドの号令と共に近衛騎士達は儀仗礼の構えを解いた。

「よし、全員持ち場に付け。シード、帰って早々悪いがセシルの兵の方達にこちらの警備計画を伝えておいてくれ」

「了解しました」

近衛騎士達は各々の持ち場へと移動を開始した。

（帰るまで、忙しくなるな……）

他国の王族に何かあったとなれば、ダルリア王国の威信に係わる。王宮警備の最高責任者であるレッドとしては気の抜けない二日間になりそうだった。

その夜はダルリア王国の王族と王都ルキアに住む元老及び他の貴族や有力者を交え、セシル国王を歓迎する宴が盛大に催された。

メリル、ミーナ両王女もビントに紹介され、その後には宴に参加している元老達が次々にビントに挨拶を行っていた。ビントはその全てに愛想よく返事をしている。その中にドイル卿ガートン・ドイルもあり、交易で財を成す者として機会を逃すまいとしているのか、しばらく二人で語り合っていた。

（仕事熱心なことだ）

近衛騎士達は宴が行われている王宮の広間を中心に有事並の警備態勢をとっており、レッドもこの場で陣頭指揮を取りながら、その様子を見ていた。

しばらくすると、王宮の見回りを行っていたシードがレッドの元に来たので、レッドはその場の指揮をシードに託し今度は自らが王宮を見回りへと向かった。ひと通り見回った後に待機部屋に戻り自席で一息を入れていると、ちょうど哨戒任務に出ていたジュリアが

共に行動していた近衛騎士と部屋に戻り、待機していた近衛騎士達と引き継ぎを行うと引き継いだ者達が哨戒任務に出ていった。

「レッド様、お疲れのようですね」

引き継ぎを終えたジュリアがレッドに声を掛けて来た。

「ん？ああ、そうだな。そう見えるか？」

「少しだけ。私も疲れました……」

「お前はいつも通り哨戒任務に出ているだけだろう？」

ジュリアはまだ見習いのため、今回の強化警備には加わっていないかった。

「そうなんです、他のみんなの緊張感が伝わって来て、疲れてしまいました……」

「そんなんでどうする。お前もいずれ、こういう警備にも加わることになるんだぞ」

「……、はい」

ジュリアは少し自信なさそうに返事をした。

「この後は休憩か？」

「はい、休憩です」

「なら、部屋で少し睡眠を取れ」

「はい、そうします……」

そう言うとジュリアは部屋を出ていった。それと、入れ違いでポストが待機部屋へと入って来た。

「お疲れ様です、団長。ジュリアがなんだか疲れた様子でしたな」

ポストはそう言いながらレッドの机の前に椅子を置き座った。

「ああ、皆の緊張感に影響されたらしい」

「はっはっは、まだ若いですな」

「ああ、だが慣れていってもらわなければな。宴の方はどうなってる？」

「そろそろ終了でしょう。ピント閣下もお疲れのようですよ」

「そうか。明日、調印式が終わったらすぐここを発たれるそうだから、それほど遅くまではやらない」

か

「しかし、えらい強行軍ですな。同盟の調印なのに一泊でとんぼ返りとは」

「まあな。まあ、いろいろ事情もあるんだろう」

「そうですね。それはそうと、団長。団長も少し休まれたらどうです？昨日から準備やらなにやらでほとんど寝てないのでしょう？」こはしばらく代わりますぞ」

「そうだな。そうさせてもおう。シードにも戻ったら少し休むように言っておいてくれ」

「承知しました」

レッドは待機部屋を出ると自室へと戻っていった。

自室に戻ると鎧を脱ぎ、葉巻に火を付け椅子に座りながら窓から星空を眺めた。

(俺もジュリアのことは言えないな)

レッドは自嘲気味に笑った。レッドとしても団長になってから国同士の行事での指揮は初めての経験であり、緊張感からかいつになく疲れていた。

葉巻を吹かし終えカーテンを閉めるために窓際に近寄ると、中庭にセシルの兵士と近衛騎士が話しをしているのが目に入った。

(何をしているんだ？)

近衛騎士は何やら数か所を指差しながら話しをしていた。

(警備態勢の確認か？……まあ、多少なら仕方ないか。向こうとしても自国の王の安全が掛かっているしな)

レッドはそのままカーテンを閉めると、短い睡眠に入った。

第一章 【8】

翌朝、宴のあった大広間でダルリア王国、セシル王国の軍事同盟に関する調印式が行われた。

大広間の中央には石造りの細かな彫刻が施された立派な机と椅子が二つ並べられ、その両側にダルリア国王ウォルトとセシル国王ビントが立っていた。そして、見届け人及び進行役としてダルリア王国大公のハースが中央にいた。周りには警備についている近衛騎士の他にフロリア達王族と昨日の宴に招待されていた元老、貴族達が見守っていた。

「それでは、両陛下。これよりダルリア王国、セシル王国の軍事同盟の調印式を始めます。よろしいですか？」

ハースは両国王に椅子に座るように促した。

「うむ、始めてくれ」

「こちらも問題ない」

ウォルトの返事の後にビントが続き、共に椅子に座った。

「それでは、まず軍事同盟の文書を私の方で読み上げさせて頂きます」

ハースはそう言うと、机の上に置かれていた条約文書を手にとった。

ダルリア王国、セシル王国軍事条約

一、両国間に平和協定を結び、互いに不可侵とする。

一、安全保障上問題の無い範囲で互いの軍備を公開する。

一、他国からの侵略時には同盟国からの要請に基づき、援軍派遣及び物資の供給を行う。

一、同盟に基づく行動については、その後の見返りを一切求めない。

一、軍事に関わる外交を行う際は、事前に相手国の了承を得る。
一、両国間の同意なく他国への侵略を行った場合には、当同盟は破棄されたものとする。

以上

ハースは同盟文書を読み終わると、机に戻し自らも椅子に座った。同じ文書はもう一枚あり、各々を両国王の前に置かれた。

この文書については事前に互いの国に連絡済みの内容となっていた。
た。

「内容に問題、疑問点が無ければ署名をお願い致します」

ハースがそう言うのと両国王は文書を一読し自らの署名欄に署名すると、文書を交換し相手方の文書にも署名を行った。最後に文書はハースに手渡され、ハースが署名に問題が無いことを確認すると、最後に見届け人として自らも両方の文書に署名し、両国王に手渡した。

「これでダルリア王国、セシル王国の軍事同盟が正式に成立しました」

ハースがそう言うのと周りから大きな拍手が沸き起こった。

ビントは立ち上がりウォルトに近づくとウォルトも立ち上がった。

「これを機に今後は交易や文化の面でも交流を深めたいですな」

「是非ともそう願いたいですね」

ビントはウォルトに手を差し伸べ、ウォルトはその手を固く握った。

「今度、我が国の交易品のリストでも送らせてもらいますよ。それはそうと、同盟に基づきそちらの騎士団を少々見学させてもらいたいのだがよろしいかな？こちらに来る際にリーフポートの前に一泊させてもらった騎士団の皆が我々とも近く有事の際には連携を取ることになると思うのでそこが良いのだが」

「西方師団の砦のことかな。良いでしょう、連絡しておきますので見学していつてください」

「では、拜見させてもらいます」

「この後はすぐ発たれるので？」

「ええ。慌ただしくて申し訳ないのだが、そうそう国を空けておくわけにもいかないもので」

「そうですか。せっかいですから王都の方でもご案内したかったのですが」

「今度落ち着いたらゆつくり来させて頂きますよ。ウォルト殿も機会がありましたら是非セシルへお越しください」

「そうさせて頂きます。では近衛に送らせましょう」

「いやいや、大丈夫ですよ。道はもう覚えましたから、我々だけで帰れます」

「しかし……」

「近衛の主任務はあなたの守護でしょう。そうそう何度もお借りするわけにはいかない。私も自らの兵を連れてきていますから、同盟国間の移動くらい問題ありませんよ」

「そうですか」

ウォルトは尚も近衛を着かせようとも考えたが、あまり強引に勧めてもセシルの兵を軽んじていると思われるわけにもいかなかったため、それ以上無理強いはしなかった。

ウォルトとハース、それにフロリアはビントを王宮の出口まで送って行った。出口には既にセシル王国の馬車が用意され、周りにはセシルの近衛兵達が囲んでいる。

「では、ビント殿お気をつけて」

「うむ。ウォルト殿のご健勝もお祈りしていますぞ」

そういうとビントは馬車に乗り込んだ。馬車は兵達に先導されながらゆつくりと王宮を後にした。

ウォルト達も馬車が見えなくなるまでその場で見届けると、王宮へと戻って行った。

第一章 【6】

同盟当日の晩、レッドは近衛騎士達を通常の体制に戻すと、自室に戻っていた。ここ数日、調印式の準備や強化警備でほとんど休んでいなかったため、少し長めの休みを取ることになっていた。

椅子に座りいつも通り葉巻を楽しんでいると唐突に部屋の扉が叩かた。

「ポスト・バンテスです」

（なんだ？）

「入ってくれ」

レッドが返事をするに扉が開き、ポストとシードが部屋に入ってきた。二人とも鎧を着ておらず軽装だった。

「なんだ、シードも一緒か。どうした？」

「ポスト殿が良い酒があるから、久しぶりに三人で飲もうというのでな」

シードも休憩の時間としているのか、レッドに対する口調が友人に戻っていた。

「これです。都市同盟からの交易品で、今の時期にしか手に入らない逸品ですぞ。調印式も終わったし、たまには良いでしょう」

ポストが手に持った酒をレッドに見せ、そのまま部屋の端にあるテーブルの上に酒を置いた。

「ほお、悪くないな。ちょうど飲みたいと思っていたところだ」

レッドも椅子から立ち上がり、壁際にある棚よりグラスを三つ取り出してテーブルに置いた。

三人でテーブルを囲むソファに座り、ポストが持参した酒を飲みながら語り合った。しばらくするとシードが今回の同盟について話を始めた。

「しかし、今回のセシル王国との同盟は急な感じがしたんだが、前々からあった話なのか？」

シードはレッドのグラスに酒を注いだ。

「国家間の同盟の話だから俺も詳しくは聞いていないが、確かに急な話ではあったらしい。セシル王国側から直接元老院宛に申し出があったとのことだ」

レッドが注がれた酒に口を付けると、酒の瓶を取りシードのグラスに注いだ。

「ああ、すまない。しかし、セシル王国とはいままで特に交流があったわけではないだろう。しかも今回の同盟は軍事同盟だ。普通に考えたらまず交易や文化の交流があつて、信頼関係を気づいたら軍事的な同盟に発展するものだと思うが」

そう言つとシードも注がれた酒に口を付けた。

「セシル王国も帝国の驚異に晒されておる。国境線の長さだけをいえばダルリア以上だ。我々と同盟を組むことにより帝国を牽制したのである」

ポストはそう言いながら自分のグラスに、もはや何杯目かわからない酒を注いだ。レッドとシードは相当飲んでいるポストを心配して酒を注がないようにしていたが、ポストは気にせず手酌で飲み続けていた。

「ポスト殿、飲み過ぎじゃないか？」

レッドがポストに注意を促すと、「量の内じゃない」と言つて受け流した。レッドもポストの尋常じゃない酒の強さは知っているためか、その場それで引き、話を戻した。

「確かに、同盟の話を受け入れるか否かは元老会議でもさうとう揉めたらしい」

レッドは近衛騎士団長として元老会議の議事録を閲覧する権限を有している。

「揉めたとは？」

「何を目的とするか、だ。確かに帝国軍対ダルリア・セシル連合軍の全面衝突となれば、同盟国としてセシル王国も防衛範囲となったダルリアにとっては、逆にセシルは重荷となってしまう。セシル側

は自国防衛で手一杯だろうから、こちら側に兵を回せないだろうしな。しかし、そもそも全面衝突を起こさせないことを目的と考えると話は違ってくる。セシルと同盟組むことにより、帝国は我々のどちらかに攻め入る場合は両国を相手にしなければならず、同盟によって伸びた国境線にまなく軍を配置しなければならぬ。帝国にとっては攻めにくくなったのは確かだ」

「なるほどな。帝国との衝突後ではなく、その前段階の予防的措置としての同盟、ということか」

シードを手に持ったグラスを見つめながら言った。

「陛下は相当迷ったようだが、他にも元老の一部は同盟関係により交易の相手国が増えることも魅力のようだな。その強い後押しもあったようだ」

レッドは苦笑いしながら言った。

「帝国はここ十年程他国への侵略は行っておらん。であれば最悪の事態を想定するよりも得策ということじゃろう」

レッドとシードの話を黙って聞いていたポストは、さらに酒を注ぎ足しながら補足した。

その晩は遅くまで三人で語り合った。ポストは普段は大公宮にいるため、こういう集まりは久々であり話は弾んだ。

「さて、酒も無くなったし、そろそろ寝るか。明日は公都に戻らねばならぬ」

既に日も変わった頃、ポストはグラスの酒の飲み干すと立ち上がった。三人は常に緊急時に備え酔うほど飲むことはしないため、レッドとシードはある程度で飲むのを止め、ほとんどポストが飲んでいった。しかし、ポストも特に酔った様子はない。

「そうだな」

シードも続いて立ち上がった。

「それでは団長」

ポストはそう言うのとシードと共に敬礼をし部屋を出た。

レッドは窓の外を眺めると、深淵を月が照らしていた。

第一章 完

第二章 【1】

ここはベルドラス帝国の帝都ベルド、ダルリア王国とセシル王国が同盟を組む二か月程前、王宮の敷地内にある評議会議場である。

会議場には盗聴を防ぐため窓はなく、入り口も一つしかない。その入り口も内側と外側に見張りの兵が立てられている。

その薄暗く殺風景とも言える内部を、壁に掛けられた魔石の灯りが照らしていた。会議場の中央には大きな長方形の会議卓があり、そのまわりには男女十名の帝国の民の代表者たる評議員達が座っている。そして入り口に近い席に、評議員ではないと思われる赤毛で顔立ちの整った若い男が座っていた。

「皆、揃ったようだな……。では、陛下からの話しを聞こう」

評議員の議長である初老の男、ガイズ・ボドが赤毛の若い男に話をするように促した。

「はい。『事は順調に運んでいる。ダルリア王国へ外征軍を派遣する準備を急ぐ。評議会の意思を示せ』とのことですよ」

「『事』とは？」

別の評議員が若い男に問いかけた。

「ダルリア王国を支配下に置くために必要な『事』です」

「詳しくは明かせないということか……」

「ふむ。ダルリア王国の軍勢の規模はいかほどか？」

ガイズが誰にもなく聞くと同時に評議員達が各々の意見を述べ始め、議論が始まった。

「東西南北の四方面師団が各一万から二万、王都と公都を護る防衛師団が数千程、それに増援専門の緊急展開師団が一万数千程、総勢七万から九万といったところでしょうな。錬度もかなり行き届いているとのことだ」

「我々の半分にも満たないが小国としてはかなりの規模だな。まあ、

我々がそうさせているのかもしれないが」

「ダルリアには我が帝国のように他国に進軍する外征軍はありません。全てが王国防衛のための軍で、帝国の国境警備軍と同種の役割を担っています」

「我々がダルリアを攻めた場合、最初から全軍をまとめて相手にするわけではないだろう。対峙することになるのはどれくらいだ？」

「前線となるであろう国境付近で対峙するのはおそらく、北方師団と緊急展開師団となり数は三万数千程だろう。南方師団と東方師団は距離的に見て短期間に援軍に来ることはできない。西方師団は距離的には近いがセシル王国と国境を接しているため同じく援軍にはこれまい。王都と公都の防衛師団はその性質上、我々がダルリア国内に進軍するまで動くことはないだろう」

「こちら側の動かせる外征軍の規模は？」

「南方の外征軍の四万程といったところか」

「それではダルリアの動員数と大差無いではないか。制圧は不可能だ！」

「陛下は南方の国境警備軍も動員せよとの仰せです」

評議員達の議論を聞いていた若い男が割って入った。

「国境警備軍を？それでは南方、セシルとの国境警備はどうするのだ？」

「セシルとの国境はルファエル山脈を挟み、それを越えるのは難しく、またセシル軍自体も小規模のため短期間であれば問題無いとお考えです」

「確かにそうかもしれないが、しかし……」

……

少しの沈黙が流れた。

「仮に攻め込むとして、名分はめいぶんどうするのだ？もつともな名分がなければ他国への信用を失う。他の国全てを敵に回すことになりかねない」

「ヒリーフの件がよいかと」

若い男が答える。

「ヒリーフ…、ヒリーフの奪還ということか。多少強引ではあるが、確かに詳細を知らない他国には名分として成り立つかもしれない」

……

今度はしばらくの間沈黙が流れた。評議員の中にはダルリア王国への侵攻に賛同しない者もあり、積極的にダルリア王国への侵攻を承認する動きにはならなかった。

ベルドラス帝国では国王の提案に対して、帝国の民の中から選出され、さらに国王に任命された評議員達が国内外の情勢などを鑑みて検討し、承認もしくは却下する。

但し、国王が評議員の最終的な任免権を持つため、確かな理由が無い限り簡単には却下できなかった。

「評議員の意思をお示し下さい」

沈黙がしばらく続いた後、国王側の使いでもある若い男が議論を先に促した。若い男は評議員ではないため、国王の意思を評議員に伝えることはあっても自分の意思を伝えることはない。

「ダルリアへの侵攻か。この大陸に覇を唱え、その支配者たる我々が平和と安定をもたらすという建国以来の帝国の悲願達成のためには、確かにダルリアは目障りな存在だ」

彼らの言う『平和と安定』が、どういったものであるか、誰に対するものであるかは定かではない。

「確かにロビエスと対峙する前に必ず潰しておかなければならない存在ではある」

「うむ。あまり野放しにしておいてロビエスと手を組まれると厄介だ」

「ダルリア王国を制圧、もしくは支配下に置ければその先の都市同盟も降伏するだろう。そうなれば後はセシルとロビエスのみ」

「セシル王国はルファエル山脈のせいで攻め難かった、ダルリア制圧後にダルリア側から回り込めば攻めやすい。そうなれば残りはロビエスのみとなる」

評議員達は尚も議論を続けたが、その意思は侵攻の承認に傾きつつあった。しかし、議長のガイズはしばらく前から目を閉じ、顔を顔の前で組んでいた手の上に載せ何か考え込んでいるようだった。

ガイズは帝国内の幹部としては珍しく穏健派であり、また十二年前のダルリア王国への侵攻の失敗時からの評議員でもあるため、簡単に賛同できないようだった。

「ガイズ殿？」

評議員の一人が声を掛けると、ガイズは語り始めた。

「私としては賛同しかねる。十二年前もダルリアへ侵攻したが失敗した。あの国の騎士団はあなどれん。そのことは陛下も御存じのはずだ」

「では、帝国がまた失敗すると？」

若い男はガイズに視線を送った。

「そうは言わん。我々も十二年前と比べ軍の規模は拡大し、組織化も強化した。だが、圧勝とはいくまい。陛下はなんと？」

「我々の軍の被害は最小限に抑えられる。期間もそれほどはかからない」と

「なるほど。それが『事』というわけか」

そう言つとガイズは顔を上げた。

「ふむ。評議員達よ、もう議論は出尽くしたかな？意見は割れているが、これ以上続けても統一見解は出まい。各々心の内は決ったかな？」

ガイズは評議員達を見まわし、反応を伺った。

「では評議員達よ、法に則り決をとる。ダルリア王国への侵攻に賛成する者は起立を」

ガイズがそう言つと賛成する評議員達は立ち上がった。ベルドラス帝国の評議会では意見が割れた場合は起立による決を取り、過半数を占めた意見が採用される。

起立した人数を胸の内で数えたガイズは、複雑な表情を浮かべていた。

「わかった。座ってくれ」

起立した評議員達を座らせると正面にいた若い男に視線を送った。

「では、ザイルよ。評議会の意思を伝える……」

そう言つとガイズは若い男ザイルに評議会の意思を伝えた。

第二章 【2】

セシル王国との同盟から一月ほど経ったとある日、レッドはいつものように近衛騎士の待機部屋の自席に座っていた。既に日も大分傾いていて、王宮の一階は王宮を囲む外壁のために日は差し込まず、大分暗くなって来ていた。そのため、少し前に王宮内の灯り用の魔石が一斉に点灯した。王宮の明りは、待機部屋から少し離れたところにある部屋の内部で、魔法陣による陣魔法によって制御されている。

そしてレッドの目の前、待機部屋の中央にある会議卓ではシードがジュリアに説教を行っていた。

レッドはその光景を、片肘を付き頬を拳にのせた状態で眺めていた。

（あいつは、いったい何をやらかしたんだ？）

レッドが待機部屋に入って来た時にはすでに説教は始まっていたため、レッドも事情がわかっていなかった。ジュリアも見習いとはいえ、近衛騎士の正式な任務に着くようになってから、シードも以前にも増して厳しくなっていた。

（最近の定例行事みたいになって来たな。しかし、今日はシードも本気だな）

「わかったな。もう二度とさぼるんじゃないぞ！！」

「いえ、決してさぼったわけでは……」

「同じことだ！！」

シードはジュリアの言葉を遮り叱りつけると、待機部屋を出て行った。ジュリアはしばらく椅子に座りうつむいていたが、結局レッドの元にやって来た。

「で、何をやらかしたんだ？」

レッドの目の前に来ても何も言わないため、レッドの方から話を促した。

「今日、魔法の講義がある予定だったんです……」

嗚咽を我慢しながら絞り出しているせいか、いつになく聞き取りづらい声でジュリアは話始めた。

「さぼったのか？」

「違います!!」

軽く聞いたレッドにジュリアは心外だと言わんばかりに突然声を張り上げると、レッドは思わぬ反応に少し驚いた。

「じゃあ、なんだ？」

「昨日は遅番で、今日は夕方からの哨戒の任でその前に魔法の講義を受ける予定だったんです」

「それで？」

「それで…、昨日も哨戒の任のことでシード様に怒られたので、今日は失敗しないようにしようと思っけら前に前もって哨戒の経路を前もって回っていたんです」

(哨戒経路の下見?ま、まあ、ジュリアなりの予習か……)

「そうしている内に、いつのまにか魔法講義の時間を過ぎてしまっけ……」

「なるほどな。それでシードがいつもに増して怒ってたのか」

「でも、決してさぼろうと思っけたわけでは」

「わかってるよ。おそらく、シードもな。逆に、お前はなんでシードがあんなに怒ってたかわかってるのか？」

ジュリアはシードが怒っている理由をよく理解していないようであつた。

「魔法の講義に行かなかつたから……」

「無論、それもある。でもそれだけじゃない。そもそも近衛騎士団は王家を守護すると紋章に誓い、それを責務とする組織だ。学校などの教育機関とは違っけ」

「それは、わかってます」

当然と思われることをわざわざ言われたことが気に障つたのか、ジュリアは少しむきになったようだった。

「いいや、わかってない。魔法学校でも魔法の講義は行っているが、それは当人に与えられた権利だ。だが、同じ魔法の講義でも近衛騎士団で行う場合は違う。それは任務であり義務だ。決して与えられた権利ではない」

「……」

レッドの言おうとしていることを理解しようとしているのか、ジュリアは涙目ながらレッドの目をじっと見つめ黙って聞いている。先ほどのむきになった感じは消えていた。

「事の重大さに気付いているか？ 今回の件は、別にお前もさぼろうと思っていたわけではなく、他の事に集中していて失念してしまっただということなのだろう。だが、任務、いや責務を失念するとはどういうことか。これが陛下や王妃様、王家に関わることだったらどうするのだ？ 失念していたという理由で王家の方々に危険が及んだらどうするのだ？ 確かに魔法の講義は王家には直接関係はない。だが、こういうことがいずれ近衛本来の任務に繋がらないとも限らない。だから、シードはあんなに怒っているんだ」

ジュリアは黙って聞いていた。自分が犯したことの重大さに気付いてきたのか、その眼は涙で溢れている。

「……、シード様に……もう一度、謝ってきます」

「ああ、そうしてこい」

ジュリアはレッドに敬礼をするとそのまま待機部屋を出て行った。（少し厳しく言い過ぎたかな。そもそもジュリアはまだ紋章に誓っているわけではないしな）

近衛騎士団では正式に入団する際は王家の紋章に近衛の誓いを立てるが、見習いであるジュリアはまだ紋章への誓いは行っていないかった。

（しかし、魔法の講義か。懐かしいな。俺とシードも昔、よくさぼってポスト殿に説教されたな……）

近衛騎士団では魔法の講義は本人に魔力の有無にかかわらず、見習いや若い騎士に対して近衛騎士団所属の魔法騎士が定期的に行っ

ている。

魔法には火、水、風、光、そして闇を無から具現化する自然魔法、魔法陣と呪文を必要とするが組み合わせ次第でさまざまなことが可能な陣魔法、そして生物の体に直接影響を及ぼす特殊な回復魔法が存在する。

それぞれに一長一短があり、使いこなせば非常に便利な能力である。

自然魔法はこの世の基本となる六つの要素を具現化するだけの魔法であり、それ以上のことはできないが、具現化したい要素を頭の中でイメージするだけでよく、場所は問わない。そのため、使う者の集中力にもよるが即時に発動できる。

陣魔法は魔法陣と呪文に意味を持たせることにより、王宮の灯りのように魔石を一斉に点灯または消灯させたり、水晶球と組み合わせることで遠隔地との会話を行ったりなどさまざまなことができるが、魔法陣を描くために場所を選び、さらに呪文を唱える必要があるため発動までに時間が掛かる。

回復魔法は外傷を治癒する魔法ではあるが、魔力で外傷を直接治す魔法ではなく、生物がもともと持っている自然治癒能力を魔力により強制的に促進させる魔法である。そのため、回復魔法を掛けられた者は体力を相当消耗する。例えば、骨折を回復魔法で治癒すると体力の消耗により数日は動けない。また、体力の落ちている重傷者に回復魔法を掛けると、体力がさらに奪われるため逆に即死すらさせてしまう可能性がある諸刃の剣のような魔法でもある。

この三種類の魔法に共通することは、全て術者には魔力が必要ということである。魔力は使い方を学ぶことはあっても、後から鍛えられるものではない。魔力の量は生まれ持ったものであり、レッドやジュリアのように魔力を持たないものは一生自分の力では魔法を使うことはできない。魔力を持つものは少なくはないが、ほとんどの者が微量で、せいぜい釜戸に火を点けたり、夜小さな明りを灯したり、夏の暑い時にそよ風を起こす程度であり、魔法を戦闘に仕え

る程の魔力を持つ者となると非常に少ない。そういったことが出来る者は一般では魔法士と呼ばれる。魔法での戦闘を専門とする騎士を魔法士とは別に魔法騎士というが、二百五十名程いる近衛騎士団でも魔法騎士は一割にも満たない。

何故魔力を持たないレッドやジュリアが魔法の講義を受けているかという点、自ら使うことはないが戦いの際に相手が魔法士や魔法騎士だった場合の対処方法を学ぶためである。

レッドが昔を思い出し物思いに耽っていると、先ほど部屋を出て行ったシードが部屋に戻ってきた。手には厚めの何か資料のようなものを持っている。

「団長、ジュリアに何か言われたのですか？」

「ん？まあ、近衛の心構えってやつをちよつとな。何故だ？」

「それで。先ほどジュリアが私を追ってきて、泣きながら謝ってきたもので。団長がジュリアに説教をするとはめずらしいですね」

レッドは痛いところを突かれたのか、一瞬バツの悪い表情をしたがすぐに表情を戻した。

「別に説教というほどのことでもないが、いつまでも甘いことは言っていないしな。メリル様のことを除いても早めに一人前になつてもらわないと。近衛の人手不足は慢性的だ……」

「確かに」

シードは作戦立案者として肌で感じているせいもあるのだろう、その表情は複雑だった。

近衛騎士団の行動には元老院の承認は必要なく、全て国王の判断に委ねられている。現国王ウォルトにはそのような意識はまったくないが、時の国王が悪王であり独裁的思考を持っている場合は近衛騎士団はその手足となる組織となってしまう可能性がある。そのため、構成人数については法で厳しく制限されており、構成人数の増減には元老院の承認が必要であった。

近衛騎士団長であるレッドでさえ、人員については欠員の補充以

外はできない。ジュリアも例外ではなく、見習いとして近衛騎士団に入る際に、わざわざ元老院の承認を得ている。

「話しは変わりますが、団長。諜報部隊から先ほど報告資料が届きました」

そう言つとシードは手に持っていた革ひもで綴じられた厚い資料をレッドに手渡した。

第二章 【3】

「どこからのだ？」

レッドはシードから諜報部隊の報告資料を受け取りながら確認した。

近衛騎士団はその配下に近隣諸国の情報収集を行う諜報部隊を持っている。これは十二年前の帝国の侵攻時にダルリア王国側が気付くのが遅れ、対応が後手に回りヒリーフの村を奪われるということになってしまった反省から、情報収集専門の部隊として編成された組織である。

近衛騎士団の下部組織のため王家直属となるが、元老貴族達もその存在は知っている。しかし、元老会議配下としてしまうと、行動には元老会議の承認が必要となり、諜報部隊の活動に即時性がなくなってしまうため近衛騎士団の下部組織となっていた。

そして、その運用は近衛騎士団に任されており、今回のように定期的に報告を受けていた。

「ベルドラス帝国に派遣されている部隊からです。いくつか気になることが書かれています」

シードは小声でそう言うと、レッドの前に置かれた資料を開いて見せた。レッドもシードに合わせて声を小さくした。

「帝国の外征軍に動きがあるようです」

「外征軍に？どこに向かっている」

レッドは怪訝な顔をした。帝国の外征軍は防衛のための部隊ではなく、他国への侵攻専門の部隊である。その軍に動きがあるのは放っておける話ではなかった。

「いえ、まだ帝都ベルドに軍を集めている状態です。目的は不明です。」

「他国への侵攻か、それとも単なる演習の可能性もあるか」

「どうしますか？」

「情報がそれだけでは、まだ何もできないな。下手にこちらから動くわけにはいかないだろう」

王国騎士団の師団の一つである緊急展開師団は、王国騎士団の中で唯一元老会議の承認無しに国王の独断で防衛派遣を行うことができる。しかし、レッドにはウォルトが緊急展開師団を動かすには情報が少ない判断し難いと思えた。

「確かに、そうですね」

「帝都からダルリアとの国境まではどれくらいかかる？」

「軍の規模にもよりますが、帝都を出発してから十日から十五日と行ったところでしょうか。現状だとどこに向かうとしても、帝都の出発までさらに数日は掛かると思われます」

逆にダルリア王国の王都ルキアから帝国との国境までは、緊急展開師団の規模で五日程である。緊急展開師団はその名の通り、常に進軍可能な体制で王都の砦に待機している。

「時間的な余裕はあるな。引き続き帝国の監視を続けさせ、少しでも動きがあったら報告するように指示しといてくれ」

「了解しました」

シードは待機部屋を出ると諜報部隊への指示に向かった。諜報部隊には実際に近隣諸国に出向いて情報収集している部隊と、王宮内に待機して各派遣部隊からの報告を受け、それを報告資料にまとめる部隊がいる。派遣部隊からの報告は王宮内にある通信球を通して行われる。また、近衛騎士団からの指示は待機している部隊に対して行われ、そこから派遣部隊に通達される。

（何もなければよいが……）

レッドは心に不安が広がっていたが、周りに悟られないように、しばらく目を閉じ平静さを取り戻そうと努めていた。近衛騎士団の団長が不安感を露わにすれば、それはそのまま近衛騎士達に伝わり、その士気に係わって来る。また、常に冷静な判断を求められる立場にもあるため、感情に頭が支配されるわけにはいかなかった

た。

しばらくそうしていると、待機部屋の扉が叩かれ侍従の女性が入りレッドの元にやってきた。

「レッド様、そろそろお食事の時間になります」

レッドはゆつくりと目を開いた。

（もうそんな時間になるのか）

今日はウォルトに食事を共にするように誘われていた。近衛三騎士は信頼関係を深めるという意味も込めて、時々王家と食事を共にしていた。

レッドはあまり食事をする気分ではなかったようだが、今日はそういう訳にはいかなかった。

「わかった、すぐに行く。シードは？」

「シード様は、先ほど向かわれました」

レッドは立ち上がり侍従と共に部屋を出て、王家の食事の間の最上階に向かった。最上階から窓の外を見ると既に太陽は完全に沈み、空には星が瞬き、そしてその下にある王都ルキアは大通りを中心に魔石の明りが輝いていた。その様は星空が地面にまで広がったように美しかったが、見慣れた光景のためか、帝国のことが気になるのかレッドが窓の外を見ることは無かった。

「どうぞ」

侍従は食事の間まで来ると扉を開け、レッドを中へと促した。食事の間の壁は白を基調として

いて、天井と壁にある魔石のランプの光を反射し明るさを増幅させていた。部屋の中央には食事用の大きなテーブルがあり、その上には壁と同じ真っ白はテーブルクロスが掛けられている。テーブルの周りには六脚の細かな装飾の施された椅子が並べられ、各椅子の正面のテーブルの上にはいくつかの空の白い皿と銀のナイフとフォークが数組置かれていた。正面の壁の端にはもう一つ扉があり、その先は王家の食事用の厨房がある。そして、テーブルの傍らには先に

来ていたシードが立っていた。まだ王家の人間が来ている様子は無い。

「シード、陛下達は？」

レッドは部屋に入ると、シードに声を掛けながらその横に立った。「まだ、いらしていません」

そのままシードと二、三話しをしていると、レッドが入ってきた扉から国王ウォルト、王妃フロリアの後に二人の王女が入ってきた。レッドとシードは敬礼をし全員が席に着いたのを確認すると、自らも席に着き、シードもそれに続いた。ウォルトは奥の窓際の席に、フロリアはその斜め前の位置に

座り、その隣にメリルとミーナが並んで座った。レッドはフロリアの正面に座り、シードはメリルの正面に座っている。この位置関係はいつも同じだった。

ジュリアも近衛騎士団に志願する前はこの席に参加し、シードの横に座っていた。志願後もフロリアからの願いで何度かジュリアも誘われていたが、その度にレッドが丁重に断っていた。本来この席には三騎士以外は参加しないため、近衛騎士団に志願した後は例え王家に育てられた身のジュリアとはいえ、近衛騎士団長として特別扱いを許すわけにはいかなかった。最初の頃はフロリアは厳しすぎるとレッドに話しをしてきたが、レッド自身も自分の子のように思っていたフロリアはレッドの立場にも理解を示し、最近は何も言わなくなっていた。

ウォルトは全員が席に着くと、近くにいた侍従に食事を運ぶように伝えた。程なく奥の扉より料理がオードブルから順に運ばれて来た。全体的な食事の内容は、王家の食事としては割と質素であり、贅沢を好まないウォルトとフロリアの意思が反映されている。

食前酒とオードブルとして出て来た貝と生野菜のマリネが席に着いた全員に配られると、ウォルトは顔の前で両手を組み合わせた。ウォルトが大地母神マテルへの感謝の祈りを捧げ始めると、全員がそれに続いて祈りを捧げた。祈りが終わると食事と語らいが始まっ

た。

「ねえ、レッド。さっきジュリアに会ったら涙目だったけど何かあったの？」

食事が始まるのとほぼ同時に気になっていたのか唐突にミーナがレッドに聞いて来た。レッドはマリネを口に入れようとしていた手が止まり、ゆっくり皿に戻した。周りを見渡すと、ウォルトは何も言わずメリルも気にはなっていないようだったが食事を続けている。しかし、ミーナは興味津々の目でレッドを見つめ、フロリアも複雑な表情でレッドを見ている。レッドは隣りを見るとシードと目が合った。

(何だその目は……俺に説明しろということか……)

「あ、あの、あれはですね。何といたしますか……」

近衛騎士のことをまだよく理解していないミーナと、ジュリアの近衛騎士団への入団に本心では賛成していないフロリアには説明し難いと思ったのか、レッドが言葉を濁していると、黙っていたウォルトが口を開いた。

「ミーナ、近衛騎士は厳しい職務だ。ジュリアも一人前の近衛騎士になるために日々精進しているのだろう。それを面白がったり、興味本位で聞くものではない」

「……はい」

ウォルトがミーナを窺めると、ミーナは少し頬を膨らませながら引き下がったが、その顔は納得していないようだった。

「ありがとうございます」

レッドはウォルトの助け船に素直に礼を述べ、隣りを見るとシードも胸を撫で下ろしたように見えた。その後話題を変えたメリルの話で談笑していると、オードブルが終わりメインディッシュとなる焼いた鶏肉を薄切りにした肉料理が配られた。

その肉料理を食べながら話しはミーナの魔法のことへと移っていった。

「ミーナ、魔法の方はもう大分使えるようになったのか？」

「え……？た……多分」

「多分とは？」

ウォルトの顔は既に国王の顔ではなく、父親の顔となっており、フロリアも母親の顔でミーナを見ていた。ミーナもその視線に少し驚いた様子で落ち着きなく周りを見ると、メリルは助け舟は出さず食事を続けており、レッドとシードもミーナとは視線を合わせずに食事を続けていた。

「むう……。じゃあ、ちょっとだけ見せるね」

『えー！』

どこからも助け舟が出ないと悟ったミーナは、両手を顔の正面に伸ばし魔法の構えを取った。それに驚いたレッドとシード、それにメリルは同時に声を上げた。

「まあ、見せられる程に上達していたのですね。いつもはなかなか見せてくれないのに。是非とも見せて頂きたいですね」

フロリアは嬉しそうな笑みをミーナに向けた。フロリアも魔法が使えるため、ミーナの魔法は気にかけていたようだった。

『えー！』

フロリアの言葉にまたも三人の声が重なった。

「ミーナ様！ちなみになんの魔法をされようとしてますか？」

「光の魔法」

「な、なるほど」

レッドは慌てて魔法の確認をした。ミーナの魔力は魔法の講師が驚嘆するほど秘めているが、まだ制御し切れるほどの知識と経験が不足していた。そのため火や水、風の魔法では制御を誤ると危険だが、光の魔法と聞いてレッドは少し胸を撫で下ろした。光の魔法は文字通り光球を生み出し周りを照らす魔法である。失敗しても目が眩む程度で大参事にはならない。隣りではシードがミーナには悟られないように周りの侍従達に部屋を出るように合図していた。

既に全員が食事を止め、ミーナに視線を移していたが、レッドとシードは片手をテーブルの上に置き、視線はミーナの手の先を直視

しないようにしていた。

ミーナが両手の間に光をイメージし始め、集中している。
「光よ!!!」

……バシユツ!!!……

「きゃ!!!」

ミーナの掛け声と同時に手の間に拳大の光球が生まれたが、そのまま維持できずに一瞬で炸裂させた。

(やっぱり……)

レッドは魔法の発動の瞬間にテーブルの上に置いた手で目を覆い事無きを得た。シードも同様だった。周りを見るとウォルトもさすがにミーナの言うことを真に受けたわけではなかったのか、同様に直撃を手で防いでいたが、フロリアとメリル、そして魔法を発動した本人のミーナが目を押さえて呻いていた。

「だ、大丈夫ですか?」

「ご、ごめんなさい……」

ミーナが誰にもなく謝ると、同時にレッドの後ろにある廊下へと続く扉の外で足早に近づく足音が聞こえてきた。そして、その足音が扉の所で止むと勢いよく扉が開き、二人の近衛騎士が飛び込んできた。

「大丈夫ですか!!! いったい何が!!!」

近くで哨戒していた近衛騎士なのだろう、部屋から漏れた光に何事かと慌ててやって来たようだった。

「大丈夫だ、心配ない。ご苦労。職務に戻ってくれ」

「は、はっ!!!」

レッドは近衛騎士を手で制すると、労をねぎらい職務に戻させた。近衛騎士達には何があったのかわからなかったが、その場にレッドとシードがいたため、そのまま下がり元の職務へと戻って行った。

「ミーナ……」

「もっと精進します……」

なんとか目を押さえながら漏らしたフロリアの言葉に、ミーナは目を押さえたまま応えた。

「ミーナ、これからは魔法の講義の際は私も同席致します」

「うむ、そうしてくれ」

「は、はい」

フロリアとウォルトの言葉をミーナはおとなしく受け入れた。

その後、食事はデザートへと続き、食事が終わった後もしばらくの間談笑が続いていた。

しかし、レッドはこの王家の団欒の場に、何故か不安を覚えずにはいらなかった。

第二章 【4】

ダルリア王国で王家とレッド達が夕食を共にしていたころ、ドイツ・ベイルは自らの執務室の窓から、闇夜の帝都の見下ろしていた。

入り口の扉近くにはザイルが報告のために来ている。

「間もなく外征軍の準備が整います」

「…そうか」

ドイツは帝都を見降ろしたまま返事をしが、ザイルからはドイツの背中しか見えずその表情は伺いしれなかった。

「それと、例の件は評議会には伝えなくてよいのですか？」

「必要ない。ダルリアには諜報部隊がいるという話もある。漏洩を防ぐためにも必要な人間だけが知っていれば良い」

「しかし、評議会の方も情報が足りずに陛下の案の承認に支障をきたしてきています」

「それはお前の方でなんとかしろ」

ドイツはあまり評議会には関心がなかったのか、感情の無い声で返事をした。

「……………はっ」

ザイルが複雑な表情で返事を返すと、ドイツは振り向いて自らの執務機の席についた。

「それより、外征軍の準備が出来次第ダルリアに向けて進軍を開始しろ」

ドイツの表情からは苛立ちが感じられた。否決されることは稀だが評議会の承認を逐一取らなければならないことに煩わしさを感じているようだった。

「はっ。数日中には進軍を開始します」

「ダルリアの国境に近づいたら一旦進軍を停止し、向こうの動きを待て」

「よろしいのですか？ダルリアに早期警戒させることになるのでは？」

「構わん。向こうが先に動いてくれたほうが好都合だ。もし動きが無ければ予定通り行動しろ」

「かしこまりました」

ひと通りの報告が終わるとザイルは一礼をし部屋を後にした。

「もうすぐだ。ダルリアは我が手に落ちる……」

残されたドイズは背もたれに体を預けると、自らを落ち着かせるように一人呟いた。

王家との夕食から数日後の昼過ぎ、レッドは王宮の敷地内にある近衛騎士達の宿舎の前にいた。レッド一人ではなく、他にバルクードと若い近衛騎士が三人、そしてジュリアの姿があった。全員の手には支給されている近衛騎士の剣ではなく堅い木で作られた木剣が握られていた。

今日は若い近衛騎士達の剣術の鍛錬の日だった。近衛騎士団では定期的に若く経験の浅い近衛騎士達に三騎士や経験豊かな近衛騎士が稽古を付けている。そして、今日はレッドとバルクードが講師役として稽古を付ける日だった。

「次！！」

レッドの前には若い近衛騎士が一人、両膝を付き肩口を押さえている。今しがたレッドに打たれたところだった。近衛騎士団長であるレッドに若い近衛騎士ではとても相手にならないが、鍛錬の時のレッドは容赦がない。

「はい！！お願いします！！」

打たれた近衛騎士が後ろに下がると、ジュリアがレッドの前に対して木剣を両手で構えた。今しがた、若いが自らよりも経験のある近衛騎士が打ちのめされたのを見ても、ジュリアは怯んだ様子は

ない。

「手加減しないぞ」

レッドは小声そう言いながら片手で剣を構えると、ジュリアは静かに頷いた。

しばらく二人は対峙していたが、先に動いたのは予想外にもジュリアだった。構えていた剣を横に薙ぎ、レッドの剣を軽く弾いて牽制し、その後一瞬下がると剣を腰に構え一気にレッドの腹を目掛けて突いてきた。その速さもかなりものである。

(悪くない。牽制なんて覚えたのか。が、まだまだ)

レッドは弾かれた剣を素早く戻すと、ジュリアの突き出した剣に当て軌道を逸らすと同時に体を回転させその突きをかわした。ジュリアは勢い余ってレッドの横を通り過ぎ、バランスを崩して倒れそうになるのを、なんとか踏みとどまって振り向いて再度レッドと対峙した。

「戦法も速さも悪くないが、せっかく牽制したのなら後ろに引かずにそのまま突いたほうがいい。例え一瞬とはいえ下がれば間が出来てしまう。相手によってはその間が致命的になる」

「はい!!」

レッドが気付いた点を指摘するとジュリアは返事をしたが、表情が曇っていた。レッドは次を待っているが、ジュリアはなかなか仕掛けない。

(なんだ? その困ったような表情は?)

ジュリアは何かを考えているようだが、やはり動かない。

(ひょっとして、今で俺に勝つつもりだったのか……)

「来ないなら、俺から行くぞ!」

レッドは少し呆れたようだったが、気を取り直し自らの剣を振り上げ一歩踏み出ると、ジュリアの頭部目掛けて剣を打ち下ろした。片手とはいえかなり強めの斬撃だった。それに対しジュリアは自らの剣を振り上げ、レッドが打ち下ろした剣を防ぎにかかる。ジュリアは打ち下ろされた剣に対して真横には受けず、剣先を少し下げて

斜めに受けた。すると、レッドの剣はジュリアの剣を滑り軌道を逸らされ、その隙にレッドの剣とは逆側に逃れ体制を立て直した。

(よし、すっかり習得しているようだな)

この受け方は以前にレッドがジュリアに教えた防ぎ方だった。ジュリアは成人男性の剣士と比べると、どうしても腕力に劣る。相手の剣をまともに受ければ力で押し切られてしまうだろう。しかし、この受け方であれば力勝負にはならず、うまくいけば相手は体制を崩し反撃に出ることもできた。

再度ジュリアとレッドが対峙すると、今度はジュリアの方から仕掛けた。レッドに対して剣を横に薙ぎ、レッドがそれを剣で受けると、その後は連続で突きを混ぜながら攻撃を仕掛けてきた。レッドはそれを下がることなく剣で受けている。個人的にも相当鍛錬を積んでいるのか、ジュリアの攻撃の一つ一つには基本が備わって来ていた。

(相変わらず速い。斬撃も大分重くなってきたな)

レッドだけでなくシードも認めるほどにジュリアの剣技は速い。錬度はともかく速さだけなら既に中堅の騎士ほどである。天分の才に加えて本人の努力もあり、上達の速度もかなりのものだった。だが、それでもレッドとまともに剣交えるには程遠い。

ジュリアが連撃の中で剣を振り上げレッドに斬りつけると、レッドはそれを難なくかわし、ジュリアの胸を横に一気に薙いだ。

「くっ……………」

ジュリアは声にならない呻き声を上げると、両膝から前に崩れ落ちた。木剣は切れることはない

が、その分衝撃をまともに受けるため痛みはかなりのものになる。

「悪くはなかったぞ」

「……………くっ」

レッドは既に四つん這いになっているジュリアに声をかけたが、呻き声のような返事が返ってくるだけだった。

「……………いつまでもそうしているな。下がれ！」

「は……はい！」

レッドはこういう時に決して助け起こしたりしない。ジュリアもそれがわかってしているのか、なんとか立ち上がるとお腹を押さえ、苦しそうな表情をしたまま後ろの他の近衛騎士達がいるあたりまで下がった。

「よし。つ…?」

レッドは次の近衛騎士を呼ぼうとした際に、走りながら近づいてくるシードの姿を目に捕えた。何かと思っただのかレッドの方から近づくと、シードはレッドに顔を寄せ耳打ちした。

「どうした？」

「帝国の外征軍が進軍を開始しました」

「なに？どこに向かってる？規模は？」

「目的は不明ですが、ダルリアとの国境方面に向かっていきます。規模は、正確な数字ではないですが、三万から四万とのこと」

「……………わかった。俺は陛下に報告する。お前は帝国の過去の資料を集めておいてくれ」

「わかりました」

シードはそう言うて来た道に戻って行った。

レッドは振り向いてバルクード達の方に向き直った。レッドとシードの会話が聞こえた訳ではないようだったが、雰囲気から察したのかバルクードが仕切り始めていた。

「バルクード！ここは任せろ！」

「はっ！」

レッドは剣術の稽古をバルクードに任せると足早に王宮へと入っていった。

第二章 【5】

レッドは王宮内に入ると、真つ直ぐウォルトの執務室へと向かった。ウォルトは一日の午後を執務時間に充てているため、この時間は大半が執務室にいる。

レッドは執務室の前まで来ると扉を叩き、中のウォルトに声を掛けた。

「レッド・エストールです。危急の要件があります」

「入れ」

レッドは中からの返事を確認すると、すぐに部屋へと入った。中には都合よく執務中のウォルト以外は誰もいなかった。

「どうした？」

執務机にいたウォルトは執務の手を休め、視線を机の上からレッドへと移した。

「先ほど、ベルドラス帝国に派遣していた諜報部隊からの報告がありました。それによると、帝国の外征軍に不穏な動きがあるのとことです」

「不穏な動き？詳しく話せ」

ウォルトはレッドの言葉に怪訝な表情を返した。

「報告によると、一月程前から帝都ベルドに招集されていた外征軍が南下し、ダルリアとの国境方面に向かっているとのこと。状況が変わらなければ十日から十五日程でダルリアとの国境に到達します」

レッドは簡潔に現在の状況を報告した。それを聞いていたウォルトは、右肘を付きその手で眉間を押さえた。帝国の外征軍が動いたことは、国境を接する隣国の王として、樂觀視できることではない。

「帝国の目的は判明しているのか？」

「いえ、現在調査中です」

「帝国はここしばらく他国への侵攻を行っていない。お前の考えは？」

「なんとも言えません。帝国は過去にも演習目的で国境付近に軍を展開したことがあります。ただ、…」

「ただ、なんだ？」

「はい、外征軍の動員数が過去に前例の無い規模です」

「どのくらいだ？」

「正確の数字ではありませんが、三万から四万とのことです」

「四万っ！！帝国が南方展開している外征軍のほぼ全軍ではないか！！！」

帝国軍は主に二つの軍に分かれている。一つは隣国との国境の防衛を主任務とする国境警備

軍、そしてもう一つは他国への侵攻を主任務とする外征軍である。

それぞれの規模は、国境警備軍十万、外征軍が南北に各四万、総勢十八万を誇る。また、それ以外に国王直属の親衛隊と、要人暗殺などを主任務とする暗殺部隊がいて言われている。

国境警備軍の数が膨大だが、帝国は国土が広大であり他国と接する国境線も長大であるため、過大というほどではない。

「帝国がそのまま侵攻してくれば、北方師団だけでは防ぎきるのは困難か」

ダルリア王国騎士団は帝国からの侵攻に備え、帝国との国境警備を主任務としている北方師団には他の方面師団に比べて倍の人員を配置している。しかし、それでも二万程である。

「おそらく、ですが……」

「先に動けば侵攻の口実を与えることになりかねない……か？」

「はい」

「確かに、それが帝国の狙いなのかもしれない……。わかった、後はこちらで引き取る。お前は引き続き情報収集にあたってくれ」

「はっ、承知しました。失礼します」

国土防衛は近衛騎士団ではなく王国騎士団の責務である。レッド

にはこれ以上深入りをする権限はなかった。

レッドが部屋を出た後にウォルトは侍従を呼ぶための呼び鈴を鳴らすと、程なく侍従が執務室に入ってきた。

「お呼びでしょうか？」

「ルークを呼んでくれ。それと三日後に緊急の元老会議を開く。元老達に連絡しておいてくれ。三日で来れない者たちには通信球を用意させよ」

「かしこまりました」

侍従は一礼すると部屋を出た。ルークとは、王国騎士団団長ルーク・バントエストである。

その日の夕方、レッドは待機部屋にいた。ウォルトはレッドからの報告の後、緊急展開師団は派遣せずにルークに状況を伝え、ルークは北方師団に警戒態勢を取らせた。ウォルトの権限だけでは北方師団を動かすことはできないが、状況を伝えればルークの王国騎士団長としての権限で警戒態勢を取ることができる。

レッドはその報告を先ほど聞き、その後は腕を組み目をつむって何かを考えていた。隣の席ではシードが過去の帝国資料を整理している。レッドも少し前までは同じように帝国の資料を読んでいたが、今は手を止めていた。

（やはり、帝国には暗殺部隊が存在するとみるのが妥当か。我々も早めに警戒態勢と取ったほうがいいな…）

「シード、王宮の警備態勢も引き上げてくれ」

レッドは体勢を変えず、隣の席に座るシードにだけ聞こえる声で伝えた。

「良いのですか？王宮内にはまだ事情を知らない者も大勢いるのでは？」

近衛騎士団は王国騎士団とは違い王宮内で活動している。その為、常時王宮内の文官や侍従とも接している。近衛騎士団が警戒態勢に移行すれば王宮全体に動揺が走ることになるだろう。シードはその

ことを気にしているようだった。

「そうだが、だからといって帝国に暗殺部隊がいる可能性がある以上、のんびり構えているわけにはいかない。その部隊が動けばここを直接狙って来る可能性が高い。近衛には箝口令かんこうれいを敷いておいてくれ」

「確かに。わかりました。王宮の警備態勢を警戒段階に引き上げます」

王宮を守護する近衛騎士団の警備態勢には平時態勢、警戒態勢、有事態勢の三段階が存在し、通常は平時態勢で警備を行っている。

「ジュリアは外しますか？」

「いや、まだいい。こういう経験も必要だ。それより、諜報部隊に引き続き帝国の情報を収集し、少しでも動きがあればすぐに報告を入れるようにも伝えてくれ」

「わかりました。大公宮はどうしますか？」

「同じ態勢を取らせる。それは俺の方から伝えよう。シードは王宮の態勢を整えておいてくれ」

「わかりました」

レッドはシードの返事を確認すると、大公宮への連絡のために通信室へと向かった。

通信室とは、遠く離れた場所と会話するために設けられている部屋であり、待機部屋からは少し離れているが、同じく王宮の一階にある。部屋の内部の床には魔法陣が刻まれており、その要所には魔法が埋め込まれている。そして、その中心には実際に通信を行うための通信球と呼ばれる水晶球が、石で作られた台座の上に置かれている。これと同じ設備がダルリア国内の主要な都市及び王国騎士団の各砦に設置しており、この魔法陣による陣魔法によって遠隔地との会話を行うことができる。

レッドは、魔石の光を感知するために薄暗くなっている通信室に入ると中に常時待機している通信官に声を掛けた。普段通信球を使用する際は前もって通信官に連絡がいくが、今回はレッドが唐突に

入ってきたため通信官は少し驚いたような顔をしていた。

「大公宮と繋いでくれ。それと、繋いだら少しの間席を外してくれ
るか」

「は、はい。少々お待ち下さい」

通信官はそう言うのと床に描かれた魔法陣に手をかざし、『意味のある言葉』を唱え始めた。すると、魔法陣の要所に埋め込まれた魔石が言葉に呼応するように外側から内側へ順に青白く光り始めた。そして魔法陣にある魔石が全て輝くと最後に魔法陣の中央にある通信球が光を放ち、通信球より声が聞こえてきた。

大公宮です。接続を確認しました

くぐもった声ではあるが、言葉を聞き取るには問題はない。通信官は接続を見届けると部屋をた。

「近衛騎士団長、レッド・エストールだ。至急、副団長と話がしたい」

これは、レッド様。了解しました。ポスト様をお連れします。少々お待ち下さい

「わかった」

レッドがそう言うと、通信球の接続は一度切られた。

(便利なものだな)

使い慣れているとはいえ、魔力を持たず魔法を使えないレッドはたびたびそう感じていた。しばらくすると先ほどとは逆に魔法陣の内側から外側に向かって魔石が光り始め、最後に中央の通信球が光ると声が聞こえてきた。

>>ポスト・バンテス、参りました。<<

「ポスト殿、先に人払いを頼む」

「はっ、少々お待ち下さい」

通信球からポストが大公宮側の通信官に外に出るように伝えてい
る声がかすかに聞こえてきた。レッドは通信球から聞こえてくる声
と音で向こうの通信官が外に出たのを確認すると、レッドの方から
声を掛けた。

「ポスト殿、至急の通達がある。既に伝え聞いているかもしれないが、帝国軍がダルリアとの国境付近に向けて軍を進めている。目的は未だ不明だが、近衛として警備態勢の段階を引き上げることにする」

>> 帝国軍が？ 侵攻して来る気配があるのですか？ <<

「まだわからない。通常の演習の可能性もある。ただ、規模が三万から四万と大きい。侵攻する意思があるとすると帝国の暗殺部隊が動かないとも限らな

い。近々元老会議が開かれるかもしれんが、移動の際も十二分に注意してくれ」

>> なるほど、わかりました。大公宮の警備態勢を急ぎ引き上げます <<

「ああ、よろしく頼む。以上だ」

>> 了解しました。では、失礼します <<

そう言うつと通信球の接続は切られた。レッドは外で待っていた通信官を呼び、礼をいうとそのまま通信室を出ていった。

第二章 【6】

ウォルトは朝から執務室の机に座り、眼を閉じ何かを考えていた。レッドから報告を受けてから三日が経ち、今日は緊急の元老会議が開かれることになっている。

この三日間の間、帝国軍は着実にダルリア王国との国境に近づいて来ていたが、未だ目的は判明していなかった。それ故にウォルトも行動を起こすことができず、苛立っていた。無論、帝国軍が侵攻して来ないに越したことは無いが、侵攻して来る意思があるのであれば、手遅れになる前に緊急展開師団を派遣し備えるべきである。しかし、緊急展開師団を派遣することにより、帝国軍にダルリア侵攻の口実を与えてしまう恐れもあり、ウォルトはその狭間で苦悩していた。

どれくらいそうしていたらだろうか。既に昼を回り始めたころ、扉を叩く音にウォルトは目を開けると外から女の侍従の声が聞こえて来た。

「陛下、元老の皆様がお揃いになりました」

「わかった。すぐに行く」

ウォルトは立ち上がると、部屋を出て元老院へと向かった。

元老院内の会議室には、既に大公ハース・シルクス、ドイル卿ガートン・ドイル、デイル卿シャロン・デイル、セイバル卿テッド・セイバルが会議卓に座っていた。ある程度の状況は伝え聞いているのか、全員が厳しい表情をしていた。他の元老ゴート卿ダニエス・ゴート、バイライト卿ファン・バイライトは領地が三日で来れる範囲ではないためこの場にはいない。

ウォルトが部屋に入ると元老達は立ち上がり、深々とウォルトに一礼しウォルトが座るのを確認すると全員は再び席に着いた。ここは定例の元老会議が開かれると部屋とは異なる部屋である。ウォル

トと元老達が座っている会議卓は半円形をしており、円の欠けている側には石の台座に載せられた通信球が五つ、会議卓と同じように半円形に並べられている。床には全面に広がる巨大な魔法陣が描かれており、五つの通信球を使用して同時に五か所と遠距離の会話ができるようになって

いた。今日この場に来られなかったゴート卿ダニエスとバイライト卿ファンは通信球を通して参加することになっている。

ウォルトはこの場にいる元老達を一度見ると、近くに控えていた通信官に声を掛けた。

「繋いでくれ」

「かしこまりました」

通信官は魔法陣の中心に手をかざすと、『意味のある言葉』を唱えた。魔法陣は通信官の言葉に呼応し要所の魔石が光りを放ち、最後に五つの通信球の中央寄りの二つが青く輝きを放った。

<<ダニエス・ゴートです>>

<<ファン・バイライトです。接続を確認しました>>

ダニエスとファンは既に準備をしていたのか、通信球が接続されるとすぐに本人達の声が聞こえて来た。通信官はそれを見届けると、ウォルトと元老達に一礼し部屋を出て行った。

「よし、では緊急の元老会議を開始する」

ウォルトは元老会議の開始を宣言した。

「陛下、まず現在の状況を教えて頂きたい。申し訳ありませんが現状把握が正確に出来ていません」

ハースがウォルトに現状の説明を求めた。ハースの住む公都はここからちょうど三日程の距離であり、連絡を受けてすぐに公都を出たため状況を詳しく知る程の時間的余裕がなかった。

他の元老達も同様のようだった。

「そうだな。では、まず現状を説明する。一月程前から帝国の外征軍が帝都ベルドに集まり始めていた。外征軍が帝都に集まること自体はそれほど珍しいことではないが、その外征軍が南下を

開始し我々との国境に向けて軍を進めている。近衛の報告によると、三日前の時点で到着まで十日から十五日程とのことだ」

「外征軍の規模はどれくらいなのでしょう？」

「シャロンがウォルトに訪ねる。」

「正確な規模は近衛が調査中だが、三万から四万程だ」

「三万から四万…。相当な規模ですね。帝国から何か意思表示はあったのですか？」

「シャロンは外征軍の規模を聞き改めて事の深刻さを認識したのか、表情が先ほどにも増して厳しくなった。」

「いや、何も無い。侵攻するつもりなのか、演習なのか、目的は未だ不明だ」

「こちらの動きは？見たところ緊急展開師団はまだ王都にいるようだが、何故派遣なされないのです？」

「ガートンがウォルトに尋ねた。ガートンは王都に居を構えているため、他の元老よりは状況を把握しているようであった。」

「うむ。こちらはルークに状況を伝え、ルークが北方師団に警戒態勢を取らせた。緊急展開師団の派遣も考えたが、帝国の目的がはっきりせしない以上、早まった動きは避けた方が良さだろう」

「確かに。帝国にダルリアに侵攻する意思があつたとしても実行に移すための口実がない可能性があります。帝国が大陸の覇権を狙っているのは周知の事実ですが、それを口実にすれば他国の反発を招き大陸中を敵に回しかねない。とすれば、今回の動きは口実を作るための挑発行動の可能性も否定できない」

「ハースがウォルトの考えに同調した。」

「そうだ。緊急展開師団を派遣することにより、逆に我々が帝国に侵攻する意思ありと他国に触れまわり、帝国の防衛という口実を与えかねん」

「しかし、どうやって帝国の目的や口実の有無を確認するのですか？帝国が前もって宣戦布告すると御思いか？」

「他国との戦争を行う際に、その国に対し事前に宣戦布告すること

が昔からの習わしである。

しかし、帝国は習わしよりも戦争に勝つことを優先するために事前の宣戦布告を行うことはせず、前触れ無しに他国へ侵攻し後から侵攻理由を宣告することが多かった。だが、それでも第三国が相手国へ支援することを防ぐ意味で、それなりの侵攻する理由が存在していた。ウォルトが知りたいのはまさにそこだった。帝国にはダリア王国に侵攻するための大義名分を持ちえているのか、否か。持つていなければ今回の動きはハースの言うとおり、名分を作るための挑発行動の可能性も高かった。

「帝国の宣戦布告など期待していない。だが、それ以上に戦争そのものを防ぐことが大事だ。帝国が侵攻する大義名分を持ち合わせていないのであれば、それをこちらから提供するようなことは断じてあつてはならない！」

ウォルトは無意識に声を荒げていた。

「ですが、目的や侵攻の意思が判明するまで待つて、手遅れになったらどうするのです？やはり、緊急展開師団を派遣すべきです。それを侵攻の口実に使われたとしてもこちらの動きが早ければ帝国軍の侵攻を食い止めることが可能だ」

ガートンはウォルトが緊急展開師団を派遣していないことが不満のようだった。

<<ドイル卿の意見には一理あると思います。帝国軍の規模の大きさから考えて早めに行動に移すべきです。やはり緊急展開師団を派遣すべきではないでしょうか？>>

「しかし、帝国に侵攻の意思が無かったらどうするのです？本当に単なる演習かもしれない」

通信球からダニエスの声が届きガートンの意見に同調したが、テッドはガートンの意見には反対のようだった。

「目的などはつきりしている！！ダリアへの侵攻だ！たかが演習に四万もの軍を動員すると御思いか？あれほどの軍を進軍させるのにくら掛かると思っている！！」

「ドイル卿、落ち着いて下さい」

豪商のガートンらしい意見だったが、あまり適切な意見ではないと思つたのかシャロンがガートンを宥めた。

「ドイル卿の言うとおり帝国は侵攻して来ると覚悟を決め、早めに派遣すれば帝国が侵攻して来たとしても防ぐことができるだろう。しかし、戦争になれば多くの被害が生まれ、長期戦になれば王国の民も苦しむことになる。私は出来る限り戦争を回避したい」

ウォルトは自らの思いを述べた。国王として王国の民が戦争に巻き込まれ苦しむことはなんとしても避けたいという思いのようだった。

「では、今後の動きはどのように？」

「うむ。帝国の目的がはっきりするまで緊急展開師団の前線派遣は行わない。しかし、侵攻してきた際に手遅れにならない距離に陣を張らせ、待機させる。距離的には国境から二日程のあたりがよいだろう。その距離であれば、国境に近過ぎず、遠すぎない。帝国軍が国境まで二日の距離に進軍して来る頃には目的や侵攻の意思も判明してくると思われる。その後の動きについては帝国軍の動きを見て判断したい」

「なるほど。確かに国境まで二日掛かる距離であれば帝国に口実を与えることにはならないでしょう。仮に帝国が国境到着と同時に侵攻を開始したとしても、二日間であれば北方師団だけでも持ちこたえられる。私もその案に賛成します」

ハースがウォルトの意見を補足すると共に賛同すると、他の元老達も異論は無いようであった。ただ一人、ガートンだけは表情から賛同していないようであったが、他の元老達が賛成している以上、自分だけの意見では覆らないと思つたのか何も言わなかった。

「賛同を感謝する。それと、今後の判断は即時性が要求される。今日この場にいる者はしばらくの間王宮に残ってもらいたい」

「かしこまりました」

「承知しました」

シャロンとハースがウォルトに同意した。ガートンとテッドは最初から王都に居を構えているため、この点は特に問題はないようであった。

「ゴート卿とバイライト卿は常に通信球で連絡が取れるようにしておいてもらいたい」

「承知しました。ただ、私の領地は帝国側に幾分近いため何があるかわかりませぬ。仮に私との連絡が不通となった場合には、陛下に私の元老権限を委任致します」

バイライト卿ファン・バイライトの納める街マウトサントは王都の北、北方師団の防衛範囲内に

あり、隣接しているわけではないが王国内の大きな都市の中でも帝国領に近かった。

「私も同様にさせて頂きます」

ファンの提案にダニエスも同調した。ゴート卿ダニエス・ゴートが納めるオーシャルカーフは王都の南、南方師団の防衛範囲内にある。ゴート家はダルリア王国の王妃フロリア・ゴート・カイザスの出身家であり、ダニエスはフロリアの実兄である。

「承知した。その意思、受け取らせて頂く」

ウォルトはファンとダニエスの提案を受け入れた。

「では、今日はここまでとする」

ウォルトは元老会議の終了を告げ、緊急展開師団の移動手続きに入った。

近衛騎士団は帝国の目的を掴むことに奔走していた。待機部屋には警戒態勢を取っていることもあり、いつも以上に多くの近衛騎士達が哨戒の引き継ぎや細かな意識合わせを行っている。

元老会議から既に九日が経っていたが、四日前から帝国軍は陣を構え進軍を停止していた。進軍を停止した理由はわからず、その行

為がレッドに更なる焦りを与えた。国家防衛の判断を下すのは国王と元老達であり、行動するのが王国騎士団だが、判断を下すための情報を収集するのはレッド達近衛騎士団の職務である。しかし、レッド達は未だ帝国の目的を掴みかねていた。

しかし、レッドの焦りを嘲笑うかのように、帝国の意思は思わぬ形で判明する。

レッドが自席でシードからの報告を受けていた際に突然、大勢の近衛騎士達のざわつきを掻き消すほど大きな音で待機部屋の扉が叩かれた。そのあまりの大きさに近衛騎士達が一瞬で沈黙し、扉の方に視線が集まった。直後に、扉の外より焦りと緊張の入り混じった男の声が聞こえてきた。

「レッド様!!至急ご連絡があります!!」

本来、名を名乗るのが礼儀であるが、それすらもままならぬほど切羽詰まったような声であった。

(なんだ?誰だ?)

レッドは誰かはわからなかったが、聞き覚えのある声だったのか扉付近にいた近衛に扉を開けるように促すと、近衛の一人が扉を開けた。その扉から転がり込むように一人の男が部屋に入りレッドの前まで来る。その男は王宮の通信官であった。

「どうした?」

「レッド様!!至急陛下にお取次を願います!!」

「なんだ?理由は?落ち着いて説明しろ」

レッドはその通信官に冷静になるように言ったが、拳動は変わらなかった。

「ベルドラス帝国より、強制通信!!陛下に話があると!!」

「何だと!!」

まったく予想していなかった事にこの場にいる全員が息を呑んだ。そもそも帝国とは国交が無く、同意された通信球の繋がりはない。本来、同意のもとで通信球を設置し、魔法陣内に相手方を示す事柄が描かれることにより通信が可能になる。しかし、非常に高度な技

術であり、好まれる技術ではないが、相手の魔法陣に関係なく強制的に通信を開くことは可能であった。

「誰からだ？ ドイズ・ベイルか？」

「いえ、違います！ 名は名乗っていませんが、若い男です！」

「若い男？」

「何故名を聞いていない！！」

共に話を聞いていたシードが通信官を叱責した。

「も、申し訳ありません。ただ、帝国からの通信で今の状況下、急ぎレッド様にご連絡をと……」

通信官はシードの言葉にうまく返答できないのか口籠った。

「わかった。まず俺が話す」

「は、はっ……」

レッドは通信官、それにシードと共に通信室へと向かった。通信室へ入ると中央の通信球は青く輝いている。

レッドは通信官に外で待つように伝え、通信球の向こうの相手に話掛けた。

「近衛騎士団団長、レッド・エストールだ。そちらは？」

<<…… ウォルト殿に話があると伝えただけですが？>>

「ベルドラス帝国の者とのことだが、まず名を名乗られよ。得体のしれない者と陛下を引き合わせる訳にはいかない」

<<ああ、これは失礼。私はベルドラス帝国国王付き政務官、ザイル・プラトス。貴国の国王ウォルト・カイザス殿と話がしたい>>
(政務官だと。評議員ですらないではないか……。しかし、『国王付き』とは？)

政務官とは、ダルリア王国でいうところの実務担当の文官である。とても他国の王と直接話をするような立場ではない。しかし、『国王付き』というのは聞いたことがなかった。

「要件はなんだ？」

<<ウォルト殿に直接話させて頂きたい>>

「……政務官が直接陛下と話しができると本気で思っているのか？ 陛

下と話したければそちらもドイツ・バイエル殿、せめて評議会議長を連れてくるべきではないか？」

<<無礼は承知の上です。ですが、私は国王ドイツ・バイエル直接の実務担当であり、今回の件の全権を任されています>>

「今回の件とは？」

<<説明は不要でしょうか？私の要件はそれに関する事です。ですが、無理にとは言いません。そちらに興味が無ければ失礼します>>
(くっ……)

未だ帝国の目的がわかっていないレッドにとっては、断れる状況ではなかった。

「……わかった。陛下をお連れする」

レッドはそう言うのと隣りにいたシードにウォルトを連れてくるように告げた。レッドにとってその行為が相当な屈辱だったのか拳を硬く握り締めていた。シードが部屋を出て行くと、レッドはザイルと会話することなく通信球を睨みつけた。レッドはなるべく情報を聞き出したいようだったが、ザイルはウォルト以外には話す意思がなく、しつこく聞いて通信を切断されるわけにもいかなかった。こちらから強制通信を行うには、帝国側の通信球の位置を知る必要があるが、それは判明していない。主導権は完全にザイル側に握られていた。

そして、それ程の時を待たずにウォルトは通信室へと入ってきた。

「レッド。よい、私が話す」

「はっ」

ここに来る途中シードに大体の話しは聞いたのだから、部屋に入るとウォルトはすぐにレッドと入れ替わり、通信球の向こうの相手に話しかけた。

「ダルリア王国国王ウォルト・カイザスだ。要件はなんだ？」

<<これはウォルト・カイザス閣下。私はベルドラス帝国国王付き政務官、ザイル・プラトス。我が国王ドイツ・バイエルからのお言葉を預かってまいりました>>

ザイルはわざとらしい程の丁寧な口調で話し始めたが、その口調がウォルトを苛立たせた。

「前置きは必要ない。話せ」

「わかりました。では国王ドイズ・ベイルのお言葉を伝えます。」

「ダルリア王国に告げる。十二年前、我らより奪いしヒリーフの村、今までの返還要求

にも係わらず未だ我らに返還されていない。

我らも平和的解決の望んだが、これ以上引き延ばすことはできない。

よって、ここにダルリア王国に対し宣戦を布告し、ヒリーフを奪還する」

以上です>>

「なんだと!!」

ウォルトが驚きの声を上げた。

「<<私は今回の軍の司令官を任せられています。戦場では正々堂々と戦わせて頂きます。」

以上>>

そう言つと、通信は向こう側から一方的に切られた。

「ヒリーフの奪還だ!!ふざけたことを!!レッド、帝国軍の位置は?」

「国境から三、四日程の距離です」

レッドからの返事を聞くとウォルトは足早に通信室を出て行った。

(……帝国が宣戦布告だと?)

第二章完

第三章 【1】

「侵攻の口実がヒリーフの奪還とは……」

ハースが誰にともなく呟いた。

つい今しがた通告されたベルドラス帝国からの宣戦布告のあと、ウォルトは急遽元老会議を開いていた。そして、ウォルトの口から帝国からの宣戦布告の内容が伝えられたところだった。

<<ふざけている！！そもそもヒリーフの村は元々我々の領土ではないか。前回の戦争の際に一時的に帝国領になったに過ぎない。それを奪還などは！！帝国の言っている返還要求とはなんですか？私はそのようなものが来ているとは聞いていない！>>

「落ち着け、バイライト卿。そんなもの帝国から来たことはない。そもそも今はヒリーフの村自体が存在しない。ヒリーフの村跡地があるだけだ。これは帝国が第三国に示すための口実に過ぎない」

通信球を通して伝われて来るファン・バイライトの怒りの声をウォルトが宿めた。ヒリーフの村は元々ダルリア王国のバイライト家が納める村の一つであり、先の戦争時にもつとも被害を受けた村だった。それ故にファンの怒りもつともだった。

ヒリーフ村は十二年前に帝国の突然の侵攻により壊滅した村であり、村人の大半は死亡、生き残った者たちも近隣の街や村に移住し現在は戦争の傷跡を残す跡地としてのみ存在していた。近衛騎士見習いのジュリアもこの村の出身である。

「しかし、他国に示すには効果的ですね。ヒリーフの村は帝国との国境に程近く、第三国にはわかりにくい場所だ。帝国が先にそう宣言すれば他国は口を出すことは無いでしょう」

シャロンは表情は厳しいが落ち着いた口調だった。元老の中では一番現在の状況と事実を冷静に受け止めているようだった。

「緊急展開師団は前線へ？」

「うむ。北方師団に合流するように手配した。帝国が国境線に到着

するよりも先に到着できるだろう」

「そうですね」

ガートンの問いにウォルトが答えると、ガートンは安堵の表情を浮かべた。

「しかし、これで帝国の目的ははつきりしましたね」

ハースはウォルトに視線を送った。

「そうだな。ヒリーフの奪還を名目にダルリア領内に侵攻、そして制圧……か」

<<帝国は我らを甘く見ている。四万程度の軍勢防げぬ数ではない
! ! >>

フアンは未だ怒りが収まらないようだった。

「北方師団と緊急展開師団合わせて三万五千程になります。ある程度引き込んで地の利を生かせば退けることは可能でしょう」

シャロンの言葉にこの場にいる者達が頷いた。

「だが、油断は禁物だ。国境に帝国の姿が見えれば前線の師団から連絡があるだろう。その際にもう一度集まってもらいたい」
ウォルトがそう言うと、元老会議は一時散会した。

ベルドラス帝国からの宣戦布告の後、レッドはシードとポストを自室に呼ぶと近衛騎士団の今後の動きについて意識を合わせた。その後レッド達は待機部屋へと戻り、中にいた近衛騎士達を部屋の中から集め整列させた。その中にジュリアの姿も見える。

そして、近衛騎士達の正面にレッドを中心にシードとポストが両脇に並び、レッドが近衛騎士達に宣戦布告のことを話し始めた。

「全員聞いてくれ。先程ベルドラス帝国より王宮に強制通信があり、帝国から『宣戦布告』が通告された」

レッドは不安を煽らないように努めて冷静の口調で告げた。それでも、この場にいる近衛騎士達も突然のことに驚きを隠せないよう

だった。整列を乱すようなことはなかったが、驚きと緊張がレッド達にも伝わってきていた。

「今はまだ王国騎士団と帝国軍は接触していないが、それも時間の問題だ。また、宣戦布告された以上既に戦争は開始されていると考えるべきだ。帝国側には暗殺部隊がいるとみて間違いない。そして、そいつらが動けば狙ってくるのはこの王宮であり、王家の命だろう」
その言葉で近衛騎士達にさらなる緊張が走ったが、恐怖はなく全員の表情が引き締まったように感じられた。近衛騎士団はこのように際に王家を護る組織であり、この場にいる全員がそのことを熟知している。

「これより我々近衛騎士団は有事態勢に移行する。全員、自らの責務に全力であたり、やつらに一分の隙も見せるな。以上」
「はっ！！」

レッドの言葉が終わると全員の表情が変わり、待機部屋内部が緊張に包まれた。そして、レッドの後にシードから有事態勢に係わる指示が伝えらると、近衛騎士達はこの場にいなかった者達に連絡に行く者、態勢強化のために追加で見張りや哨戒に出る者などで待機部屋はしばらくざわついた。

ポストは自らが連れて来た大公宮の近衛達に諜報部隊からの情報を確認するように指示を出している。ハースと共に王宮に残っているポスト達は王宮では情報収集を担当していた。

シードがその場にいる者達への指示が終わると、レッドはシードを近くに呼んだ。

「シード、王宮外に住まう文官、侍従の出入りを全て近衛を通すように手配してくれ。その際に近衛には本人確認を怠るな」と

「文官と侍従のですか？」

「ああ、帝国の暗殺部隊がどう出るかわからない。侵入してくるとすれば、出入りしている文官、侍従に化ける可能性がある」

「わかりました」

近衛騎士団が有事態勢を取ると、見張りや哨戒の人数は五割増

やされ、王家の人間には常時二人ずつの近衛騎士が護衛に着くようになる。

また、王宮内の王家以外の者達に対する全指揮権は近衛騎士団長に移行される。

「ジュリアはどうします？」

シードは他の近衛騎士達に何かの話しを聞いていたジュリアに一瞬目を向けるとレッドに尋ねると、不意に名前が聞こえたジュリアはレッド達の方に顔を向けた。

「……外せ」

その声が聞こえたのか、ジュリアはレッド達の元に歩みよって来た。その表情からは抗議の色が伺える。

「いやです！！見習いとはいえ私も近衛騎士の一人です！私も王宮の警備に参加します！！」

「ジュリア、これは訓練ではないのだ。帝国に宣戦布告され、王家に危険が及ぶ可能性がある。未だ近衛として未熟なお前を態勢に組み入れることはできない」

シードは興奮しているジュリアを諫めたが、ジュリアも引き下がることはできないようだった。

「でも……、私は王家を護るために近衛騎士になつたんです！！それなのに、王家に危機が訪れるともしれない時に態勢から外されるなんて！！なんでもやります。どうか私も態勢に組み入れて下さい！！」

ジュリアは前の戦いにより身よりの無くなつた自分を我が子のように育ててくれた王家、特にフロリアに大きな感謝の気持ちを持っている。そして、今王家を狙おうとしているのは自らの村を滅ぼしたベルドラス帝国であった。ジュリアも自分が見習いの立場であり、正式な近衛騎士ではないことは承知しているだろうが、それでも少しでも王家を護るために何かしたいという一心のようだった。

そして、似た境遇を持つレッドもジュリアの気持ちは重々承知している。レッドはしばらくシードとジュリアのやり取りを聞いてい

だが、片手でシードを制するとゆっくり口を開いた。

「……わかった。お前はフロリア様の護衛に付け。片時も離れるなよ」

レッドの言葉にジュリアは一瞬驚きと喜びの表情を見せた後、すぐに緊張が戻り表情が引き締まった。

「は、はい!!」

「では、すぐに行け!!」

「はい!!失礼します!!」

ジュリアはレッドとシードに敬礼をすると足早に待機部屋を出て行った。

「団長!よろしいので?」

シードはレッドの予想していなかった言葉に驚いたようだった。

「すまない。責任は俺が取る。フロリア様の護衛はジュリアを含めて三人態勢にしてくれ」

「……なるほど。わかりました」

フロリアの護衛態勢をジュリアを含めた三人態勢ということは、事実上ジュリアは戦力として数えられていない。だが、それによってジュリアの心が納得するのであればというレッドの思いだった。

また、フロリアであればその態勢からレッドの意を理解し、取り計らってくれるだろうと考えていた。

「では、私は他の近衛に指示をして参ります」

「ああ、頼む」

シードが待機部屋を出ると、ほぼ同時に近衛の一人が部屋へと入りポストに何か紙を手渡すと、ポストはそれを一読しレッドの元に歩み寄った。

「団長、諜報部隊より連絡がありました。帝国軍は後三日で国境付近に到達する模様。数は四万程で間違いないとのことです」

「そうか」

王国騎士団は既に帝国軍を四万の想定で行動している。

「それと、やはりセシル王国側の国境警備軍にも動きがある可能性

があるとのこと。ただ、こちらはラファエル山脈を挟んでいるため確認し辛く、詳細は不明です」

「合流されると厄介だな」

「ええ。可能性としては合流、物資支援、ロビエス側への牽制等が考えられると思います」

「わかった。陛下への報告は私の方で行っておく。ポスト殿は引き続き情報収集に努めてくれ」

「わかりました」

ポストも待機部屋を後にした。

（これで、やれることは全てやっただろうか？……しかし、何故……）

レッドは、王宮の防衛と情報収集の指示を出し、他にやれることは無いか検討した。しかし、レッドにはそれとは別に何か気になることがあるようだった。

第三章 【2】

「そろそろ北方師団の陣に到着します」

「ああ」

王国騎士団副団長ビルト・クーエストが率いる緊急展開師団は、帝国との国境から二日ほど手前の位置で陣を張っていたが、元老院より帝国からの宣戦布告の報を受け北方師団が陣を張るコルシア草原まで数刻の位置まで来ていた。王国騎士団の副団長は緊急展開師団の師団長を兼務している。

「なんとか帝国軍が国境に到着する前に合流できそうだな」

「ええ、ですが元老院から得た情報が気になります」

「帝国の国境警備軍の動きか。合流していると思うか？」

「おそらく。帝国の南方外征軍だけでは我々を突破することはできません。帝国軍が我々を破ることが目的であれば、合流で間違いないでしょう」

「そうだな。だが、合流しても突破させるやる気はないがな」

「はい」

「急ぐぞー!!」

そう言つと、ビルトは乗っている馬の腹を蹴り速度を上げた。

「バイル師団長、ビルト副団長が到着されました」

ここは、ダルリア王国とベルドラス帝国との国境近く、北方師団の張っている本陣内にある師団長のテントである。北方師団は王宮からの指示により、帝国軍の侵攻に備えるためにこの場所に本陣を張り、師団長バイル・ガンエン自身が指揮を取っていた。

テント内にはバイルの他に師団所属の作戦立案者である軍師官、そして報告に来た騎士がいた。

バイルと報告に来た騎士は王国騎士団専用の青い鎧を見つけているが、軍師官は近衛騎士団の参謀長とは違い騎士ではなく文官のため鎧は身につけておらず、帽子と軍師官専用の特殊な青い布で織られた服を身につけている。

「早いな。よし、ここに御連れしる」

「はっ」

報告に来た騎士はその場を離れるとビルトを迎えにテントを出た。バイルの正面にある四角い木製の卓の上には周辺の地図が広げられ、北方師団の敷いている陣を表す駒が並べられている。その地図の眺めながらバイルはビルトが来るのを待った。

しばらくすると、騎士団で統一された青い鎧の胸の位置に副団長であることを示す紋章を付けたビルトが緊急展開師団の軍師官と共にテントの中に入って来た。

「バイル、ご苦労。さっそだが帝国軍の状況を説明してくれ」

「はい。帝国軍は国境から半日程の位置まで進軍後、現在はその場に陣を張り兵を休めているものと思われれます。斥候せっこうに出している部隊がそろそろ戻ると思われますので、詳細はその時に」

「よし、斥候が到着するまでの間に周辺一帯の地形の説明と、こちらの配置状況を聞かせてくれ」

「わかりました。シハタ、説明してくれ」

バイルは隣りにいた北方師団の軍師官であるシハタに周辺の状況を説明するように促した。シハタは卓の上に広げられた地図と駒を使ってビルト、そして緊急展開師団の軍師官であるトリストに説明を始めた。

そして、周辺の状況説明が終わるとほぼ同時に斥候が戻ったとの知らせがテントに届いた。バイルは報告に来た騎士に、ここに連れてくるよう伝えた。

「いい知らせを持ってきてくれているといいがな」

「こういう時の報告は得てして悪いものです。あまり期待せずにいましよう」

ビルトは冗談交じりに言ったつもりだったが、もともと生真面目な性格であるバイルから真剣な表情で返されてしまい、苦笑した。

その後、それほど時を待たずテントの幕が上がり斥候に出ていた二名の騎士がテント内に入って来た。相当馬を飛ばして来たのか、二名の騎士は未だに少し息遣いが乱れているのを見てとったビルトが最初に口を開いた。

「どうやら、急ぎの報告がありそうだな」

ビルトの言葉に騎士の一人が急ぎ呼吸を整えると説明を始めた。

「はい。帝国軍は数刻程前に移動を再開。間もなくトリトア渓谷よりダルリア王国へ侵攻するものと思われます」

トリトア渓谷とはベルドラス帝国とダルリア王国との間にある広大な渓谷であり、この辺一帯では帝国側からダルリア王国に来るための唯一の道となっている。ここ以外ではルファエル山脈を越えるか、ロビエス共和国内を進むしか道はない。ルファエル山脈は大軍を率いて越えることは難しく、またロビエス共和国内に帝国軍を通過させることはそれ以上に厳しい。そのため、トリトア渓谷を抜けてくるであろうことは王国騎士団も予想していた。

「帝国軍の規模は？」

バイルの言葉に別の騎士が口を開いた。

「それが、、予想通り国境警備軍が外征軍に合流し、その数六万程に達していると思われれます」

「なっ！！六万だと！！」

バイルは驚愕の声を上げた。国境警備軍の合流により規模の拡大は想定していたが、それ程までに膨れ上がっているとは考えていなかったようだった。対する王国騎士団は北方師団の二万と緊急展開師団の一万五千、総勢三万五千程であり帝国軍は倍近い人数ということになる。

ビルトは立場上のこともあるのか平静さを保っており、表情は変わらなかった。

「バイル、お前の予想通りの報告だったな」

「そう、ですね」

ビルトから平静になれという暗黙の指示と受け取ったのか、バイルはいつもの表情に戻った。師団長や副団長が慌てればそれは騎士団に伝わり士気が下がる。しかも今回のような大規模な編成となれば、一度下がった士気を立て直すのは難しい。ビルトには経験上そのことがよくわかっていようだった。

「だが、悲観することばかりじゃない。予定通りトリトア渓谷を抜けてくることは、こちらにとって好都合だ」

トリトア渓谷は広大な渓谷ではあるが、六万もの軍勢が一度に通過できる程の広さはない。そこを通過する以上は必ず軍勢が縦に伸び、トリトア渓谷を突破させなければ戦闘に加われる人数は半分以上下することも可能と思われる地形だった。

「よし、本陣を移すぞ！トリトア渓谷の手前に前線の戦陣とその後方に本陣の二段階に分けて陣を張る。バイル、お前は戦陣で指揮を取れ。トリスト、シハタは北方師団と緊急展開師団を合わせて再編成し、騎士団を三つに分ける！その内の一つをバイルに預け、戦陣にて待機。残りの二つは戦陣後方でいつでも前線と交代できる準備を整えておけ！」

『はっ！！』

ビルトからの指示を受けた三人はその場を離れ各々が自らの作業に移り、ビルトも最後にテントを出た。トリトア渓谷まではここから一刻も掛からない距離ではあるが、移動の準備、師団の再編成も行うために、出発までにはもう少し時間が掛かりそうだった。テントを出たビルトは師団の状況を確認して回っていると、さすがに規律と秩序に厳しい王国騎士団らしく、それほど時を待たずに三編成された師団は移動準備も終わり、ビルトの前に整列した。

「よし。今後、この三軍を第一師団、第二師団、第三師団と呼称する！！第一師団はバイル師団長と共にトリトア渓谷手前に戦陣を張り、帝国軍を迎え撃て。第二師団は戦陣後方にて待機。第三師団は

我と共に本陣設営後、本陣の防衛にあたれ！！帝国軍と接触後は第二、第三師団との入れ替えを行いつつ、帝国軍の侵攻を防ぐ。いつでも交代できるように、常に戦闘態勢に入れる準備をしておけ！！」
「はっ！！！！」

ビルトは声を張り上げ騎士達に指示を与えると騎士達はそれに応えた。

「よし、進軍開始！！」

ビルトの合図とともに王国騎士団はトリトア渓谷に向けて移動を開始した。先頭に行くビルトは近くを共に進んでいたバイル、そしてトリスト、シハタを呼んだ。

「バイル、シハタ。戦陣を張り次第すぐに通信球を設置しろ。帝国軍との兵力差がこれだけあると、判断の遅れや状況の読み違いは命取りとなる。些細なことでも構わないから何か少しでも状況に変化があったらすぐに本陣に連絡をいれてくれ」

「はっ」

「トリスト、お前も本陣に通信球を設置したら、必ず誰かそばにいるように手配しておけ」

「かしこまりました」

その後、二、三の打ち合わせをしている内に本陣設営予定地に辿り着いた。ここでバイル、シハタそして第一、第二師団と別れ第三師団が本陣の設営を開始した。この場所から戦陣予定地までは半刻程で肉眼で確認できる位置にある。

ビルトは第三師団に対し指示を与え、細かな部分はトリストに任せると、前方の戦陣を遠巻きに眺めた。既に予定地に到着し、戦陣も設営を開始しているようだった。

王国騎士団の作戦は二段階に分かれており、まず第一段階としてトリトア渓谷の出口に戦陣を張り、三師団を交代させることにより士気と体力を維持しつつ、強行に渓谷の突破を試みてるであろう帝国軍を先頭の兵から徐々に削る。そこで帝国軍は撤退すればそれ

で終わりだが、撤退せずに侵攻を続けてくる場合、第二段階として数が減り帝国兵の士気が著しく下がった段階で、帝国軍を王国領内に引き込み三師団で包囲して迎え撃つことになっている。これは、溪谷の突破を目標に掲げる帝国軍を少数で迎え撃つには有効な戦法と思われた。

「ビルト様、本陣の設営が終わりました」

「よし、戦陣からの報告はどんなことでも随時伝えれる。些細なことでも構わん」

設営完了の報告に来たトリストに指示を与えるとビルトは本陣の自らのテントに入っていた。

第三章 【3】

「見張りからの報告によると、もう時期帝国軍が戦陣から確認できる距離に到達することです」

戦陣の設営が終わり、師団長のテント内でバイルとシハタ、そして第一師団に配属された三人の大隊長が策を練っていた。そこに見張りからの報告を受けた騎士が状況の報告にやって来ると、それを受けたシハタがバイルに伝達した。

「来たか。よし、全員手筈通りに頼むぞ。帝国軍の目標はトリトア溪谷を突破し、我々との正面衝突による総力戦を狙って来るだろう。そうなれば数に劣る我々には不利になる。我々の目標は帝国軍のトリトア溪谷突破阻止だ。帝国軍の殲滅ではない。帝国軍が撤退を開始した場合は深追いするな」

「はっ！！」

バイルの指示にその場の全員が応じた。

その後、全員がテントを出ると大隊長達は自らの大隊を指揮するためにバイルの元を離れ、バイルはシハタと共に第一師団が陣を構える戦陣の正面、トリトア溪谷の出口へと向かった。

そして第一師団の戦闘陣形の後ろに到着するとバイルは号令で全員の注目を集め、それを確認すると声を張り上げた。

「全員聞け！！もう時期、帝国軍がこの場に到達する。この戦い、我々が第一陣だ！！我々の戦いが今後の戦いを左右する！！全員それを肝に命じ、死力を尽くせ！！」

「おおっ！！！」

バイルが第一師団全員を鼓舞すると、それを聞いた全員が一斉に声を上げて応じた。バイルはその土気の高さに満足するように頷くと全員に体勢を戻すように伝え、第一師団の指揮を取る為にその場で帝国軍の到着を待った。

シハタは本陣への報告と第二師団との連携を行うためにその場を

離れ、通信球が設置してあるテント内へと足を運んで行った。戦闘の状況は監視役の騎士が随時シハタへ報告することになっている。

そして、全ての準備が整ったバイル達第一師団が見据える正面に、ついに帝国軍が姿を表す。

帝国軍はバイル達の想定通りトリトア渓谷に全軍を横展開することはできず、縦に展開された陣形を取っている。第一師団は、トリトア渓谷出口付近の開けた場所に陣を張っているため三大隊が横に弧を描く形で展開されており、このまま帝国軍と衝突すれば緩やかに囲む陣形となっている。そのため戦闘に参加できる人数はわずかではあるが、第一師団が上回るように見えた。

それを確認するとバイルは第一師団に指示を出した。

「よし、こちらからは仕掛けるな！！向こうの出方を待て！！」

その言葉が良い終わると同時に帝国軍側から馬に乗った兵士が一人こちらに駆けて来るのが見えた。武装はしておらず、第一師団への伝令と思われるその兵士は、声の届く位置まで近づくと馬を止め、第一師団に向かって声を張り上げた。

「ダルリア王国軍に我が軍の司令官ザイル・プラトスからの伝言を告げる。『降伏せよ。この戦い、結果は火を見るより明らかである。我々の目的はヒリーフの奪還であり、ダルリア王国との戦争ではない。ヒリーフの村を明け渡せばこの戦争は終結する』以上。返答せよ……」

伝令の兵士の言葉にバイルが応えた。

「拒否する！！そのような戯言に惑わされる我等ではない！！帝国の目的は読んでいる！！我々が帝国軍を通すことはない！！」

伝令の兵士はバイルの言葉を聞くと、何も言わずそのまま帝国軍側へと去って行った。

帝国側としてはバイル達第一師団が引かないことは想定済みだったのだらう。それでも伝令を走らせたのは、第一師団に揺さぶりをかけ士気を乱す狙いがあるものと思われた。

「なかなか、頭を使う司令官のようだな」
バイルが誰にとも無く呟く。

伝令の兵士が帝国軍側に到着すると、帝国軍の第一陣は王国騎士団に向かって進軍を開始した。

帝国軍と第一師団との距離が半分程に詰まった瞬間、帝国側から銅鑼ウツの音と思われる大きな音が二回鳴ると帝国軍は第一師団の右側第三大隊側に方向を変え速度を上げ始めた。

「なるほど、正面からぶつかって囲まれる程愚かではないか」

第一師団としては帝国軍が真つ直ぐ進行し、第一大隊とぶつかりその両側から第二大隊と第三大隊で取り囲むのが最善の策であったが、それは帝国軍に察知されていたのか軍は方向を替え、第三大隊側の一点突破を狙っているようだった。

「第三大隊迎撃用意！！第一大隊は帝国軍が第三大隊と衝突後に帝国軍を側面から攻撃！！第二大隊は第三大隊の後方に回り支援せよ！！」

バイルはいくつか想定していた迎撃パターンの一つを各大隊に指示し、各大隊がその指示に従い行動を開始した。

第三大隊が迎撃の態勢を取った瞬間、帝国軍側の魔法士からと思われる火球が大きな弧を描いて第三大隊側へ飛来する。それを第三大隊及び第一大隊の魔法騎士が同じく火の魔法で迎撃すると火球は空中で轟音を立てて爆発した。

そして帝国軍と第三大隊が衝突し、剣の交わる音、矢が空を切る音、魔法による爆発音、怒声、自らを鼓舞する掛け声がトリトア溪谷に響き渡った。

帝国軍は溪谷の断崖と第一師団により横展開も妨げられ、軍の動員数を十分に發揮できずにいる。その為、現状では優勢とは言えないが劣勢ではなかった。

バイルはその場を動かさず、各大隊や見張りに配置された伝令係から届けられる情報に耳を傾けている。

「第三大隊、第一大隊交戦を開始しました！！負傷者は少数、第二大隊により随時後方に収容中！！」

「小隊単位で第二大隊と入れ替えを行い、体力の消耗に注意しろと伝える」

「帝国軍の後方部隊、未だ動きはありません！！」

「よし、継続して監視。些細な動きも見逃すな」

次々と届く伝令にその都度指示を出しながら、自らも帝国軍の動向を見逃すまいとしてかその視線は帝国軍へと向けられていた。

「向こうも期を伺っているようだな」

バイルは誰かに話し掛けたわけではないようだったが、近くにいた護衛の騎士がバイルの言葉に応じた。

「はっ。こちら突破する隙を見ているものと思われませう」

「ああ、強行突破してこないのは意外だな。帝国も戦のやり方を変えたか」

バイルも今回の戦いに備え、帝国の過去の侵略行為について分析を行っていたこともあり、今の帝国の戦い方に若干の違和感を感じたようだった。

帝国軍の他国への侵攻時は、その圧倒的な動員数により強引とも思える強襲を行い敵軍本隊を殲滅、その後に残党狩りを行う手法を取っていた。

「次の一手はどう出てくるか」

バイル達としてはこのまま向こうに休む間を与えず、徐々に帝国軍を削っていくことが最善だが、帝国軍の後方部隊が動きを見せていない以上、このままバイル達の狙い通りになるようには見えなかった。

その状態のまま、数刻程経った後バイルが見つめる視線の先で銅鑼の音が一回鳴り響いた。

「動くか・・・」

バイルがそう呟くと、伝令の騎士がバイルの元に報告に訪れた。

「帝国軍の後方部隊の一部が進軍を開始！！第一大隊を側面から攻撃する模様です！！」

「強引に横展開するつもりか・・・」

第一大隊の側面への攻撃は溪谷の壁面もあり、それほど広範囲に行える訳ではないが、第一大隊は既に帝国軍の先発部隊と交戦中のため側面からの攻撃には備えていない。そのため、少数でも相手の陣形を崩したり、士気を削ぐなど十分に効力を発揮すると思われる。第一大隊が崩れ

ば帝国軍に横展開を許してしまい、そうなれば第一師団にとっては不利となる。

「なかなか戦巧者いくわいじやじゃないか」

バイルはそう呟くと、近くにいた伝令に指示を伝えた。

「第二大隊に通達！！大隊を二つに分け、一つを第一大隊側面に回し帝国軍を迎撃せよ！！」

そして、同時に第二師団へも伝令を伝える。

「第二師団に前進するように伝える。いつでも交代できるように体勢を整えつつ、我等を包囲する陣形で待機せよ、と」

「はっ！」

バイルからの指示を聞いた伝令の騎士は、急ぎ第二師団へと向かって馬を駆った。バイルの第二師団への指示は、万が一突破された場合に備えてのものである。

「いい状況ではないな・・・」

バイルの呟きに、今度は周りの騎士達は反応しなかった。いや、反応し難かったのだらうかあえて何も言わないようにも見えた。

バイルの言う通り、第二大隊が二つに分かれたため帝国軍と正面から交戦している第三大隊側は薄くなり、また第一大隊は側面を突かれ第二大隊の一部の支援があるとはいえ、士気に乱れが出ているのがバイルからも確認できた。

「第二師団はどうなっている？」

しばらく状況を見ていたバイルは近くの騎士に第二師団の状況を聞いた。

「既に陣形を整え後方に待機しています」

「よし」

少し予定よりは早い崩れる前に第二師団との入れ替えを考えているようだった。しかしバイルのその思惑は適わず、大きな唸り声ともいえる声があたりに響き渡る。

それは正面から当たっている第三大隊側ではなく、先ほどの帝国軍からの攻撃により若干の乱れを見せていた第一大隊側からのものであり、その乱れを抜け目無く狙ってきた帝国軍が第一大隊を崩した際に発せられた声だった。

「まずいつ！！期を誤ったか、。第二師団前進！！第一師団は第二師団到着と同時に後退せよ！！」

それを確認したバイルは伝令の騎士達に急ぎ指示を伝えると、自らも小隊率い状況を確認するために突破された箇所に向けて馬を進めた。

「師団長！！これ以上は危険です！！」

「わかつている！！」

帝国軍側から放たれた矢がバイルのすぐ前方に突き刺さる。バイルが突破されている場所付近まで来ると、完全に帝国軍の進入を許したわけではないが既に陣形は崩れ乱戦状態になっているのが見えた。バイルは後ろを振り返り第二師団が第一師団のすぐ後方まで接近していることを確認すると、すぐさま両師団に指示を出した。

「よし。第二師団はそのまま前進、第一師団との交代を・・・」

バイルの師団への指示が終わらない内に、帝国軍側からまたも銅鑼音が、しかし今度は三度鳴り響く。

「なんだ？」

バイルは帝国軍を見ると、帝国軍は後退を開始していた。

「なにっ、後退だと・・・。何故？」

第三章 【4】

「後退しただと？」

ここは本陣内にある通信球を設置したテントである。テント内は薄暗く、地面には通信球用の魔法陣が描かれ、所々に魔石が縫い込まれた大きな布が広げられたいた。

王宮の通信球が設置してある部屋のように石の床に直接刻み込まれているわけではなく、王国騎士団ではこのような布を用いて即席の通信球を設置する。

テントの中にはビルトとトリスト、そして通信官がおり、先程戦陣のバイルから通信球での連絡を受けたビルトがバイルと話しをしていた。

<<はい、第一師団が一度崩されかけたのですが、帝国軍は無理に突破することなく一度後退しました>>

通信球からのバイルの声には幾分戸惑いの色が伺えた。

「こちらとしては幸いではあるが、妙だな」

<<はい。突破されるかと思っただのですが、後ろに第二師団が控えていたために後退したものと思われます>>

「いや、帝国軍としては無理にでも渓谷を突破し、広い場所での総力戦に持ち込みたいところだろ

う。そうでなければ帝国軍の動員数を生かせない。隙を見つけたのなら突破を試みるはずだ…」

そう言うビルトはしばらく目を閉じた。今までの経験の中から今の状況を見極めようとしているようだった。

ビルトは十二年前の帝国軍侵攻の際は、北方師団の大隊長として帝国軍との戦争に参加して

いる。その際の帝国軍の動きを詳細に思い出しているようだが、物量に頼り力で押してくる戦い方を戦略としている帝国軍の戦い方としては例が無かった。

<<ビルト副団長?>>

しばらくの間ビルトからの応答が無くなったため、バイルの方から声を掛けるとビルトは目を閉じたまま応えた。

「バイル、帝国軍は今どうしている?」

<<はい、一度後退した後は様子を見ているのか今のところ動く気配はありません>>

バイルからの返事にビルトは再び沈黙した。

そして、しばらくすると考えがまとまったのかゆっくりと目を開けたが、その表情は暗い。

「まずいな……」

ビルトはある想定を立てたのか、眉間に皺を寄せている。

<<まずいとは?>>

「帝国は直接的な攻撃ではなく持久戦による我々の消耗を狙うつもりかもしれない」

<<持久戦での消耗を?これほどの戦力差があるのに何故です?>>
バイルはビルトの答えが腑に落ちないようだった。確かに倍近い戦力差があれば持久戦に持ち込まなくても、隙を付けば一気に勝負を付けることも可能である。

「帝国軍にとつてはこの戦いはまだ序盤戦であり、ダルリア内に侵攻した後の戦いに備えて兵を温存しておきたいのだろう。ここで無理に突破して総力戦になれば例え帝国軍が勝利したとしても相当の兵を失うことになる」

ビルトは務めてゆっくりと冷静な物言いでバイルに伝えた。

<<つまり、奴らにとつては我々はダルリア侵攻の障害の一つではない。そして、ここは突破できることを前提で戦っている、ということですか>>

ダルリアと帝国軍との国境を護る北方師団の師団長としての誇りに触れたのだらう、冷静な言葉で話してはいるが、通信球を通してバイルの静かな怒りがビルトにまで伝わった。

「バイル、冷静さを失うなよ」

<<はい。しかし、持久戦など望むところ、こちらの想定通りとも
いえませ>>

「帝国軍が自分の意思で無ければな」

<<……>>

ビルトの言葉に今度はバイルが沈黙する。

ビルト達は、帝国軍はその動員数を生かすために渓谷の突破に全
力を上げ、突破後の総力戦を狙っていると読んでいた。それ故に帝
国軍側が自ら渓谷内に留まり、対峙するとは思ってもいなかった。

「この状況で渓谷内での持久戦は不利だ。持久戦を行うのであれば
もう少し引き込まなければ、しかし、」

持久戦で重要なのは軍の士気と体力である。士気の面ではビルト
達王国騎士団は十二分に高いが、帝国軍も侵攻を阻まれるのではな
く自らの意思でそこに留まっている以上、その士気も下がりにくい。
そうなれば問題は体力である。

互いに自国を背にしている以上、兵糧ひやうが尽きることはまず有り得
ない。となれば、軍の体力はその動員数となって来る。

そして、その動員数は王国騎士団が圧倒的に少なかった。

帝国軍の兵糧の補給路を断とうにも渓谷の断崖が邪魔で後ろに回
り込むことができない。かといって、後ろに回り込むために帝国軍
をダルリア側へ引き込めば、総力戦となってしまう。

ビルト達は否が応でもこの不利な持久戦に付き合う以外に手は無
かった。

「完全に主導権を握られたな」

ビルトの表情はさらに険しさを増した。

「バイル、少し時が必要だ。現状では帝国軍の動きに付き合う以外
にない。師団を早めに交代しながら体力を温存しつつ帝国軍の侵攻
を防いでいてくれ。その後の動きは追って指示する」

<<かしこまりました。我々は帝国軍の侵攻阻止に全力を上げます

>>

「頼む」

<<はっ>>

バイルの応答を聞いたビルトは通信官に通信球を切断させると、ビルトの後ろで話しを聞いていたトリストに向き直った。

「策はあるか？」

ビルトからの唐突な問いにトリストは表情に一瞬戸惑いの色を見せたが、すぐに首を横に振った。

「申し訳ありません。少し、検討する時間をください……」

ビルトの言葉にトリストは応えたが、その表情から現状では厳しいことが伺えた。

「わかった。俺も一度戦陣に出向きこの目で状況を見定めて来る。

お前はルーク団長に現状の報告を行っておいてくれ」

「承知しました」

ビルトはトリストの返事を確認すると通信球のテントを後にし、戦陣へと向かった。

トリストはビルトがテントを出た後もその場に残り、通信官に王都の防衛師団皆に繋ぐように頼んだ。王都の防衛師団皆は王国騎士団の本部とも言える場所で、王都防衛師団の他に王国騎士団長ルーク・バントエスト、各師団の軍師官を束ねる軍師長カストス・ミーズ・バンライトが詰めている。

「繋がりました」

トリストは通信官から接続の報告を受けると皆側の通信官に自らの名とカストスを呼ぶように頼んだ。それから程なく通信球からしわがれた声が聞こえて来た。

「カストスだ」

軍師長であるカストスは既に齢六十を超える年齢ではあるが、各師団の作戦立案者たる軍師官を束ねる者として、副団長に次ぐ地位の人物である。軍師長として経験に基づき豊富な知識を有し、王国騎士団の全師団の総合的な作戦立案を行っている。

「カストス様、前線より報告がございます」

「トリスト、声が暗いな。あまり、良い知らせではないようだな」

トリストの声を聞いたカストスは半ば面白がるような声で応えた。カストスは何か問題が発生するとむしろそれを楽しむ傾向がある。

「はい、帝国軍がこちらの予想に反する行動を起こしています」「予想に反するとは？」

「帝国軍は六万程でこちらの倍近い規模ですが、それにも関わらずこちら側に隙が出来ても強引な突破を試みることなく一度後退しました。理由は不明ですが持久戦を狙っているのではなかと恐れま

す」
トリストは要点と自分とビルトの考えを伝えた。詳細な説明ではなかったが、カストスならばこれだけでも状況を理解するには十分だった。

「なるほど、確かに妙ではあるな。本来持久戦は実力、規模が拮抗している相手に対し、別の角度から攻める戦法だ。これだけ規模に違いがあるのに帝国側から持久戦を仕掛けてくることは通常考えられん。多少無理をしても突破し、広い場所で対峙したほうが早い決着が着く出あるうに」

この場合の決着とは前線の王国騎士団の敗北である。カストスはこういったことを考える際に甘い希望や理想を考慮することは無い。「．．．ビルト副団長は帝国軍は被害を最小限に抑え、ダルリア王国内部へ進軍した後のことも考えているのではないかと」

トリストはビルトとバイルが話していた内容を伝えた。

「確かにその可能性もあるであろうが．．．。しかし、時間が掛ければその分だけ我々も迎撃準備を整えやすくなる。理由がそれだけとは考え難いな．．．。ふむ、どの道数の差と地形の制約がある以上はこちらから下手に動くことは出来んな」

「はい．．．」

トリストは力なく返事をした。

「ルーク団長にはこちらで報告しておこう。トリストよ、お前は帝国軍の動きを細部まで観察し、こちらの被害を最小限に抑える作戦を立てるのだ。帝国軍の目論見が読めるまでは強引な攻めや奇襲は

控えるように」

「かしこまりました」

トリストが言い終わると通信球は皆側から切断された。

「ふう．．．」

トリストは通信球の切断を確認すると、息を吐き肩を落とした。

カストスであれば何か良い助言を聞けるのではないかと思ったが、こちらで検討したと結論が変わらなかったことに落胆したようだった。

トリストしばらく同じ姿勢のままだったが、顔を上げるとテントを後にした。

第三章 【5】

後退を告げる銅鑼の音が三度、トリトア溪谷に鳴り響いた。ビルトが戦陣に到着してから三日が立ち、昼夜を問わない帝国軍の侵攻は二桁を超えた。

「またか…」

ビルトが戦陣まで来ているため、かなり前線に近い位置で指揮を執っていたバイルが呟いた。

「こちらも撤収する！！第二師団は第三師団と交代せよ！第二師団の大隊長は戦陣へ帰還後、被害状況をまとめて報告せよ！」

バイルは師団の交代を指示すると、自らも馬を翻し戦陣へと向かう。途中、先程までの戦闘に加わっていた第二師団の大隊長の一人に馬を並べた。

「感触はどうだ？何か変わったことはあったか？」

「いえ、先ほどからの戦闘と同じ動きです。それに、戦い方も無理をしないということが末端の小隊にまで徹底されています。こちらの挑発や誘いにはいっさい乗ってくる気配がありません」

「そうか…。やはり消耗戦を狙っているか…。」

「はい。そう思われます」

「お前の範囲だけでよい、被害状況はどうだ？」

「死亡者が数名、負傷者は今までの戦い全てで合わせて二割程です。負傷者は魔法により治療を行い動けるものは大隊に戻していますが、既に全体に疲労の色が出始めておりこの状況が続けば魔法による治療は難しくなってくると思われれます」

魔法による怪我の治療は体力を著しく消耗する。

「わかった……」

話をしている間に二人は戦陣に到着しそこで別れ、バイルは他の大隊長からも被害状況の報告を受けると、ビルトがいるテントへと向かった。中に入るとビルトの他にシハタがあり、共に中央にある

卓の椅子に座っていたが、バイルに気づいたシハタは立ち上がりバイルを迎えた。

「帝国軍はまた後退か？」

「はい。こちらも前線を第三師団と交代しました」

「帝国軍の動きに変化は？」

「特にありません。一定時間こちらを攻撃しては後退を繰り返しています」

バイルの報告にビルトは片肘を付き頬を載せると目を閉じた。

「こちらの被害状況は？」

「全体として、死者は数十名、負傷者は師団にもありますが全体では約三割程、その内の五割は治療後に戦闘に復帰しています。しかし、各師団とも疲労が表れてきており、士気にも影響が出始めます。何よりこのままでは回復もままならなくなるかと」

ビルトは目を閉じたままだったが、その表情は険しさを増していた。

「帝国軍も似たような状況だと思うか」

ビルトの問いに今度はシハタが口を開いた。

「いえ、負傷者の割合は同じかもしれませんが、やはり動員数の違いにより一人当たりの戦闘回数はこちらの半分以下でしょう。それにより、そもその疲労の量もさることながら、休息もこちらの倍の時間が取れることとなりますので回復魔法も行いやすく、復帰できる者もこちらより多いと思われれます。これが続けば……」

「続けば、なんだ？」

シハタは最後の言葉を濁したが、現実から目を背けずに直視することを重要視するビルトは先を促した。

「はっ……。いずれこちら側は疲労により回復魔法を掛けることに制約が出てきます。そのため、負傷者の戦場復帰が難しくなり、戦闘ができる動員数にさらに差が生まれてくると思われれます」

「このままでは、全体の規模だけでなく前線の規模及び士気に差が生まれ、前線を突破される可能性があります。突破されれば、負傷

者を抱え土気の落ちた我々に抗う術はないと思われます」

立場的なものか、現実を直視できないのか、シハタが結果を口に
しなかったのをバイルが補足
した。

ビルトは二人の報告を聞いた後もしばらく何も言わずに目を閉じ
ていた。その間、バイルとシハタも口を開かなかつたためしばらく
の静寂が流れた。

どれくらいの時がたったかわからないが、その静寂をビルトが破
った。

「状況はわかつた。俺は一度本陣へ戻る。バイル、悪いがもうしば
らくこのまま耐えてくれ」

「…わかりました」

感情の無い声で指示したビルトにバイルは応え、ビルトは本陣へ
と向かうためテントを後にした。

「ビルト様に何か考えがあるのでしょうか？」

ビルトの態度が気になったのか、シハタはバイルに問いかけた。

「わからないが、大きな判断を下すおつもりなのかもしれない」

バイルはそう言うと、再度前線へと赴くために身を翻しテントを
出ると、シハタが一人残された。

「大きな判断……」

ビルトは何人かの騎士達と共に本陣へと馬を走らせ、到着後に騎
士の一人にトリストを呼ぶように伝えたと、自らのテントへと入っ
た。

ビルトが思案にふけっているとテントの幕が上がリトリストが入
ってきた。

「前線の状況はいかがでしたか？」

「帝国軍の動きは予想通りだ。悪いことにな」

「そうですか……」

「何か策はできたか？」

ビルトは三日前と同じ問いをトリストに投げかけた。
「一つあります。いえ、むしろそれ以外に手立ては無いと思われま
す」

ビルトの問いに応えたトリストの表情には何か決意のようなもの
が感じられた。しかし、その表情からビルトにはトリストが自分と
同じことを考えていることが伺えた。

「増援要請……か？」

「……はい」

ビルトの言葉にトリストは頷いた。二人の表情は厳しく、その判
断がいかに重いかを物語って
いた。

ビルトが副団長として行う増援要請は、他の師団長が行う増援要
請とはまったく意味合いも重みも異なる。ダルリア王国には各方面
師団と王都と公都の防衛師団が存在するが、有事の際に元老会議か
らの指示、もしくは各師団からの増援要請により派遣されるのがビ
ルト率いる緊急展開師団であり、他に増援専門の師団は無い。

その緊急展開師団の師団長を兼務するビルトがさらに増援要請を
行うということは、王国騎士団、そして国王及び元老達に大きな決
断を迫る行為だった。

そもそも国王及び元老達が増援を許可できるかという問題がある。
それは、仮に許可するとしてもこの師団が増援に向かわせるか、
また、向かわせた後にその師団が担当していた地区の防衛はどうす
るのかを総合的に判断しなければならない。

また、王国騎士団の任務は他国からの侵略からの防衛だけでなく、
時折発生する瘴獣退治も担っている。普段は瘴獣が発生次第速やか
に王国騎士団により退治されるため、瘴獣退治等を生業としている
ワンダラーと呼ばれる、いわゆる傭兵はダルリア王国にはほとんど
存在しない。そのため、瘴獣が発生するとそのまま放置されること
になり、民間人への被害が出る可能性もある。

「やはり、それしか方法は無いか……」

「はい、申し訳ありません。しかし、遅くなれば前線の騎士団の被害も大きくなり手遅れとなる可能性があります」

トリストはうつむいた。軍師官として満足な策を提示することができず、ある意味で一番単純な人数を増やすということしか提示できないことに責任を感じているようだった。

「わかった…。トリスト、増援要請を許可する。王都に連絡を取り状況を説明し、増援を要請しろ」

「かしこまりました…」

トリストはビルトに敬礼しテントを後した。

一人残ったビルトはしばらく動かずに正面を見据えていたが、その表情には悔しさと自分に対するものなのか、怒りの感情が表れている。自分の無力さを感じたのか目を閉じると拳を中央の卓に叩きつけた。

第四章 【1】

「皆の前でもう一度報告を聞かせてくれ」

帝国軍と対峙している前線の王国騎士団から、王都防衛師団の砦に対して増援要請がありその報告が元老院に入った。

連絡を受けたウォルトは早急に元老会議を招集し、王国騎士団からの使いの騎士に元老達の前で再度報告内容を話させている。

「はっ。前線の陣からの報告では、『現在トリトア渓谷にて交戦中。帝国軍は総勢六万に上り、対する我々は北方師団及び緊急展開師団の二師団で三万五千。帝国側の動員数を生かした人海戦術による波状攻撃により、こちらの被害が拡大している。既に全体の三割程が負傷、残った騎士も疲労の色が濃く今後の士気の低下が懸念される。至急増援されたい』との要請です」

「ご苦労。下がってくれ」

ウォルトが報告をおこなった騎士に下がるように指示し、その騎士は部屋を出た。

「六万……。想像以上の規模ですね」

ハースが静かに呟いた。

「うむ。帝国の外征軍だけではない。近衛が得た情報によるとセシル王国側の国境警備軍が合流した様だ。私としてはこの規模の差を考えると増援も止む無しと考えているが、皆の意見を聞きたい」

ウォルトは元老達に発言を促した。

「私も増援すべきと考えます。しかし、緊急展開師団を派遣した今、どこの師団を向かわせるか…」

ハースもウォルトの考えに同意したが、どこの師団を派遣するにしろ、ここにいる元老が納める街のどこかが危険に晒される可能性があるためか、派遣する師団までは踏み込めない。

「陛下、残る方面師団から一大隊つつ応援に向かわせてはいかがでしょうか？」

シャロンが各師団からの均等な増援を提案するが、それにガートンが異を唱える。

「それでは間に合うまい。ディール卿には申し訳無いが、西方師団全軍を増援に出してはいいかがか？西方師団が守る国境はセシル王国との国境だ。同盟を結んだ今となっては西方師団を派遣しても問題ないかと。それに加えてセシル王国に援軍を依頼してはどうでしょう？現在前線にいる師団に西方師団とセシル王国軍を加えれば、セシルの規模にもよるが戦力的には拮抗する。そうなれば帝国を押し返すことも可能かと。西方師団の防衛範囲内の瘴獣については短期間であれば、憲兵隊でも対応できる」

ガートンの提案にシャロンは表情を崩してはいないが、内心は複雑と思われた。

西方師団の防衛範囲にはシャロンが当主であるディール家の治める街リーフポートがあり、その近隣の小さな町や村もディール家の統治範囲である。国家の危機とはいえ、自らの統治範囲の民が危険に晒されることは避けたいところだろう。

「確かに、南方師団と東方師団は前線からは距離がある。すぐに指示を出しても到着までには数週間はかかるだろう。それまで前線の師団だけで耐えることが出来るかどうか。西方師団だけであれば数日で合流できる」

しかし、シャロンの思いとは裏腹にファンがガートンの意見に同意した。ファンが当主を務めるバイライト家の統治範囲は北方に位置し、既に北方師団が前線展開しているため瘴獣退治には憲兵隊が駆り出されていた。そのファンが同意したため、シャロンはガートンの意見に意を唱えなかった。

「しかし、セシル王国からの応援は難しいのではないか？そもそも、セシル王国の軍はそれほど大きくない。こちらに回す余裕があるかどうか」

続いてダニエスがセシル王国からの援軍には疑問を呈するが、その言葉にガートンが応える。

「それは問題ありますまい。報告では帝国はセシル王国との国境警備軍を我々への侵攻に回しているとのこと。であれば、いま帝国側にセシル王国と対峙している軍はないということだ。セシル王国側が侵攻される恐れがないとなれば、こちらに援軍を出せぬとは言えますまい」

そう言うところガートンは全員を見回した。ウォルトは顔の正面で手を組み元老達の議論に耳を傾けている。

<<セシル王国側に対峙する軍がないのであれば、援軍を要請するのではなく直接帝国への侵攻を依頼してはどうか？セシル王国が帝国内へ侵攻すれば帝国軍もこちらに回した国境警備軍を戻さざるえないでしょう。そうなれば前線の帝国軍は半数程に減るのではないかと>>

ファンがセシル王国へ帝国侵攻の依頼を提案するが、今まで黙って聞いていたウォルトが異を唱える。

「それはできません。セシル王国側から帝国へは、只でさえ危険を伴うルファエル山脈を越えることになる上、仮に越えて侵攻に成功したとしてもその後のセシル王国軍はどうなる？小規模のセシル王国軍が帝国内で交戦となれば、山脈のため退くこともできず全滅は免れないだろう。そんなことはとても依頼できません」

ウォルトはセシル王国軍の帝国への進軍は反対した。

「西方師団の全軍派遣には私も賛成させて頂きます。その上で、前線の師団と西方師団だけで帝国軍を退けることは難しいのでしょうか？現在被害を受けていないセシル王国を巻き込むことには正直気が引けます」

シャロンは現状を考え西方師団の派遣には同意したが、セシル王国への援軍要請には賛成しかねていた。その言葉にガートンは椅子から立ち上がり激昂する。

「何を言われるのだディール卿！何のための軍事同盟と思われるか！西方師団とセシル王国軍を派遣してもまだ帝国軍の動員数には及ばない！！それを西方師団の派遣だけで済ませればさらなる増援が

必要になりますぞ！！その時にセシル王国に援軍を求めても遅い！前線の王国騎士団はさらに疲労を蓄積しているでしょう。投入すべき時は今しかありません！時期を見誤るべきでない！同盟国に援軍を依頼するのに何を迷われるか！！既に一刻を争う状況なのですぞ！！」

ガートンは両手をテーブルについて声を張り上げた。

「ドイル卿、落ち着かれよ。陛下の前であるぞ」

ハースに宿めると、ガートンは椅子に座り直した。シャロンもガートンの突然の態度に驚いたが、その言葉には反論できず押し黙った。

元老達も沈黙した。シャロンの言うこともガートンの言うことも理解出来たが、どちらが正しいとは言い難い状況に何も言えずにいた。ただ、前線の師団が苦戦し一刻も早い援軍を求めているのは事実である。意見を決めかねた元老達はその視線をウォルトに向けた。ウォルトは先程から元老達の話を目を傾け沈黙を保っていたが、重く口を開いた。

「ドイル卿の言うとおりにかもしれんな．．．．．確かに、今の状況を一刻を争う事態であり、機を逸すれば手遅れになるだろう。これより、西方師団の前線派遣及びセシル王国への援軍を要請する。異論のあるものはおるか」

ウォルトは全員を見まわしたが、誰も何も言わなかった。

「二時間後、もう一度ここに集まってくれ」

そう言うウォルトは立ち上がり元老達の再集合の了承を確認すると部屋を後にした。

ウォルトは元老院から外に出ると、王宮内にある通信室へと向かった。外は日が半分傾き、空は夕焼けに染まっている。しかし、ウォルトはその夕焼けに目を向けるとことなく王宮に入り、真っ直ぐ通信室に向かい中に入ると通信官にセシル王国と繋ぐように指示した。

指示された通信官は中央に水晶の通信球が置かれた魔法陣に魔力を込めると、程なく通信球が淡い青色の光を放ち、セシル王国側の通信官が応答する。

<<セシル王国です。通信球の接続を確認しました>>

「我はダルリア王国国王ウォルト・カイザスである。緊急の要件につきビント・セシアル殿と通信球での会談を希望する」

相手の通信官に対しウォルトは自ら直接会談を要請した。

<<こ、これはウォルト国王閣下。大変失礼を致しました。直ちに国王ビント・セシアルにお取次ぎ致します>>

突然の他国の王からの声に驚いたのだろう、相手の通信官は接続も切らずにビントの元へ連絡に行ったようだった。しばらくすると通信球から先ほどの通信官とは違う低い声が聞こえて来る。

<<セシル王国国王ビント・セシアルです。ウォルト殿かな？>>

「おお、ビント殿。ウォルト・カイザスです。緊急の会談に伝えて頂き感謝します」

国王は丁寧に感謝の意を述べた。

<<なんの。同盟国から会談要請とあらば、喜んで時間を取らせて頂きますぞ>>

ビントもそれに応じた。

「時間的猶予があまり無いため突然で申し訳無いが本題に入らせて頂きたい。現在の我がダルリア王国の状況だが……」

<<援軍の件であろう？>>

ウォルトが説明を始めるとそれを遮るように通信球から声が聞こえてくる。

「ビント殿？」

ウォルトは相手側から本題の声が上がったことに驚いたようだ。

<<儂とて遊んでおるわけではない。ダルリア王国の今の状況はわかっているつもりだ。そろそろ来るのではないかと思っていましたよ>>

「では、援軍を？」

<< 無論です。こちらから同盟を持ちかけておいて、同盟国の危機に兵を出せぬでは道理が通らん。既に準備は整えてある。いつでも進軍出来る状態ですぞ>>

ウォルトから相手の顔はわからないが、ビントは声は力強い。

「痛み入る。そちらからそう申し出て頂けたことに深く感謝する」

<<では、これを正式な依頼と受け取ってよいか？>>

「よろしく頼みます。この恩はいつか必ず返させて頂きます」

<<うむ。では、どうすればよいだろうか？こちらは既に軍に招集を掛け、ダルリア王国との国境付近まで進めておる。規模は一万程

>>

「おお、それは助かる。では、国境を越えた後に北上させて下さい。半日程北上したところにこちらの西方師団を駐留させておくので、合流後に帝国との国境へと向かってもらいたい。その際にこちらの指揮下に入ってもらいたいのだが構わないだろうか？無論、同盟国の軍として最大限の配慮をさせて頂く」

<<それは問題無い。では西方師団とは二日程で合流できるでしょう>>

「了解した。では、よろしく頼みます」

<<うむ。早急に取りかかる>>

話が終わると通信球がセシル側から切断され、光が消えた。

ウォルトは息を大きく吐くと通信室を出ると、元老会議まで時間があるためか自らの執務室へと向かった。執務室の前まで来ると扉の前でレッドが待っている。

「どうした？」

「はっ、状況を確認させて頂ければと思いましたが」

「そうか、では入れ」

ウォルトは扉を開けて中に入ると、レッドもそれに続いた。中に入るとウォルトは机の椅子に腰を掛け、現在の状況を話始める。

「今日の昼前くらいに前線の王国騎士団より王都防衛師団の砦に報告が入った。帝国軍は総勢六万の軍をトリトア溪谷からこちらへ侵

攻めている。溪谷で王国騎士団がなんとか侵攻を食い止めているが、状況は思わしくない。そこで、我々としては西方師団の増援派遣とセシル王国への援軍の要請を決定した」

「セシル王国に援軍を？了承するでしょうか？」

レッドは既に要請済みであることを知らない。

「問題ない。既にたつた今セシル王国へ援軍を要請し受諾された」

「そうですか。では後は時間との戦いといったところですね」

「うむ。セシル王国側も状況を読んでいてくれてな、すでに軍を編成していた。二日程で西方師団と合流する予定だ」

（準備がいいな。セシル王国も我々と同じ諜報部隊を持っているのだらうか？）

レッドはセシル王国の動きの速さに感心した。

「レッド、すまないがこの後再度元老会議があるのだ。それまでもう一度考えを整理したいのだが」

「かしこまりました。では、失礼致します」

ウォルトが言わんとしていることを理解したレッドは敬礼し部屋を後にした。

第四章 【2】

元老会議が中断してから二時間後、再度予定通り元老会議が招集され、冒頭でウォルトはセシル王国への援軍要請が受諾されたことを、ハースと元老達に説明した。

「そうですか」

ハースは複雑な表情をしている。

<<セシル王国軍側の規模はいかほど?>>

「一万程とのことだ」

ファンの問いにウォルトが答える。

<<一万．．．．．では、前線の師団と西方師団、それにセシル王国軍を合わせれば五万を超える規模。なんとか帝国軍に対抗できそうですな>>

「うむ、なんとか退けられればよいのだが．．．．．」

王国騎士団の錬度が高いとはいえ、未だ一万近く動員数が下回っていることもあり、ウォルトはまだ樂觀は出来ないと思っているようだった。

「陛下、王都防衛師団も派遣してはいかがか？」

それまで黙って聞いていたガートンがウォルトに進言する。

「どうということだ？」

ウォルトはガートン視線を合わせた。

「セシル王国軍の援軍を合わせてもまだ帝国軍の軍勢には及びません。しかも、前線では既に多数の負傷者も出ているとのこと。確かにこれで帝国軍は退くかもしれませんが、必勝を期すのであればもう一師団派遣すべきです。王都防衛師団を派遣すれば総勢で六万五千程の軍勢となる。そうなればまず帝国軍を退けることができる」

ガートンはウォルトと視線を外さずに正面から見据えていたが、ハースがそこに割って入る。

「ドイル卿、それは危険すぎる。王都の守りを放棄するなど！もし

本当にそれが必要なのであれば公都防衛師団を派遣しましょう」

しかし、その意見にガートンが異を唱えた。

「公都からでは距離があり過ぎる。失礼だが、大公殿下。王都の守りと言われるが一体何から守るのだ？今戦場ははるか北方、帝国との国境ですぞ。王都にいてもやる事など精々いつ発生するかもわからない瘴獣退治だけではありませんか。逆に問うが仮に前線の王国騎士団が敗れ王都まで侵攻してきたら王都防衛師団だけで防げると御思いか？三師団とセルル王国軍を破った軍ですぞ。我々はなんとしても国境で帝国軍を退ける必要がある！！動員数で上回れば王国騎士団が敗れることは有り得ない！！」

ガートンは声を荒げた。

「しかし……」

ハースは王都防衛師団の派遣に反対のようだったが、ガートン言うことに反論できなかった。ハースがウォルトに目を向けると、ウォルトはハースの目を見ながらゆっくりと二度頷くと口を開いた。

「確かに今の状況で国境を突破されれば、ダルリア王国は帝国の支配下に置かれるだろう。今こそ王国騎士団の力を結集し、戦う時なのかもしれない」

その言葉にハースと元老達がウォルトに注目する。

「王都防衛師団を派遣しよう」

ウォルトは静かだが力強くそう言うと、ガートンは安堵の表情が浮かべた。ハースは複雑な表情をしている。

「陛下……。。わかりました。ですが、一つだけ提案させて下さい。やはり長期間王都の守りを薄くするのは危険です。そこで王都防衛師団の代わりに王都防衛の任務を公都防衛師団に命じてはいかがでしょうか？」

「しかし、それでは公都が無防備になるであろう？」

ウォルトはハースの治める公都シーキスを気遣った。

「シーキスの周りには東方師団もいますのでしばらくは兼務させましょう。公都は前線からも離れていますので問題ありません」

「そうか。では、公都防衛師団を王都に派遣しよう。皆も異論は無いか？」

ウォルトは元老達を見まわすと、その意見に対しては異論はなかったがガートンは何か不服そうな表情をしている。

ウォルトは異論が無いことを確認すると卓の上にあつた呼び鈴を鳴らし、部屋に入った来た侍従に王国騎士団長ルーク・バントエストを呼ぶように命じた。

しばらく待つとルークが部屋に入り、会議卓の前まで来ると敬礼をした。

「ルーク・バントエスト、参りました」

「ご苦労。前線の状況については聞いておるな？」

「無論です」

ルークの表情からは幾分苛立ちが伺えた。今、前線で戦って苦しんでいるのは自らの部下達であり、自分に権限があればすぐにでも援軍を派遣したいところなのだろう。しかし、ダルリア王国の騎士団は文民統制されており、何もできない自分に齒痒さを感じているようだった。

「では、元老院からの指示を伝える。セシル王国に援軍を要請した。西方師団を北方に進軍させて待機。セシル王国軍が到着後、共に前線に向かい合流せよ。それと同時に王都防衛師団も前線に派遣する。準備が出来次第前線に向けて進軍を開始してくれ」

その言葉にルークは驚きの表情を浮かべる。

「王都防衛師団を？よろしいのですか？」

「うむ。王都には変わりに公都防衛師団を呼び防衛の任に着かせ、公都は東方師団に兼務させよ。お主は王都防衛師団と共に前線に赴き陣頭指揮を執れ。王都防衛師団はどれくらいで出れる？」

ウォルトは元老会議で決定したことを伝えると、ルークはこれほど大規模な援軍が決定されるとは思っていなかったようだが、大規模な増援はルークの望むところでもあったため、むしろ厳しい決断

をした元老達に感謝した。

「すぐにでも出れます。しかし、公都防衛師団の王都への移動には数日必要です。到着を待ちますか？」

「いや、お主も知る通り前線は既に危険な状態だ。すぐに向かってくれ」

「承知しました」

そう言うところへは敬礼をし、足早に部屋を出た。

ウォルトに状況を確認した後に待機部屋へと戻ったレッドは、自席に座るとここ最近の出来事を頭の中で整理し始めた。隣りに座っていたシードが、その様子が気になったのかレッドに近づいてくる。

「どうかしましたか？」

「ん、ああ、ちょっとな。帝国は何故突然攻めてきたのかと思っ
な」

「何故とは？ 侵攻の名分はヒリーフの村の奪還とのことでしたが、これは単なる口実でしょう。帝国が大陸の覇権を狙っているのは周知の事実。侵攻はその一環では？」

「まあ、そうなんだろうが．．．。何故ダルリアなのか．．．」

「我らを落とせば、その先にある都市同盟を手中にできると考えているのでは？ 都市同盟は統一された軍事力を持たないため、容易く落とせると。都市同盟を落とせば帝国にとって最大の難敵であるロビエス共和国を包囲する形となります」

「それもそうなのだが．．．」

レッドもダルリア王国が帝国の手に落ちた後のことは予想していた。確かに都市同盟は隣接するロビエス共和国とは特に敵対はしておらず、ダルリア王国とは昔からの友好関係にある。周りに敵国となる国が存在しないため、特に軍隊というものを持っていない。その為、帝国との緩衝国となっているダルリア王国が帝国の手に落ち

れば帝国に屈することになるだろう。しかし、それでもレッドは何か納得ができないという感じだった。

「何か気になることが？」

「ああ。帝国はここ十年程ダルリア王国に侵攻して来なかった。それはダルリアが前回の侵攻の後に王国騎士団を再編成し、帝国の侵攻をも防げる程に規模を拡大したためだろう。現に今回の侵攻も苦戦はしているが、なんとか防いでいる。増援が到着すれば帝国軍を退けられる可能性も高い」

レッドは頭では別のことを考えているのか、机を見ながらそう答えた。

「良いものではありませんか？」

シードにはレッドが何を悩んでいるのかわからないようだった。

「もちろん我々としてはそうだ。だが、だからこそ帝国の目的がよくわからない。確かに帝国は過去に無いくらいの大規模な軍を編成してきた。しかし、今まさに帝国は退けられようとしている。帝国だって我々が動員できる規模の予想は着いていたはずだ。過去最大規模とはいっても、何か中途半端な気がする。これで帝国が退くようなことになればあまりにもお粗末だ。仮に帝国がさらに動員数を増やし国境を突破してきたとしてもまだ国内には東方、南方の方面師団と王都防衛師団、それに公都防衛師団だって動員することができる。例えこれをすべて撃破して王国を支配下に置いたとしても帝国軍の被害は甚大なものとなるだろう。そうなれば大陸の覇権どころではあるまい。下手をすればロビエスに侵攻されかねない」

王都防衛師団の派遣はまだレッドの耳には入っていない。

「確かに・・・」

シードにもレッドの考えがわかった来たようだった。

「帝国と国境を接している国はダルリアだけじゃない。こんなことを言うとセシル王国には申し訳ないが、ルファエル山脈があるといえ軍の規模からしたらセシル王国の方が遙かに攻めやすいだろうに。帝国はダルリアに対して必勝の体制がとれない状態で何故無理

してまで攻めて来たのか・・・。そうしなければならぬ理由でもあったのか・・・。」

「そう言われると、そうですね・・・。」

「何か気になるな・・・。」

レッドの頭には、はっきりとは言い表せない不安がよぎっていた。

第四章 【3】

王都防衛師団が王都を出た三日後、近衛騎士団は朝から忙殺されていた。ただでさえ有事体制で余剰の近衛が少ない上に、今日は前々から予定されていた文官の認証式が謁見の間で行われることになっており、その警備の準備もしなければならなかった。レッドは現在の状況を考えてウォルトに中止を申し入れたが、予定されていた行事を中止すれば王宮内の者達にいらぬ不安を与えるとのウォルトの意向により決行されることになった。

レッドとシードは共になんとか有事体制の警備を崩さずに認証式の準備を整えると、自分達も警備に参加するために、二階から謁見の間のある一階に下りる階段へと続く廊下を歩いていた。予定では認証式は日中に行われるはずだったが、帝国への対応や憲兵隊の業務編成などで文官達が追われたことと、近衛騎士団の警備準備が思いのほか時間が掛かったことなどもあり、既に日が沈んでいた。

「暗いな」

廊下の窓から外を見たレッドが呟いた。窓から見える夜の王都は、家々から漏れる魔石の明りで美しく輝いていた。しかし、いつもであれば王都の外を通る街道も月明かりで薄っすらと見えるが、この日は王都の灯り以外は闇に包まれていた。

「今日は朔の日ですからね。月明かりが無いためでしょう」

レッドの呟きに隣りを歩いているシードが応えた。

（朔…か。嫌な日だ）

二人は謁見の間に入ると既に警備の近衛騎士達は配置についており、今日認証される文官達も来ていた。認証式は実務担当の文官達が、最上位の役職である太政官に付く際に国王により実施される。謁見の間は通常の謁見者の出入り口となる大きな扉から入ると、そこから一番奥の玉座まで赤い絨毯が敷かれており、謁見の間自体は一階にあるが二階まで吹き抜けになっていて実際よりも大分広く見

える。両側の壁際には太い柱が等間隔に並んでおり、その前に近衛騎士達が立っていた。

レッドは謁見の間の最奥にある玉座の斜め後ろに立ち、ウォルトの到着を待った。ここからであれば、謁見の間全体を見渡すことができる。シードはレッドから見て右側の壁際に立っている。そして、侍従達による認証式の準備が完了した頃、玉座側の壁の横にある扉からウォルトが護衛の近衛騎士達と共に謁見の間に入ってきた。

玉座の前に今回太政官に任命される五名の文官達が横一列に並ぶと、進行を担当する文官により認証式の開会が宣言された。この認証式の主役である五名の文官はいずれも六十歳前後の年齢であり、いままでこの国の内政や外交の実務を行ってきた者達であり、その功績と経験が認められての任命である。そのことが本人達の誇りでもあるのだろう、五人の文官達の表情は実績が認められたことに寄る喜びと、これからの責任の重さからくるものか緊張が滲み出ている。

そして、進行の者が順番に担当と名前を呼ぶと、名前を呼ばれた者はウォルトの前に歩み出て太政官としての宣誓を行いウォルトから直接認証書が手渡される。ウォルトはその際に激励の言葉を贈っていた。中にはウォルトの言葉に涙ぐむ者さえいる。ダルリア王国の政治は元老会議により大枠の方針が決められ、その方針に則り文官達が実務を行っていく。それは内政から外交まで多岐に渡り、その最前線で活動しているのが文官達である。防衛力である、王国騎士団や近衛騎士団とは違う形でこの国を支えている者達であり、目立つ存在では無いがその重要性はなんら変わりない。

認証式は順調に進み最後の文官にまで認証書が手渡されると、最後にウォルトが全員に対して言葉を述べ、進行の文官が閉会の告げようとした時だった。

.....フツ.....

何の前触れもなく王宮中の魔石の灯りが一斉に消え、謁見の間が闇に包まれた。突然のことに周りがざわつき始める。

(なんだ?)

レッドは反射的にウォルトの前に出た。

(侵入された?)

王宮の魔石の灯りは地下にある魔法陣で制御されており、季節にもよるが定刻に魔法官が点灯と消灯を行っている。魔石の寿命により一部が点灯しなくなることはあるが、王宮内に数百とある魔石の全てが同時に寿命が来ることはあり得ない。つまり、魔石は『消えた』のではなく『消された』のである。しかも、灯りの魔石を制御する魔法陣は王宮内でも重要な防衛個所であり、夜間には近衛騎士が常時二人見張りについているのを掻い潜ってである。

(この態勢の中侵入するとは。野盗ごときに仕業ではないな。帝国の暗殺者が…)

レッドは今の状況から判断を下した瞬間、声を張り上げた。

「シード、王妃王女を確保!! 誰か魔法陣の確認に向かえ!! ボスト殿に大公殿下とデイル卿を保護するように伝える!!」

「はっ」

「私が行きます」

「侍従、文官は壁際に寄り、その場を動くな!!」

矢継ぎ早にレッドの指示が出され、シードと近衛騎士達がそれに応え数名が謁見の間から出た後、少しの間静寂が流れた。

.....フワッ.....

音もなく突然、微かな風がレッドの頬をかすめる。

「近衛抜剣!! 既に内部だ!!」

その風を謁見の間の扉が開かれたと感じたレッドの抜剣命令が近衛騎士達にとんだ。国王のいる謁見の間に無言で入る者など王宮内にはいない。近衛騎士達は一斉に腰の剣を抜き構えた。王宮内で唯

一帯剣を許される近衛騎士といえども自由に剣を抜くことは許されず、敵と見え^{まみ}た時か今回のように三騎士からの抜剣命令が下った時のみである。レッドは未だ敵の姿を確認出来ていないが、既に侵入者がいると判断し抜剣命令を下した。

(魔法騎士を外に配置したのは失敗だったか……)

この場に魔法騎士がいればすぐに光球でこの場を照らすことができたが、レッドは前触れもなく突然内部に侵入されることは想定しておらず、また、王宮内では魔法騎士の真価を發揮しにくいため王宮の外に配置していた。

また、朔であることも重なり闇に包まれた内部はほぼ何も見えず、目が慣れるまでにしばらくの時間が掛かると思われた。

レッドが闇に目を凝らしていると、右側から近衛のものと思われる呻き声が聞こえ、次の瞬間その逆側から剣の交わる音と思われる金属音が聞こえる。

「二名確認！一人玉座に向かいます！！」

その金属音の発生源と思われるバルクードが叫ぶ。

(やはり暗殺者か。狙いは当然陛下……)

レッドは前方に意識を集中すると、バルクードが居た逆側からも気配を感じ、その二人がレッドの間合いに入った瞬間に剣を横に薙ぎ払った。しかし、剣は空を切りレッドは再度剣を構え直した。近づいていた気配は動きを止める。

(かわされたか……やはり向こうは完全に見えているようだな)

レッドは目を凝らすとわずかではあるが、輪郭を捉えられる程には目が慣れて来ていた。

(二人……手に持っているの短剣^{タガ}のようなものか……。バルクードが相手をしているのを含めて全部で三人。いや、一国の王の命を狙うのにそんなに少ないはずは無い)

レッドが戦況を見極めようとしていると、音も無く右の影が動きレッドの脇腹をめがけて素早く短剣で突いてくる。レッドはそれを剣の柄で受け止めると、その隙を突いて左側の影がレッドの脇を抜

けてウォルトへの接近を試みる。しかし、レッドの蹴りが影の腹部を捉えてそれを阻止した。蹴り飛ばされた影は短い呻き声を上げたが、すぐに体勢を整えレッドと対峙する。

(固い…。帷子かたびらを着込んでいるか…)

二つの影は間合いの外に下がると、ウォルトを暗殺するためにはレッドを先に始末する必要があると判断したのか、露骨な殺気をレッドに向けてきた。

レッドは背後にウォルトを抱えていることと、未だ目が慣れておらず、おぼろげな影しか見ないこともあり、自らは仕掛けず二つの影の動きを待った。わずかな時間対峙すると、また右側の影がレッドの太股のあたりを目掛けて蹴りを放つ。レッドはそれを動かさずに右手に持っている剣を瞬間的に逆手に持ち替えて受けに行くが、当たる瞬間に影は足を引くと間髪を入れずに左の影が短剣でレッドの喉元を切りつけてきた。かわすにはあまりに素早く接近していたため、それを左腕の鎧の甲で強く強引に弾いた。バランスを崩した影を今度はレッドが右手に持っていた剣で影の胸のあたり突きにいつたが、完全に捕らえたかに思えた剣を影は素早く一步引き空を切らせた。

(チツ… かなりの手練れだな。受けからの攻撃では捉えきれないか) レッドは受けにまわって隙を突くつもりだったが、それが通じる相手では無いと感じたのか今度は自ら攻めに転じる。

しかし、攻めに転じても後ろにウォルトを抱えているためその場を踏み込み以上には移動することができず、また影は自由に間合いを取るため正攻法では捉えられなかった。

(この状況では、まともにより合っても厳しいか。あまり意表を突くのは得意ではないんだがな…)

レッドは剣を利き手とは逆の左手に持ち替えると左の影を注意を向けつつ右の影と対峙する。影もレッドのその行動に対し警戒を滲ませている。影もレッドの意図が読めず動けずにいると、突然レッドは右の影に対し一步踏み込み首のあたりを右から左に薙ぎ払う。

影はまた一步下がってかわすが、レッドは構わずさらに踏み込み空いた右手で影の顔を殴り飛ばした。虚を突かれた影はその拳をまともにくらい後ろに飛ばされるとそのまま動かない。そして横に薙いだ剣は左側の影の喉もとを捕らえていた。レッドが剣を引き抜くと左の影はそのまま倒れ、こちらは絶命したと思われた。

レッドはウォルトの方を見ると、玉座から動かずに状況を見ている。ウォルトは自らが動けば近衛が警護しにくくなり逆に危険が及ぶことを理解していた。レッドはウォルトとは反対側に意識を集中すると、バルクードがいた方では未だ剣の交わる音が聞こえ、その逆でも誰かが交戦しているようだった。

(四人…これだけか?)

…
ヒュッ…

レッドがそう思った瞬間何かが空を切る音が聞こえ、レッドは反射的にそれを剣で叩き落した。

(ダーク(投擲用短剣)か…まずいつ!!)

立て続けに投げられるダークをなんとか音だけで見切り剣で防ぐが、これは長くは続かない。レッドは自らがウォルトの正面に居ることを確認すると、最悪の場合は自分の体で受け止めることを覚悟した。さらに二度ダークを弾くと、謁見の間の正面の扉が音を立てて開いた。

第四章 【4】

「光よ！！」

王宮内の異常に気付いて駆けつけた、近衛の魔法騎士と思われる者の声が謁見の間に響く。すると、暗闇に慣れた目を考慮してか明るすぎない光球が謁見の間の天井付近に輝いた。淡い光が謁見の間全体を照らすと、レッドは正面に暗殺者の姿を捉えた。全身黒尽くめで、頭と顔の下半分も黒い布で覆われている。暗殺者はさらにダークを投げようとした時に、その近くにいた近衛の一人が声を上げた。

「これ以上はさせんぞ！！」

近衛は暗殺者との間合いを一気に詰めると剣を強く振り下ろした。暗殺者はそれを寸前でかわすと、この状況下では不利を悟ったか撤退の素振りを見せた。しかし、灯りをともした魔法騎士が風の魔法を放つと、風が風圧となって暗殺者に襲い掛かりその足を止める。そこに先ほど斬りかかった近衛が接近し剣で暗殺者の胸を貫くと、暗殺者は短い呻き声を上げその場に倒れ伏した。

レッドはそれを確認し謁見の間全体を見渡すと、自らが倒した暗殺者の他に壁際に二体と先ほど倒した一人の計五体の暗殺者と、三名の近衛騎士が倒れているのが見えた。侍従や文官達は状況がわからず混乱し、近くに暗殺者の死体があることに気付くと悲鳴を上げているが、負傷した者達はいないようだった。ウォルトも変わらず玉座に座り正面を見据えている。

「負傷者の救護と暗殺者達の息を確認しろ！！」

レッドの指示で近衛騎士達が動き出し、自らも最初に殴り飛ばした暗殺者の近づいて首の脈を確認すると、首の骨が折れて絶命していた。

レッドはウォルトの方を向き直ると、ウォルトもレッドの視線を送る。

「陛下、申し訳ありません」
「うむ」

ウォルトは短くそれに応える。

完全に近衛騎士団の失態であった。王家の住まう王宮に暗殺者の侵入を許すなどあつてはならないことであり、それを防ぐことが近衛騎士団の存在意義の一つでもある。それにも係わらず暗殺者の侵入を許してしまったことに、レッドは責任を痛感していた。

そのすぐ後に玉座の横にある扉が開き、シードが戻つて来た。

「王妃様、両王女様を確保。途中、王女様の部屋に向かつていた侵入者を一人討ちました」

シードの後にはフロリアとメリル、ミーナの両王女、そして王家の警護についていた近衛騎士とジュリアの姿があつた。フロリアは謁見の間に入ると短い悲鳴を上げ、急ぎ両王女とそしてジュリアを抱き寄せ視線を塞いだ。謁見の間にあつた暗殺者の死体を娘達に見せたくなかつたのだろう。

「シード、おそらく帝国の暗殺者だ。至急侵入経路を調べろ。それが判明するまでは近衛を総動員し視線の穴を作るな！！」

「はっ！！」

レッドは自らに対する怒りか、自然と語尾が強くなつていた。シードも近衛騎士団の作戦立案者としてことの重大さを認識し、急ぎ数名の近衛騎士を連れて謁見の間を出て行った。

「陛下、王家の私室に入らせて頂きます」

「構わん」

レッドはウォルトに王家の私室への立ち入りの許可を得ると、謁見の間の扉付近にいたバルクードに指示を出す。

「バルクード！！小隊を編成し、王宮内を見廻れ！！王家の私室、倉庫全てだ！！絶対の暗殺者共を見逃すな！！」

「了解しました！！」

バルクードもレッドの指示に応えると小隊編成のために待機部屋へと向かった。そしてバルクードと入れ違いに同じ扉から大公ハ

スの守護についていたポストが、ハースとシャロンを連れて謁見の間へと入ってきた。

「団長、大公殿下のもとに現れた暗殺者と思われる者を一人討ち果たしました。大公殿下とデイル卿にお怪我はありません」

「よし、今シードが暗殺者達の進入経路を調べている。判明するまでポスト殿はそのまま大公殿下とデイル卿の警護に全力を挙げてくれ」

「承知しました」

レッドは頷くとウォルトの方に向き直った。

「陛下、安全の確認ができるまで、食堂の方に避難して頂きます」
ウォルトは無言でそれに頷くと、玉座から立ち上がりフロリア達を呼び寄せた。レッドは王家の警護についていた近衛騎士達と共に自ら先頭に立ってウォルト達を食堂まで案内すると、食堂の前で一度立ち止まり近衛に中の安全を確認させ、最後に自らも確認するとウォルト達を中へと招き入れた。

ウォルト達は中に入ると、中央にある食卓のいつもの位置に座った。メリルとミーナは王家として命を狙われるというあまりの恐怖に泣き崩れており、フロリアが優しく声を掛けている。ジュリアも警護の一人として窓際に立ってはいしたが、その表情には恐怖が滲み出ている。

そしてウォルトは、何も言わずその表情には動揺の色を浮かべることもなく、腕を組みただ黙って目を閉じていた。それは、この状況は自らが口を出すのではなくレッド達近衛騎士団に任せることが最善との考えであり信頼の証でもあった。

その光景を黙って見ていたレッドは、自責の念にかられていた。ウォルトからこれほどの信頼を得ていながら、その期待に応えられなかったこと。そして、それでもウォルトは自らを信頼してくれていることに心を痛めた。

(申し訳．．．．．ありません．．．．．)

しばらくその光景が続くと、食堂の扉が叩かれ一人の近衛騎士が

中に入りレッドに耳打ちをする。それは、王宮内の安全が確認出来たこと、そして近衛が二名負傷し、四名が死亡したことを告げる報告だった。レッドはその報告を表情を変えことなく聞いている。

「……………わかった」

報告を聞き終わるとレッドはウォルトに歩み寄った。

「陛下、王宮内の安全確認が完了しました。侍従、文官達に被害は出ていません。私室にお戻りになれます」

ウォルトは頷くと、ゆっくりと目を開けた。

「レッド、大丈夫だな？」

「はっ。王家の安全は必ず確保します」

ウォルトの言葉は、おそらく自分のことではなく娘達を心配してのことだったのだろう。レッドもそれを理解し、安全確保を約束した。

ウォルトはフロリアと娘達に自室に戻るように伝え、自らは対応を協議するためにシャロンとハースをウォルトの執務室に呼ぶように侍従に伝え、自らも警護の近衛騎士達と共に執務室へと向かった。レッドも全員を見送ると食堂を後にし、状況確認のため待機部屋へと向かった。

レッドが待機部屋に戻ると、総動員された近衛騎士達の再配置と進入経路の調査の為の指示を出しているシードに声を掛けた。

「状況は？」

「はい。進入したと思われる暗殺者は七名。全員の死亡を確認しました。王宮内の確認は終了し、他に侵入者がいる形跡はありません」

「進入経路は？」

「……………申し訳ありません。未だ不明です」

レッドの問いにシードは厳しい表情で応えたが、レッドもそう簡単には判明していないだろうことはわかっていた。近衛騎士団の有事体制はレッドが近衛騎士団の団長に就任した際に、参謀長に任命したシードと共に自ら王宮内を隅々まで見て周り作り上げた体制で

ある。その強固さにはレッド、そしてシードも絶対に進入を許さないとの自負を持っていた。

「必ずどこかに穴があるはずだ。思い込みを捨て、全ての可能性を考慮しろ」

「はい」

「この指揮は任せる。俺は今日は私室で待機し今後の侵入に備える。何かあればすぐに連絡しろ」

「わかりました」

レッドの私室は王家の私室へと続く通路にあり、王家に近づくために必ずそこを通る必要がある。また、王家の人間に何かあればすぐに駆けつけるところができる場所に位置していた。

レッドは待機部屋を出ると王宮内の警備を確認するために、王宮全体を見回った後に私室へと戻り、部屋に入ると窓から再度見える範囲の体制を確認した。

窓際に立つレッドは悔しさなのか怒りなのかはわからないが、拳を硬く握り全身を震わせている。王家を危機に晒してしまったこと、そして自らが率いる近衛騎士団に死者を出してしまったことが許せなかったのだろうか、部屋全体が揺れる程の力で自らの拳を壁に叩きつけた。その拳と壁の間からは血が滴り落ちる。

(……くそ)

その夜、レッドは窓から外を見張り続けた。

第四章 【5】

レッドが警備体制を確認するために王宮を見回り私室へと戻った頃、ウォルトの執務室にはウォルトの他にハースとシャロンがいた。ウォルトは執務机に座り、シャロンとハースはその机の前に立っている。

「直接ここを狙ってくるとは．．．」

自らも命を狙われたハースが厳しい表情で呟いた。

「帝国にも焦りがあるのかもしれない」

「帝国は我々が増援を派遣したことに気づいているのでしょうか？」

「それは否定出来ないが、帝国に対策を打たれないようにこちらも細心の注意を払って動いている。その可能性は低いだろう。むしろ増援を行えないようにするために、我らの命を狙ったと考える方が自然だ」

「増援の到着はいつ頃に？」

「早ければ明日の夜にも西方師団とセシル王国軍が前線に到着する。その数日後には王都防衛師団も合流できるはずだ」

シャロンの問いにウォルトは答えた。順調に行けば既に西方師団とセシル王国軍は合流し、前線の手前付近まで進んでいると思われる。

「前線から何か報告はありましたか？」

「状況は変わらずだ。前線の師団の被害は拡大している。だが、それも増援が到着すれば現在の状況を打開できるだろう」

「そうですね。ただ、前線での戦いが帝国にとって不調になると、帝国は直接ここを狙ってくる可能性が増すのでは？ そうなればさらに暗殺者達をここに投入してくるのではないのでしょうか？」

シャロンはウォルトの身を案じているようだ。

「心配いらん。レッドは二度も同じ過ちを繰り返す者ではない。ここはもう安全だ」

「そうですね．．．」

シャロンはそれでも心配そうだったが、自らの息子も参謀長を務める近衛騎士団を信頼したくもあるようだった。

「それより明日、西方師団が前線に到着の報を受け次第、元老会議を開く。準備しておいてくれ」

「わかりました」

「かしこまりました」

ハースとシャロンはウォルトに深く礼をすると共にウォルトの執務室を後にした。

翌日は朝から濃い雲が立ち込め、激しく叩きつけるような雨が降っていた。本来であれば日が高く上っている時間帯ではあるが、厚い雲のためか外も薄暗く感じられる。

そのような中、近衛騎士団は総力を上げて王宮の警備、そして前日に侵入した暗殺者達の侵入路の調査を行っていた。レッドも自ら見回りと有事態勢時の視線の穴を探して回っている。侵入路が判明しなければ近衛騎士団の総動員を解くことができず、交代もできない。長期間続けば疲労が蓄積し、士気にも影響してくる。そうなる前になんとしても見つけ出す必要があった。

そして、王宮内は前日に暗殺者が侵入したと近衛騎士団が総動員されているかこともあり、異様な緊張感に満ちていた。

夕刻になると、ウォルトは間もなく西方師団とセシル王国軍が前線に到着すると思われる時間帯に、報告を受け次第すぐに元老会議を開くために王宮内の執務室から元老院へと向かっていた。その傍らには護衛の近衛騎士とレッドの姿もあった。夕刻になっても侵入経路は判明せず、レッドはその日の調査を諦めると自らもウォルトの護衛に就いていた。

途中、ちょうど謁見の間へと入る扉の前で近衛騎士の一人が近づきウォルトに敬礼をすると、レッドに何か耳打ちをしてくる。

「．．．何？直接ここに来ているのか？」

「はっ」

報告を聞いたレッドは怪訝な表情を浮かべたが、ウォルトにその内容を伝える。

「陛下、王国騎士団からの伝令が来ているそうです。至急陛下に報告があると」

「・・・わかった。ここに通せ」

「わかりました」

ウォルトも一瞬レッドと同じような表情をしたが、謁見の間に通すように伝えるとそのまま自分も入っていった。レッドは報告に来た近衛騎士に謁見の間に連れてくるように伝えると、自らもウォルトに続いて謁見の間へと入った。中に入るとウォルトは既に玉座に座っており、レッドはその斜め前に立つ。そのまま少し待つと、謁見の間の扉が叩かれ案内の近衛騎士の後ろに、青い鎧を来た王国騎士が現れ、ウォルトの前まで進み敬礼をした。

「西方師団第二大隊所属ガイツ・バーホートです」

顔には相当馬を飛ばして来たのか疲労と焦りの表情を浮かべ、ウォルトの前で名乗ったがその所属にさらにウォルトとレッドは怪訝な表情を浮かべた。

（西方師団？ 西方師団は前線に向かっているはず。通信球も使わずに何故直接伝令を？）

順調に事が進んでいれば西方師団は昨日中にセシル王国軍と合流し、今頃は前線の直前まで進んでいるはずだった。通信球での前線合流の連絡であればわかるが、西方師団の騎士が直接王宮に何か報告に来る必要性は想定できなかった。

「何があった？」

ウォルトもレッドと同じ疑問を持ったらしく、ガイツに問いかけた。問われたガイツは急ぎ息を整えると、神妙な面持ちでゆっくりと答えた。

「西方師団……壊滅。西方師団長エルス・アナントが……討たれました」

ガイツの答えに、ウォルト、そしてレッドが報告に内容を理解できずに硬直した。無論、ガイツが国王であるウォルトを相手に冗談や嘘を言っているとは思えない。しかし、それでもその報告の内容にすぐには反応できずにいた。

「なん．．．だと？何を．．．言っている？」

ウォルトは眉間にしわを寄せ、なんとか言葉を搾り出したが、頭の中では未だガイツの言葉を飲み込みきれていないようだった。そして、それはレッドも同様だった。

（西方師団が壊滅．．．？いったどういう．．．）

「．．．ガイツよ、順を追って説明してくれ。西方師団が壊滅とはどういうことだ？西方師団が前線に到着したという報告は受けていないが、既に前線に到着していたということか？それとも、まさか帝国軍が既に前線を破り、南下してきているということか？」

ウォルトは自ら冷静さを取り戻すためか、かなりゆっくりとした口調になっていた。しかし、その表情にはゆとりがなく、あきらかに動揺の色が伺えた。ガイツはウォルトの言葉に、話す事を頭の中で整理し、一度深く呼吸すると語り始めた。

「いえ、違います。セシル王国軍、味方では．．．．．ありません」

ガイツの言葉にウォルトとレッドは一瞬凍りついたように固まった。

「．．．なに。どういう．．．ことだ？」

ウォルトは、驚愕とどこか真実味の無い話と思ったのか疑惑の眼差しを向けたが、ガイツが嘘をつくはずも無く、ウォルトは先を促した。

「我々は前線への進軍のために、北方に陣を向けセシル王国軍の到着を待ち、合流後にそのまま進軍を開始する予定でした。しかし、南方より現れたセシル王国軍は援軍を装い後方から接近後、西方師

団の本陣を急襲。不意を突かれた師団長の陣が壊滅……。残された者は各大隊長指揮下退却戦を行いました。師団長を失い連携の取れた戦いができず、セシル王国軍に各個撃破され半数以上が……残った者達の行方も……」

「ガイツはうつむき、言葉はもはや後半は聞き取れない。」

「……………」

ウォルトは言葉を失った。レッドも同様であり、ガイツもそれ以上は語れなかった。その場は時が止まったかのように静まりかえっている。謁見の間にいる侍従達も話の内容が聞こえたわけでは無いようだがその様子に只ならぬ雰囲気を感じ、言葉を発すること無く三人の様子を眺めていた。どれくらいの間沈黙が続いていたのかわからないが、ウォルトは止まっていた時を動かした。

「セシル王国が……、裏切りだと……。それで、セシル王国軍は？」

ウォルトはなんとか冷静を装ったが、その表情は動揺からセシル王国への怒りへと変わりつつあるように見えた。そして、ウォルトの言葉にガイツも声を絞り出した。

「我らとの戦いで、セシル王国軍にもかなりの被害が出た模様です。その為か、現在は西方師団の砦に駐留しています。負傷者の手当てと休養を取った後体勢を整え北上し、前線の王国騎士団を帝国軍と共に南北から挟撃するつもりかと思われま……」

「ガイツの言葉にウォルトの押さえていた怒りが噴き出す。」

「セシル王国……、何故裏切りなど……！」

ウォルトはすさまじい怒りに震えていた。そして、謁見の間に控えていた侍従を呼ぶ。

「連絡が着く者だけでよい。早急に元老を招集しろ」

「は、はい。直ちに」

侍従は普段は温厚なウォルトのあまりの剣幕に悲鳴のような返事をすると、足早に謁見の間を出て言った。

「陛下？」

レッドにはウォルトの意図が読めない。

「セシル王国軍が到着する前に前線を撤退させる！！」

ウォルトは吐き捨てるように言つと、謁見の間を後にし元老院へと向かった。

（国内に引き込むつもりか……。確かに内部に引き込めば地の利は我々にあり帝国軍は補給路が長くなるためこちら側がかなり有利だ。残る師団を集結させれば規模も上回る。しかし……。それでは戦場となる国内にも相当の被害が出る……。覚悟の上か……）

レッドも謁見の間を後にした。

第四章 【6】

西方師団壊滅の報が王宮に届いたそのすぐ後に元老達が招集され元老会議が開かれた。ウォルトは元老達に西方師団が壊滅したと、セシル王国が裏切ったことを伝え、その後の対応を協議している。レッドはウォルトを元老院まで付き添った後、待機部屋でシードとポストにその事を伝えたと考えを整理するために自室へと戻っていた。

日も大分傾く時間になり厚い雲と相まって部屋の中はかなり暗く、また未だ降り続けている雨が激しく窓を叩き、かなり耳障りな音が響いていた。しかし、レッドはその音が聞こえていないのか、窓に注意を向けることも無く執務機の椅子に座ると目を閉じ何かを考えていた。

（

セシル王国が裏切るなんて……。増援策が潰された以上、前線の撤退はやむを得ない。セシル王国軍が前線に到着する前に撤退しなければ、前線の師団は逃げ場を失う。

しかし、前線が撤退すれば帝国軍はダルリア国内へ侵攻してくるだろう。戦場になる地域にいる国民にも多くの犠牲が出かねない。だが、戦場が国内になれば、王国騎士団にとっては確かに有利にはなる。帝国軍は補給路が伸び、その維持にも人員が必要になり、王国騎士団にとっては、国内であれば補給の心配はなく、各方面師団との距離は近くなり増援も容易になる。

……おかしい。だったら何故、帝国はこんな行動を取っているのだ？

確かに、これによりダルリア王国は大きな被害を受けることになる。だが、それによって帝国になんの利益があるというのだ？

帝国がダルリア王国内に侵攻しても、北方の国境からでは王都まではかなりの距離がある。帝国軍が王都に到着する前に、各方面師団を召集すれば現在の帝国軍を完全に包囲することは十分に可能だ。そうなれば、帝国は南方外征軍の大半を失うではないか。

……なんなんだ？これでは互いに被害を被るだけではないか。

いや、そんなはずはない。帝国が何の勝算もない戦いを仕掛けるわけがない。何かあるはずだ。

そもそもセシル王国は何故裏切ったのだ？

帝国に脅された？

いや、この前締結された軍事同盟は、暗黙には帝国に対抗するための軍事同盟だったはず。帝国に脅された程度で寝返るくらいなら最初から帝国と組めばいい。

そもそも、脅された程度で裏切らなければならぬような状況ではなかった。確かに今前線は苦戦しているが、西方師団とセシル王国軍、それに王都防衛師団が合流すれば帝国の動員数を上回る。そうなれば十二分に帝国を退けることが可能だったはずだ。

帝国を恐れて裏切る必要など無かったではないか。

しかも、同盟は国家間の契約であり、その一方的な破棄は国家の信用を失墜させる。今後の外交にも相当影響することになるだろう。

どういふことだ？セシル王国にも利益が無いじゃないか？

ダルリア王国は国内に相当な被害を受け、帝国は南方外征軍を失い、セシル王国は国家としての信用を失う。

…このままではこれが最終的な結果ではないか？

違う！ そんなはずはない！ 帝国は間違いなくこの戦争に勝利するつもりだ。

覇権主義を掲げ、戦争により領土を拡大した国だ。何の勝算も無く戦いを仕掛けるはずが無い。

何かを見落としているはずだ。だが、何だ？

レッドは自分でも気付かない間に立ち上がっており、腕を組んだまま部屋の中を歩き回っていた。窓の外では雨が激しさを増している。

仮に、これまでの動きが全て帝国が勝利するために必要だったと仮定すると…。

落ち着け。最初からだ、最初から考え直すんだ…。

関係する三国間で、ここ数日何があった？

まず、帝国の動きを警戒したセシル王国からの要請により、ダル

リア王国とセシル王国が軍事同盟を締結した。

その後、俺たちは帝国が南方外征軍を帝都に召集しているという情報を得ると同時に帝国に対する監視を強めた。そして、帝国の外征軍はダルリア王国への進軍を開始した。

陛下は北方師団に警戒態勢を取らせたが、目的が不明のため緊急展開師団を帝国に気付かれない位置までの派遣に留めた。

しかし、帝国軍も国境の数日程手前の位置で進軍を停止し、四日程陣を構えていた。その間に俺達は帝国軍の目的を掴むために奮闘した。

……何故だ？ 何故帝国は進軍を停止したのだ？ 行軍により兵の疲労を考慮してか？ だが、それに四日も必要なのか？

宣戦布告を行ってまでダルリアに侵攻するつもりだったのなら、こちらの準備が整う前に仕掛けるべきだ。

…これもだ。何故、帝国は宣戦布告をしたのだ？

確かに戦争前の宣戦布告は騎士道に則った通例ではある。だが帝国はそんなものに従うような国ではない。奴らが目指すのは完全な勝利のみだ。騎士道など持ち合わせていない。

…宣戦布告が帝国が勝つために必要だったのか？

ばかな。あり得ない。

現に宣戦布告されたことにより迷い無く緊急展開師団を前線に派

遣することができ、今も帝国軍の侵攻を防いでいるではないか。

確かに帝国軍の規模は大きく、それだけでは防ぎきめることは困難だった。しかし、前線からの増援要請により元老会議で増援を決め、西方師団、セシル王国軍、そして王都防衛師団の増援を決めた。

これで、こちら側の帝国に対する戦力は十分になった。

セシル王国への援軍要請に気付いた帝国は、今の状況を鑑みて自らの不利を悟りセシル王国に接触し裏切らせたのか？

そうなのか？ それでは、今の状況は帝国の判断ミスが招いた事態なのか？

兵の休養を短くし、帝国のいつものやり方で宣戦布告を行わず、こちらの準備が整う前に国境を突破していれば、帝国にとっては今の状況よりも遥かに有利となっていたらうに。

しかし、帝国が不利な状況だったのなら何故セシル王国は裏切ったのだ？

帝国が不利なら、同盟の破棄などせずに我々と共に戦ったほうが良いではないか？

何故、裏切りを…いや、そもそも帝国はいつセシルと接触し、いつ裏切ったのだ？

セシルに援軍を要請した二日後には西方師団と合流する予定だった。西方師団が壊滅したのはおそらくこの時だろう。

援軍要請に気付いた帝国はたった二日でセシルと接触し、セシルは裏切りを決めたのか？

そんなばかな。国家間の要請と同盟の破棄を行うには、間にさまざまな判断が入るはずだ。そんな短期間でできるわけがない。

ということは、セシルに援軍要請をした時点で既にセシルは裏切っていたということか？

いつだ？ 帝国が前線の突破は容易では無いと判断した時か？

いや、それではやはり帝国が不利であり、セシルにとって裏切る意味は少ない。

もつと前？ 帝国がダルリアに対して進軍を開始したとき？ セシルを裏切らせることに成功したからダルリアに対して進軍を開始したということか？ だとすれば、同盟締結後すぐにセシルと接触していたのか？

…いや、それではタイミングが良すぎる。あれだけの軍を動かすからには相当前から準備をしていたはずだ。セシルの裏切りを取りつけてからの行動なら、こんなに早く攻めて来れるはずが無い。

だとすると・・・セシルの裏切りは予定されていた？

……ひょっとして、セシルは裏切ったのではなく、最初から帝国側なのではないのか？

最初から帝国と組んで、帝国の指示でダルリアと同盟を結んだとすれば……

確かにそうだとしたら、今の状況は納得できる。

味方を装いダルリア国内に侵入し、増援された師団を急襲して壊滅に追い込んだ後に前線で戦っている師団を帝国軍と共に南北から挟撃し、帝国の前線突破を手助けする。

こちらの動きが遅ければ、挟撃により王国騎士団は大打撃を受け、その後の侵攻も楽になるということか？

…いや、違う。落ち着け。これは、今の状況から見た結果論ではない。そもそも、軍事同盟を締結したからといって戦争になれば必ず増援を要請するわけではない。

こちらがセシルに増援を要請しなかったらどうするのだ？ 増援が西方師団と王都防衛師団だけだったら？

セシルに増援を要請したとしても、こちら側の増援が西方師団ではなく、時間が掛かっても東方師団や南方師団だったらどうするのだ？

セシル軍が前線に向かうには必ず西方師団の防衛範囲を通過しなければならぬ。しかし、それでは裏切った時点で西方師団に囲まれ前線の挟撃どころではなかったはずだ。

王都防衛師団が増援に出なかった場合だってそうだ。王都防衛師団が今も王都に残っていたら裏切ったセシル軍を討伐することだって出来たはずだ。

元老達が一つでもそう決断していたら、帝国の作戦は成り立たない。

帝国は賭けに出たのか？

我々が西方師団と王都防衛師団を援軍に出し、セシルに増援を要請すると。

そういう賭けに出て、その賭けに勝ったということなのか？ . . .

そんな国だろうか？

帝国は十二年前のダルリア侵攻では失敗した。今回も失敗すれば、帝国の民が許さないだろう。となれば二度目となる今回は賭けではなく万全の態勢を整えて望むはず。

ということは、帝国には我々の動きが読めていた？

確かに西方師団の派遣やセシルへの増援要請は、今の状況から見えれば一番可能性が高い対応だ。

しかし、王都防衛師団の増援派遣は例外中の例外だ。王都防衛師団が王都を離れるなど、過去に例はない。

これが読めていたと言ういいのか。

そんな馬鹿な。有り得ない！

．．．．．いや、だめだ。否定するな。おそらく現状は帝国の狙い通りのはずだ。否定しては駄目だ。すべてを肯定するんだ。そうしなければ、帝国の考えがわからない。

だが、仮にそこまで読み切ることが可能なのだとしたら、何故こんな回りくどいことを．．．。

セシルとの軍事同盟だって、セシル側からの申し出を受けたただけだ。

セシル側から申し出が無ければ、ダルリアとセシルが軍事同盟を結ぶことは無かったはずだ。

そうなれば、この戦争はダルリアと帝国との戦争だ。そして、帝国がいつも通り宣戦布告をせず、こちらの準備が整う前に一気に国境を突破し、ダルリア内部で前線にいる北方師団に緊急展開師団が合流する前に総力戦を仕掛けることだって出来たはずだろうし、帝国としても分の良い戦いのはずだ。

何故、わざわざこんなことを？

何か理由があるはずだ。

帝国にとって失敗の許されない二度目のダルリア侵攻……。

前回の失敗を教訓にしているのだとすれば、どう動く？

帝国は前回の侵攻を防ぎ、帝国軍を撃退したダルリアの王国騎士団を恐れているとしたら？

そうだとしたら、帝国は王国騎士団と全面的な直接対決は避けたいはずだ。だから、セシルを使い 奇襲するような回りくどいことを？

暗殺者を王宮に放ったのもその一環なのか？

…さてよ、そもそも暗殺者達の目的はなんだったのだ？

王家の命を狙っていた。それは間違いない。だが、それでどうするつもりだったのだ。

暗殺者達が王家殺害を成功していたらどうなっていただろうか？

仮に王家暗殺が成功していたとしたら、王位は大公殿下に引き継が………違う。

あの時、ポスト殿は何と言った？………そうだ、『大公殿下のもとに来た暗殺者を討った』と言っていた。

大公殿下の命も狙われていた？何故だ？何故、暗殺者達は大公殿下が王宮にいることを知っていたのだ？大公殿下は王宮にいないこと自体が稀だ。たまたま見つけたにしては都合が良すぎる。

どういうことだ？

もし、何かしらの手段で大公殿下の居場所を掴んでいたとして、大公殿下までも暗殺されていたとしたら？

恐らく、ダルリアはかなりの混乱に陥るだろう。しかし、それは一時的なものはずだ。ダルリアは決して王族の独裁国家ではない。

仮に国を統べる王家を失ったとしても、元老達が残り、王宮、そして元老院が機能している限り立て直すことは可能だ。

帝国だって、王の権限はダルリアよりは強いが独裁国家ではない。そのことは予想が付いていたはずだ。だとしたら一時期の混乱を目的に暗殺者を放ったのか？

それとも、王宮の機能失わせ、王国騎士団の命令系統を失わせることが暗殺者達の目的だったのか？

ばかな。どんなに手練れだとしてもたった七人で王宮の制圧など絶対に出来ない。

だとしたら・・・

）

- - - ガチャツ - - -

その時、私室の扉が何の前触れもなく開き、シードが入ってきた。その表情には厳しさが伺わせ、自らがここにやって来た理由を早口に告げた。

「暗殺者達の侵入経路が判明しました」

第四章 【7】

「どこだ？」

シードの言葉にレッドは一度考えることを中断する。

「地下にある．．．王家の脱出路です」

シードは躊躇気味に言葉を切りながら答えると、その答えにレッドは驚愕した。

「．．．ばかな。確かなのか？」

「私も信じられませんが、そこ以外に考えられません。現に脱出路に暗殺者のものと思われる足跡も見つかりました」

シードは説明しながらも、自分でも未だ疑問に思っているようだ。「しかし、あそこは王宮にだって知る者は少ない。俺たち以外では、王家と元老くらのい……」

レッドは途中で言葉を切ると、目を見開き動きを止めた。そして、その表情には何か動揺のようなものが浮かんでくると、突然後ろを振り向き机にあった呼び鈴を鳴らした。

「…団長？」

レッドの突然の行動にシードは驚いたが、レッドは背を向けたまま何も答えない。

(そんな…ばかな…)

レッドの頭の中では大きな不安と共に、何かが繋がりがけていた。すぐ後に、レッドの私室の近くにいた侍従が部屋へと入ってくる。

「お呼びでしょうか？」

「ダルリアとセシルの同盟以降に開かれた元老会議の議事録を持ってきてくれ。大至急だ！」

「は、はい。かしこまりました」

語尾を強めたレッドに驚いた侍従は、部屋を出ると急いで議事録を取りに元老院へと向かった。

「レッド、どうしたんだ？」

レッドの行動にただ事では無い雰囲気を感じたのか、シードは参謀長としてではなく友人として声を掛けた。

「少し、待ってくれ。整理したい」

二人はそのまま何も語らず、侍従の戻りを待った。

しばらくして侍従が議事録を持って戻ると、レッドは焦っていたのか侍従から奪うように議事録を受け取ると、侍従は驚いたがシードに促され部屋を出て行った。

レッドは未だ何も語らず、議事録にすばやく目を通している。シードもレッドが話始めるのを待っている。

）

：なんてことだ。これが真実なら帝国やセシルはこちらの動きを全て知っているというのか？

では、西方師団以外に王都防衛師団も増援に向かったことも知っているはずだ…

だから、セシルは後方を心配することなく、西方師団を急襲した。

：帝国とセシルはこちらの動きを全て知っているのだとしたら…
やつらの真の狙いは…

）

議事録に一通り目を通したレッドは目を閉じると眉間に皺を寄せ、両肩を震わせた。そして、先ほどから自問していたことの答えが見えていくのを感じていた。しかし、その答えは、すぐには受け入れがたいものであった。

「元老会議はもう終わっているのか？」

突然、レッドは自らが作り出した沈黙を破った。

「あ、ああ、ついさつき終わったらしく、陛下と大公殿下が陛下の執務室へ行くのを見かけたが。…どうしたんだ？」

「……早急に、王都のドイル卿の館に向かい…ドイル卿を拘束し王宮に連行しろ」

レッドは怒りを抑えながらのためか、ゆっくりと、だが怒りに震える声でシードにそう告げた。しかし、シードはレッドの言葉に驚愕の表情を表す。

「…なに？ 何を言っている！！ 元老を拘束するだと？ それがどういふことかわかっているのか！ 理由はなんだ！」

シードも元老貴族であるディール家の人間である。元老の立場や重みは十二分に理解しているだろう。だからこそ、レッドの言葉が信じられなかった。

「これまでのことは…全て帝国の手の上だったんだ…」

レッドは怒りで全身を震わせながらゆっくりと話し始めた。

「手の上だと？」

「ああ。セシルは…ダルリアを裏切ったのではない。最初から…帝国側なんだ」

(そうとしか…考えられない)

レッドはシードの問いに答えていたが、それは未だ「ありえない」と感じている自分への説得のようでもあった。

「最初から？」

「そうだ。帝国の動きは最初から何かおかしかった」

シードは何も言わずに聞いている。それを肯定と受け取ったレッドは続ける。

「セシルは帝国の指示でダルリアと軍事同盟を結んだ。その後、帝国はダルリアへの侵攻を開始すると、ダルリア側は北方師団に警戒態勢を取らせ、緊急展開師団を国境よりも大分手前の位置で待機させた。この時、帝国は何故か四日間も進軍を停止していた。これは

帝国兵を休ませるためではない。待つていたんだ」

「何を？」

シードは、まだ掴みきれしていない。

「我々を、だ。正確には緊急展開師団が前線に到着するのを」

「どういうことだ？ 何故帝国が我々の増援を待つ必要がある？」

「国境で王国騎士団と戦う必要があるからだ。しかし、元老達は帝国の目的を警戒し、緊急展開師団を前線までは派遣しなかった。そこで、帝国は次の一手としてダルリアに対し宣戦を布告した」

「つまり、帝国の宣戦布告は緊急展開師団を前線に呼ぶためだったと？ 何故そんなことを？」

「王国騎士団を警戒しているからだろう」

「.....?」

シードにはレッドの言っていることが矛盾しているように思えた。「緊急展開師団が前線に到着すると、帝国は王国騎士団に対して戦いを仕掛けた。しかし、前線からの報告では帝国は無理な強襲は行わず、人海戦術による波状攻撃で確実に前線の師団に被害を与え続けた。そして、ついに前線の師団はさらなる増援要請を行わざる得なくなつた」

「それは、前線の突破に時間を掛け過ぎた帝国の誤算ではないのか？」

「違う。増援を要請させるための口実を、前線の師団に与えることが帝国の目的だったんだ」

「わからないな。帝国が王国騎士団を恐れているのなら、何故さらに増援を来させるような真似をする」

「セシルを呼ばせるため。そして、前線である国境を注意を向けさせるためだ。元老達は増援要請に応え、帝国の思惑通りセシルに増援を要請し、西方師団と王都防衛師団の増援を決めた。セシルは西方師団を背後から急襲し壊滅に追い込み、前線への増援は半減した」

シードはレッドの説明に首を振ると手で制した。
「待つてくれ、レッド。話が読めない。セシルを使ってそんな回り

くどいことをするのなら、何故帝国は自ら増援を呼ばせるような真似をしたのだ？」

「西方師団と王都防衛師団に通常展開されていては困るからだ」

「困る？」

「そうだ。ダルリアを制圧するためには、王国騎士団を打ち破る必要がある。ただ、帝国も王国騎士団を力で圧倒できる程の軍を揃えることは難しいはずだ。おそらく、今前線にいる帝国軍以上には揃えられなかった。その規模では王国騎士団全てを相手には出来ない。しかし、数師団を相手にすることは可能だ。であれば、王国騎士団の組織的な動きを封じ、各個撃破すればいい」

「組織的な動きを封じると…そんなこと、国境にいる帝国軍には無理だ！」

王国騎士団は文民統制されており、今王都防衛師団と共に前線に向かっている王国騎士団の団長ルーク・バントエストですら、各師団を決められた防衛範囲から動かすことはできない。動かせるのは元老会議での承認を得た場合のみであり、逆を言えば元老会議での承認があればルークで無くとも動かすことができる。つまり、帝国軍が前線にいる王国騎士団を破ったとしても王国騎士団はその組織力を失わない。

「ああ。王国騎士団の組織力を奪うためには、王宮の、中でも元老院にその機能を失わせる必要がある。そのためには西方師団と王都防衛師団が邪魔なんだ」

「王都防衛師団が邪魔…では暗殺者達は王宮の機能を失わせるためにここに侵入したと？ 確かに、王家の脱出路の出口側を警戒しているのは王都防衛師団だが…」

「違う。奴らはたった七人だった。目的はあくまで将来的な遺恨を残さないように、王家の抹殺を確実なものにするために送り込まれただけだろう。王宮を制圧するのは…セシルだ」

「…な、に？」

「帝国はセシルにこの王宮を制圧させ、元老院の機能を失わせるつもりなんだ。だが、セシル軍はそれ程大きな軍では無い。そのセシル軍を王宮に到達させるためには、セシルとの国境から王都までの間にいる西方師団と王都を守る王都防衛師団の存在が邪魔になる。」

「だから帝国は増援として前線に來させるような真似をしているんだ」

「帝国は自分達を囿に使っている？」

「そつだ。帝国は王宮が制圧された後に、最上位の指揮命令系統を失い組織力を發揮できず、混乱と士氣が低下した王国騎士団を各個撃破していくつもりだ」

王国騎士団は『国家に忠誠を誓い、国家を護る者』である。決して国王や元老達に忠誠を誓っているわけではない。彼らが文民統制を受け入れているのは、この王国の民の一人として、この国の法に従っているに過ぎない。もし、王宮が機能しなくなり元老院からの指示が受け取れなくなった場合、国家を護るために必要と団長であるルークが判断すれば、国家への忠誠の元に法を破り、自ら指揮権を行使し全師団を招集するだろう。しかし、それは大いなる決断であり簡単にできるものではない。仮に連絡が不通となっているだけで王宮自体は機能し、かつ国家のための行動していた場合、ルークはただの反逆者となってしまう。

ルークが王都にいて王宮の状況を掴めているならばその決断も可能かもしれないが、既に王都防衛師団と共に前線に向かっている。仮に混乱させることを目的に帝国側から王宮制圧が前線に伝えられても、ルークは経験豊富であるからこそそれを鵜呑みにはしないだろう。しかし、王宮と連絡が取れなくとも通信球が使えないだけなのか、王宮が機能していなのかを確かめる術はなく、確認には時間が掛かる。その隙を帝国が見逃すとは思えなかった。

「待つてくれ、レッド。確かに今の状況から見ればお前の言うこともわからなくはない。だが、それは現状を逆算したに過ぎないのではないか？ この状況に至るまでには、別な判断が入る余地はいくらでもあった。そもそも、奴らは王都防衛師団が増援に出ているこ

とを知らない。であれば、セシルは前線に向かい前線の師団を挟撃するのが妥当ではないか？」

シードもレッドが途中で感じたことと同じ疑問を感じているようだ。レッドもこの帝国にとってあまりにも都合の良い状況が最後まで気に掛かっていた。

「無論、これが帝国とセシルが描いたものであれば、それは単なる賭けでしかない。だが、奴らはダルリアがこう動くことを知っていたんだ。だから、普段であれば王都防衛師団が頻繁に哨戒している脱出路の出口から暗殺者達は王宮に侵入できた」

王家の脱出路は王宮の地下から王都の外まで伸びており、入り口と出口は巧妙に偽装されている。また、敵側にその場所を悟られないために固定の見張りは立てず、入り口側を近衛騎士団が、出口側は王国騎士団が哨戒のみを行っていた。一見警備が甘いようにも見えるが、そもそもその存在自体を知っているのは、王家と元老達の外には近衛三騎士と王都防衛師団の師団長と王国騎士団の団長、副団長のみであり、実際に哨戒している者達ですら哨戒経路を知らされているだけでそこに脱出路があることは知らない。ダルリア王国の中でも極秘中の極秘事項であり、何重にも偽装されており、偶然で見ることができるものではない。

「知っていた？」

「そうだ。西方師団と王都防衛師団が増援に向かうことも、王家の脱出路の位置も、大公殿下が王宮にいることも全て、奴らは知っていたんだ！！」

「まさか……それが、ドイル卿から伝えられたと？」

「これを見る」

レッドは手に持っていた元老会議の議事録をシードに手渡そうとするが、シードは受け取らない。

「俺に、これを見る権限はない……」

「構わん。責任は俺が取る」

シードはさらに躊躇したがレッドの眼に真実を感じると、議事録

を受け取り眼を通した。

「これ、は……」

「西方師団の全軍派遣、セシルへの援軍要請、王都防衛師団の増援派遣、それらすべてを進言したのは……ドイル卿だ。その上、わかるはずのない大公殿下の居場所と脱出路を帝国は知っていた。これらも元老であればわかることだ!!」

議事録にはドイル卿ガートン・ドイルが他の元老達を誘導し、帝国にとって都合のいい方向に議論を導いている様子が粒さに記されていた。シードは言葉を失い、レッドは怒りに震えている。そして、議事録に載っていない暗殺者達のあまりにも的確な動きも、ドイル卿というピースで埋めることで納得のいくものとなった。

「ばかな。なんて……ことだ……。本当にこの状況が……計画的に作られたものだというのか。……。元老が……王国を裏切るなど……」

シードは真実を突きつけられ、動揺を隠せない。しばらく、議事録を見つめたままだったが、我に返ると議事録をレッドに返しながらゆっくりと口を開いた。

「しかし、ではセシル軍は本当に前線ではなく王宮に向かうのか……」

「間違いない。王都防衛師団がないことがわかって以上、遠い前線に行くより王都に向かった方が帝国にとってはもっとも効果的だ。それがわからないはずは無い!」

「くっ……。どうする?ここには、もう……」

王都を防衛する師団はいない。

「とにかくドイル卿を連行しろ!まだ、何か見えていないことがあるかもしれない。全て聞き出す必要がある」

「……わかった」

シードは、今度は何も言わずレッドの言葉に頷くと部屋を出ようとするが、それをレッドが引きとめた。

「待ってくれ」

レッドの言葉にシードは立ち止まると後ろを振り向く。

「なんだ？」

「それと．．．都市同盟に王家亡命の受け入れ要請を．．．王家を．．．亡命させる」

レッドには何か決意のようなものが垣間見えた。その言葉にシードはレッドの目を真つ直ぐに見据えている。「王家を亡命させる」、「それが何を意味するか、レッドは何を想定しているか、それを参謀長として、友として理解した。

「．．．．．わかった」

「頼む。俺は、陛下に進言する」

二人は共に部屋を出た。

レッドは自らの私室を出てシードと別れた後、真つ直ぐウォルトの執務室に向かった。途中、窓に目を向けると、雨が激しく窓を叩いておりその向こうは闇に包まれている。雨のせいなのか、王都の明りもいつもより暗く見えた。しかし、レッドは歩みを止めることなくウォルトの執務室の前までくると、すばやく扉を叩いた。

「レッド・エストールです。危急の要件があります」

気が焦っていたのか、かなりの早口になっている。

「．．．入れ」

中からウォルト以外の声と何かの話をした後、ウォルトから入室を促す声が聞こえてくる。執務室に入ると中にはウォルトの他に王妃フロリア、デイル卿シャロン、大公ハースがいた。

「どうした？」

レッドの表情から通常とは違う雰囲気を感じ取ったのか、ウォルトは怪訝な表情でレッド見て来た。他の者達もレッドに視線を集めている。

「はっ。まず、国家防衛に関し発言する許可を」

レッドの言葉に、ハースとシャロンが顔を見合わせた後、ウォルトを見た。国家防衛に関して何の権限も持たないレッドが、それに意見することは完全な越権行為である。

「ただ事では無さそうだな。話せ」

ウォルトは、レッドが何の意味もなく越権するような者ではないことを承知しているのか話を促した。

「はい。セシル王国軍は、ここに進軍して来るものと思われます」

「．．．なに？ どういうことだ？ セシルはその動きから見て前線の挟撃を狙っているはずだ。諜報部隊が何か掴んだのか」

「いえ、違います。それは．．．」

レッドは先ほど、シードに説明したことを順を追って話し始める

と、その場にいる全員がレッドの話に耳を傾けた。

レッドの話が終わった後、しばらくの沈黙が流れた。ウォルト、そしてシャロンとハースは元老会議に参加しているため、ガートンの言動に何か思い当たることがあるのか、非常に厳しい表情をしている。そして、その重い雰囲気の中、シャロンが口を開いた。

「陛下．．．レッドの話は信じるに足るものかと。現に先程の会議には．．．」

ウォルトは机に片肘を付き、その手で顔を覆っている。

「ドイル卿は先ほどの会議で何か？」

レッドがシャロンに問いかけたが、その問いにハースが答える。

「参加していない。ドイル卿とセイバル卿は連絡が取れなかったのだ。セイバル卿は戦地の領主のため当初より連絡が付きにくかったが、ドイル卿の理由はわからない」

（遅かった．．．では、もう既に王都を離れた後か．．．）

ハースの言葉にレッドは拳を強く握った。

シャロンは厳しい表情のまま目を閉じ口元に拳をあて何かを考えていたが、再び目を開くと体ごとウォルトに向き直った。

「陛下、リーフポートの放棄を宣言します。リーフポート及びその周辺住民を避難させる許可を」

ウォルトは手で顔を覆ったまましばらく動かなかったが、シャロンの言葉に顔を上げる。

そして、そのシャロンの声、その眼には堅い決意が伺えた。リーフポートは西方師団の砦から王都まで続く道沿いにあり、セシル軍が王都に向かうとすれば必ず通過すると思われる。ウォルトはシャロンからその決意を感じ無言で頷くと、それを聞いていたフロリアが突然声を上げる。

「シャロン殿！．．．．民をオーシャルカーフへ。兄へは私から連絡しておきます」

「フロリア様．．．ありがとうございます。そうさせて頂きます」

シャロンはフロリアに深く感謝すると、避難の手配をするために執務室を後にした。オーシャルカーフは元老の一人であるゴート卿ダニエス・ゴートが治める南方の街であり、ダニエスはフロリアの実兄である。

シャロンが部屋を出ると、しばらく声を発さなかったウォルトが口を開いた。

「ハースよ、王都の民を受け入れてくれ。少し距離があるが、王都の人口を収容できるのは公都以外にない。移動に堪えられぬ者は王宮に避難させてくれ」

ウォルトも王都の民の避難を決めた。

「わかりました。王都の民の避難は私の方で手配させていただきます」
「頼む。それと、一刻後に再度元老会議を開く。招集しておいてくれ」

「はい」
ハースも執務室を後にした。部屋にはウォルトとフロリア、そしてレッドが残された。

「陛下、先ほどの元老会議ではこちら側は何か動きを？」
「当初は前線を撤退させる予定だったが、王都防衛師団が未だ移動中で連絡が取れない。負傷者を抱えた北方師団と緊急展開師団だけで退却戦を行わせることは難しいため、王都防衛師団の前線到着を待つて撤退させることにした。しかし、それもやめねばなるまい。」

お前の話が正しければ、前線の撤退は帝国の思う壺だ」

「公都防衛師団は既に公都を出られたのですか？」

「ああ、今日中に公都を出る予定だ。三日程で到着できるだろう」
「」

(三日……もはや、選択の余地はない)

レッドはウォルトの顔を真っ直ぐに見ると、ここに来た理由を話始めた。

「陛下、ドイル卿が帝国側であった可能性が高い以上、公都防衛師団が王都に向かっていることも帝国、そしてセシルは知っているで

しょう。西方師団砦から王都までは二日程で到着します」

レッドは真つ直ぐにウォルトの目を見ている。ウォルトもその視線を正面から受け止めた。そして、レッドは現在の状況を説明していったが、途中でウォルトは何かを感じたのかレッドの言葉を手で制した。

「レッド．．．．何が言いたい？」

ウォルトの言葉にレッドは一度目をつぶると、自らを落ち着けるため深く呼吸をした。そして、目を開けると再度ウォルトを正面から見据えた。その目には強い決意が伺える。

「．．．．陛下。王家の、都市同盟への亡命を進言します」

レッドの声は決して大きくは無かったが、しかしはつきりとした口調でウォルトに伝えた。ウォルトはその言葉に顔色を変えると、勢いよく立ち上がった。

「駄目だ!!」

ウォルトは即座にそれを拒否すると机を離れ、レッドの正面へと移動する。

「王国騎士団は未だ国境で戦っている。王宮内にも多くの民が残ることになるであろう。そんな中で我々王家だけが亡命するわけにはいかない!!」

「しかし．．．、セシル軍は西方師団との戦いで相応の被害を出ているとしても、数千は残っているものと思われます。その上、王都には既に防衛師団は無く、残るは我ら王宮の近衛騎士団二百余名のみ。とても退けられません!! 仮に、制圧直前に王宮を脱出出来たとしても、王国の指揮機能が奪われれば帝国に下ったも同然! そうなれば帝国は、民の命と引き換えに王家の首を要求して来ます! 今国外に出なければ、王家はこの国をも敵に回しかねません!」

レッドの口調はいつになく強い。無論、王国の民から厚い信任を

得ているカイザス王家を民が帝国に差し出すような事をするとは思えない。だが、それでもそれに甘える訳にはいかなかった。そうなれば、民も、そして王家も苦しい立場、判断を迫られることになる。しかし、今国外に亡命すれば民からは恨まれることになるかもしれないが、帝国は王国内にはない王家の命を取引材料とすることは出来ず、王家も命が救われる可能性が高い。王家を護るためにはレッドにとっては亡命こそが最善の策と信じていた。

だが、ウォルトも自分達を慕う王国の民を見捨てて亡命することは出来なかった。レッドの言うことも理解出来たが、だからこそやり場の無い怒りが込み上げ、ウォルトの口調は荒くなった。

「では、未だこの国の為に戦っている王国騎士団や王宮に残された民を見捨てて行けというのか!!」

「国家防衛は王国騎士団が責務。我らの責務は王家の守護です!!」
王家の守護、それはレッドの信念でもあった。大恩あるウォルトとフロリアを守るためにレッドは近衛騎士になったのだ。

「国を捨て、王家だけが生き残ることになんの意味がある!!」

「..... 返答しかねます」

レッドはうつむいた。ウォルトもはつとし、レッドから視線を外し目を伏せた。

「すまぬ.....」

王家が生き残ることの意味の否定、それは近衛の誓い、そして責務の否定でもある。ウォルトは素直に謝罪した。

「いえ.....」

.....長い沈黙が流れた。そのためか、雨が王宮を叩く音が執務室内に強く響いた。しばらくその状態が続いていたが、ウォルトが先程までとは違い、ゆっくりと落ち着いた口調でレッドに語りかける。

「レッドよ、お前だっただけでわかっているはずだ。王都が、王宮が落ちればどうなるか.....。公都防衛師団が到着するまででよいのだ。

王宮を、民を守ってくれ.....」

レッドは答えなかった。またしばらくの沈黙が続く。レッドは目を閉じ何かを考えている。ウォルトはレッドの言葉を待っていたためか、長い沈黙になった。フロリアはそんな二人を見ていられないのか目を伏せ、うつむいている。

そして、レッドは目を開けると顔を上げた。その眼には何か覚悟を決めたような強さがあった。レッドはウォルトと再び目を合わせると強く、はつきりとした言葉でその覚悟を伝え始めた。

「陛下、近衛騎士団の団長として現状を有事と判断し、近衛騎士団有事大権の法に基づき陛下を．．．」

「レッドオ！！！」

しかし、ウォルトはレッドが何を言おうとしたのかわかったのか、割れんばかりに声を張り上げレッドの言葉を遮った。その表情には焦りが伺えた。

「レッドよ．．．頼む．．．」

ウォルトは声を絞り出す。ウォルトの発した『頼む』という言葉、国王であるウォルトが近衛騎士団の団長であるレッドに発する言葉とは到底思えなかった。だからこそ、レッドにはその言葉が強く胸を突き刺さった。

再び、何度目かの沈黙が流れる。レッドは一瞬フロリアに視線を送ると、フロリアはその視線をやさしく受け止めた。レッドはそのフロリアから視線を外すと、ゆっくりと目を閉じた。

「．．．わかりました。では、せめてフロリア様と両王女、それに大公殿下だけでも亡命を．．．」

レッドはここに来た時とは違う覚悟を決めた。

「．．．．．うむ。皆を．．．．．亡命させてくれ」

ウォルトは、自らはこの国の王としてその責務を果たす覚悟は決めていた。しかし、それでも家族の身は案じていないはずはなかつ

た。

ウォルトが自分以外の王族の亡命を決めたが、その言葉を聞いたフロリアは二人のもとへと歩み寄った。そして、それまで二人のやり取りを黙って聞いていたフロリアが静かに口を開く。

「私は参りません。亡命はメリルとミーナ、それに大公殿下を」

ウォルトはその言葉に驚いてフロリアに詰め寄る。

「フロリア！！何を言っている！駄目だ。お主は亡命してくれ！」

「フロリア様……」

レッドもフロリアの言葉に驚きを隠せない。

「亡命とは万が一の為に王家の血を絶やさぬための行為のはず。王位継承権を持たない私が亡命する必要はありません。陛下が残るのであれば私も残ります」

フロリアは慌てている二人をよそに、既に決まっていることを話すように淡々と、しかし力強く語った。

「しかし……」

レッドは困惑した。まさかフロリアまで残ると言い出すとは思っていなかったのだろう。そんなレッドにフロリアは優しく微笑んだ。「陛下、そしてレッドも、もう何も言わないで下さい。考えは変わりません」

フロリアの眼には決意が込められていた。

「フロリア……、すまない」

ウォルトはフロリアに歩み寄ると、レッドの目を気にすることも無く強く抱きしめた。レッドはそこから静かに視線を逸らす。

フロリアもウォルトを抱き返した後に離れると、レッドに歩み寄り手を取り強く握りしめた。

「レッド、メリルとミーナの亡命をお願いします」

「……かしこまりました」

レッドは複雑な感情の入り混じった震えた声でそう言うと、二人に敬礼をし執務室を出た。執務室の扉を閉めるとレッドはしばらく

その場に立ち尽くしていた。正面の窓には未だ降り続く雨が見える。レッドは少しの間その雨を眺めると、自室へと向かって歩き出した。

「シード、ポスト殿．．．．．」

レッドが自室前まで来ると、扉の前でシード、そしてそのシードから連絡を受けたポストが待っていた。レッドに気付いたシードが駆け寄ると早口に話し始めた。

「レッド、都市同盟が亡命の受け入れを了承してくれた。こちらの準備も問題ない。いつ出る？」

「．．．．．」

レッドは無言だった。

「団長？」

ポストが怪訝な顔でレッドを見ると、レッドもポストの方に目を向けた。

「ポスト殿、メリル王女とミーナ王女、それに大公殿下を連れて明日の朝、都市同盟へ向かって欲しい。陛下とフロリア様はここに残られる。俺とシードはここで公都防衛師団の到着まで王宮を護る」

レッドは表情を変えずに坦々と二人に今後の動きを伝えた。

「なっ．．． 本当か？ それが陛下の意思なのか？」

シードの言葉にレッドは無言で頷いたが、シードは眉間に皺を寄せ戸惑いを隠せない。

「団長、今は有事ですぞ」

「．．．わかつている」

ポストはレッドに何かを確認したが、レッドは静かに頷くと短く返事をした。その後もポストはレッドの目を見据えたが、レッドもその視線から目を逸らさずに見返した。その視線から何かを感じたのかポストは一度目を閉じると静かに口を開いた。

「そうですね．．．では、これ以上は言いますまい。私は亡命の準備を整えます」

ポストはレッドに敬礼をすると、シードを残しその場を離れた。

「ポスト殿！！」

シードはポストを呼びとめたが、ポストは何も言わずそのまま去ってしまった。

「レッド、本当なのか？ セシル軍から王宮を近衛騎士団だけで護り切れると？」

シードの言葉にレッドは何も言えなかった。

「レッド．．．いや、すまない．．．。わかりました、これより王宮防衛のための準備に取り掛かります」

シードはレッドの態度に自分を戒めた。幼少の頃より交流があり、互いに信頼し合い、共に近衛の道を歩んできた友の決断を信じ、自らの参謀長としての使命を全うすることを決めたようだった。

シードもレッドに敬礼をすると、足早にその場を離れて行く。レッドはその後ろ姿を見送ると、自室へと入った。そして、灯り付けることも無く執務机の椅子に座ると、両肘を付き、顔の前に組んだ手に額を乗せた。

部屋の中は、王宮を叩く雨の音が一層強く鳴り響いていた。

第四章 【6】

翌日の早朝、ウォルト達王家の者達とハース、そしてレッド他護衛の近衛騎士団が王宮の正門に集まっていた。正門の前には王家専用の馬車が二台止まっている。

フロリアは涙を流しながらも笑顔を作り、娘達を順に抱きしめていた。フロリアの隣ではジュリアが護衛として付いていたが、目から溢れそうな涙を必死に堪えている姿があった。フロリアはジュリアも共に行かせることを望んだが、ジュリアの意思でフロリアの護衛として王宮に留まることになっていた。

「父様と母様は行かないの？」

目から涙を溢れさせながら、第二王女であるミーナは父であるウォルトを見上げる。ウォルトはミーナの肩を優しく抱くと、努めて優しい声でミーナに語りかけた。

「王としてやらねばならぬことがある。大丈夫だ、すぐにまた会える」

ウォルトは顔を上げると、そこには必死に涙を堪え気丈に振舞おうとしている第一王女のメリルの姿があった。

「メリル、頼んだぞ」

メリルは静かに頷いた。ウォルトが第一王位継承者であるメリルに対して言った『頼む』という言葉にはさまざまの意味が込められている。ミーナには伏せられていたが、次期国王であるメリルにはこの後になにが起こるか、何故自分が亡命しなければならぬか、最悪の事態が発生した場合、自分は何を成すべきか、それを昨夜のうちにウォルトより伝えられていた。

メリルは自分の立場をよく理解していたが、まだ若くその重圧は耐え難いものであった。しかし、自分がここで泣き崩れれば、周りをさらに不安にさせるだけだということもわかっており、必死に耐えていた。

「皆さん、そろそろ参りましょう」

メリルは平静を装いミーナの肩に優しく触れ、そして一度も涙を見せることなく、ミーナを連れて馬車へと乗りこんだ。しかし、レッドはその両肩が小刻みに震えていることに気づくと、それが見ていられなかったのか目を逸らした。

ウォルトは娘達が馬車に乗り込むのを確認すると、ハースへと歩み寄る。

「ハースよ、娘達を、頼む」

「……かしこまりました。陛下も……ご無事で」

ウォルトは娘達をハースに託すと、ハースもそれに応えることを約束し、別の馬車へと乗り込んだ。

レッドは両王女とハースが馬車へ乗り込んだのを確認すると、二台の馬車の先頭で出発準備をしていたポストへと近づく。

「ポスト殿、よろしくお願いします」

レッドは無意識にポストに頭を下げそうになったが、ポストがそれを手で制すとレッドの表情から何か揺らぎを感じたのか、一歩近づいてその目を確認するように見ると、その視線にレッドは思わず目を逸らした。

「団長、こちらはお任せ下さい。……一つだけ、よろしいか？」

ポストの問いかけに、レッドは再度ポストの顔を見ると静かに頷く。それを確認したポストは二人にしか聞こえない声で話始めた。

「団長、どんな理由があろうとも御自分で判断されたことは最後まで責任とそして自信を持ち、御自分を信じて下さい。近衛騎士団は皆が団長を信じるのです。私があなを団長に推薦したのは、何も王家との繋がりが強いというだけではありません。あなたであれば近衛騎士団の団長の任に耐えられる、そして必ずやその責任を全うできると思えたからです。御自分を信じ、決してその決断が揺るがぬよう」

ポストの言葉にレッドは強く頷くと、ポストはそれに満足した表情を浮かべ、レッドに敬礼をすると馬に跨った。

「では、いずれまた」

ボストは周りの近衛騎士達と馬車の従者に合図をし、レッドが後ろに下がったことを確認すると都市同盟へと向けて出発した。

ウォルト達は誰も言葉を発することなく馬車が見えなくまで見送ると、王宮内へと戻って行った。

その日、王都は緊張感に満ちていた。王都ではハースが出発前までに手配していた公都への民の移動が開始されている。その指揮には王都の憲兵隊 があたっており、各区画ごとに順番に移動を開始していた。

その移動を開始する前に、憲兵隊により公都に避難する理由が王都の民に伝えられており、王都が攻められるという衝撃と不安で、大多数の住民が通りに溢れて いるにも関わらず異様な静けさに包まれていた。王都の子ども達は、用意された馬車へ優先的に乗せられ出発しようとしていたが、その中の一人が一時的には いえ親と離される辛さからか、泣き叫んでいる。

また、馬車での移動にも耐えられない老人や、病傷人、または自らの意思で王都に残ろうとする者達は王宮への避難手続きをするために、王宮の正門に列を作っていた。

しかし、王都の民が避難する公都シーキスも決して安全といえる状況では無かった。王都ルキア、そして王宮が落ち、前線が突破されれば帝国の次の目標は間違 いない公都シーキスになる。王都ルキアと公都シーキスはダルリア王国の象徴的な街であり、この二つの陥落はダルリア王国の陥落と等しい。しかも、王都にある王宮とは違い公都の大公宮には城壁は無く、王宮よりも守りの戦には適さなかった。王都の民の避難は民への被害を遅らせるだけのことになるかもしれないが、それでも間違 なく戦場になるであろう王都に残すわけにはいかなかった。

王宮内も王都と同じくらいに異様な緊張感に満ちていた。自ら残

ることを選んでくれた文官や侍従達以外は既に避難していたため、王都の民の避難場所の準備も近衛騎士団が行っていた。セシル王国軍がここに向かっていることは既に確認され、王宮内にも通達されているため、王宮内の全ての人間の表情には不安と恐怖が伺える。レッドはポスト達を見送ったあとに諜報部隊にセシル王国軍の状況確認を行うように手配すると、シードと共に王宮防衛のための方策を検討するために、レッドの自室へと入っていった。

そして、ダルリア王国の王家が亡命したのと時を同じ頃のセシル王国では、国王ビント・セシアルの私室に秘書と思われる濃い青の髪をした青年が訪れ、ビントに現状の説明をしていた。国力の差からか、王宮の大きさはダルリア王国の王宮と比べると半分以下であり、国王の私室も相応の作りとなっている。部屋の壁際には窓の他には絵画や壺などの置き物、床には高そうな絨毯が敷かれているが、全体的な調和は取れておらず、何か一つ一つが浮いたようになっていた。その中の一つである執務机の椅子にビントは座っている。

「明後日の昼前に我が軍はダルリア王国の王都ルキアに到達します」「予定通りだな」

「はっ。それと、ベルドラス帝国より連絡がありました。『公都シークスの防衛師団が王都に向かっていて。到着前に王宮を制圧し、王国の指揮機能を奪取せよ。制圧後は速やかに王家を殺害し、それ以外の王宮の者達を人質とし、公都防衛師団の足止めとせよ』とのことですよ」

「王家の殺害……か。偉そうなことを。要は帝国の失敗の尻拭いではないか。帝国が王家の暗殺に成功していれば、その混乱に乗じて楽に制圧出来たものを。……まあ、よい。我々の軍だけで、事を成功させれば、それだけ後の交渉も有利になる。承知したと伝える」

「はっ……」

男は返事をしたが、その場を動かさない。

「なんだ？」

「本当に……よろしいのですか？」

「何がだ？」

ビントは不機嫌そうに眉間に皺を寄せる。

「元より形だけだつとはいえ、同盟国に対する裏切りを犯せば、この大陸でセシル王国は外交的に孤立するようになるのでは？」
「今さら何を言う？ 既にダルリア王国の師団を一つ潰しているのだ。もはや後には引けん。そもそも引く理由も無い。帝国の力は強大だ。いつまでも抗っていられる相手では無い」

「しかし、このままでは帝国の属国と化してしまうのではありませんか？」

「心配するな。そもそも今回の話はこちらから持ちかけたのではなく、帝国側の話に乗ってやったのだ。帝国に貸しはあつても借りは無い。この戦争の終結後には我々にとって有利な同盟を組むことができるだろう。この国で脈々と続いてきた我がセシアル家の歴史は私で止める分けにはいかんだ。それに、ベルドラス帝国という後ろ盾を得れば今回の外交上の汚点など取るに足らない些細なことだ」
「セシアル家の歴史……、しかし、それでは民が」

「もうよい。下がれ!!」

「はっ……」

男は一礼すると、ビントの私室を出た。魔石の明りが灯った廊下を自分の執務室へと向かって歩いていくと、その途中で一人の老人が後ろから呼び止め男に近づき、二人で歩きだした。

「陛下の所へ行っていたのか？」

「はい。現状の報告と帝国からの指示を伝えに。それと、陛下の意思を確認しようと……」

男は俯いた。

「陛下の意思？ やめておけ。いまさら手遅れよ」

二人の表情は一様に暗い。

「陛下はどういうつもりなのでしょう？」

「あのお人は身勝手な上に世間知らずなのよ。この国のことよりも自分の立場、セシアル家の存続に重点を置いておられる。その上、この国は元より閉鎖的で他国との外交関係が薄かったこともあるが、外交というものがわかっていない」

「陛下は戦争終了後に帝国と有利な同盟を締結し、それを後盾にして他国との外交を行うつもりなのでしょう」

「ばかな……この国と帝国との国力の差は天と地だ。帝国が我々にとって対等以上の同盟を組むなど有り得ない。何故帝国が我々そのような同盟を組むと思っておられるのか……」

「帝国に貸しはあっても借りは無いと言われていました」

「愚かな……いや、それもこの国の政体が故か。国と国との関係と個人の関係を一緒にされておられる。些細なことならともかく国家にとって大きな判断を下す際に、貸し借りなどが検討の材料になることなど無いと言うのに」

セシル王国はダルリア王国の元老会議のように合議制でも無ければ、ベルドラス帝国の評議会のように法的に国王に意見できるような組織も無い。いわば絶対王政である。

そのため、全てに置いて国王の独断で決まり、今回の件もビントの独断である。絶対王政であり、かつ外交経験がほとんど無いビントは、相手側の国も自分達と同じようなものだと思い、国と国との関係を国王と国王の関係、いわば個人の関係として捉えているようだった。

「やはり、帝国は約束を護らないと？」

「約束？ ああ、『領地維持』のことか？」

「はい」

「帝国の王がその名において約束したのであれば、それ自体は守られるであろう。だが、それは『領地が維持されるのみ』だ」

「それでは、やはり……」

「うむ。帝国が直接支配せず、我々に自治権を与えればそれは領地が維持されていることになる。例え、力で脅し従属国として協力金という名の重税を掛けられようともな……」

「陛下はそのことがわかっていないと？」

「まったくわかっていないと言う事も無いであろうが、陛下にとってそれはそれほど重要では無いのである。税金を徴収する立場のセシアル家にとっては求められた分を増やせばいいだけで、直接の被害は少ない」

「……我々はどうすれば？」

「ここまで来てしまった以上もはや止められない。仮に止めても、今度はダルリア王国だけでなく、帝国をも敵に回すことになる。そうなれば、この国は終わりだ。ここまで事が進んでしまった以上は、帝国側に付くしかない」

「では、属国として生きると？」

「二カ国と戦争することは出来ない。もはや、致し方ない……」

「……それが、我々が生き残る道、と言う訳ですか」

二人は暗い廊下の先へと進んで行った。

第四章 【10】

メリル達が亡命をした翌日、レッドとシードは前日に二人で検討した王宮防衛策を伝えるために、待機部屋の会議卓に今回の王宮防衛で各所で指揮を取るようになるであろうバルクード他熟練の近衛騎士達数名を集めていた。

まずレッドが全員に対して現状の報告を始める。

「既に知っていると思うが、セシル王国軍がここ王都ルキアに向けて進軍を開始した。王都には既に王都防衛師団は無く、我ら近衛騎士団がセシル王国軍を迎え撃つことになる。諜報部隊からの報告によると、セシル王国軍は西方師団との戦いにより六千程までに規模が縮小している。無論、それでも我々だけで迎撃することは困難だ。しかし、公都シーキスから公都防衛師団がここに向かっている。到着は明日の夕刻の予定だ。我々はそれまでここを守りきる」

レッドは努めて冷静な声で伝えた。レッドの言葉にその場にいる近衛騎士達は何も言葉を発さなかったが、全員が納得しているとは言い難い雰囲気だった。レッドもその雰囲気、そしてその理由もわかってはいたが何も言わなかった。

「ではシードから王宮防衛策について説明してもらおう。シード、頼む」

レッドは隣に座るシードを促す。

「わかりました」

シードは立ち上がると近衛騎士達の方を向き説明を始めた。

「現在、王宮そして王都には近衛騎士団の他に王都憲兵隊がいるが、憲兵隊は公都に向かう民を護衛するために共に公都に向かつてしまふ。よって、戦力は我々のみと考えてもらいたい。まず、相手と我々の戦力の差を考えると、こちらから打って出るとは得策ではない。どんなに策を弄しようとも数に圧倒されてしまうだろう。その上、帝国の暗殺部隊もセシル軍に潜んでいることも大いに考えられ

る。また、広大な王都の防衛も我々だけでは不可能だ。王都の民は避難することを鑑みて、王都は捨てざる得ない」

近衛騎士達もシードの言葉に悔しさを表情に出している者もいるが、他の案を持つ者はいなかった。シードは周りの反応を確認すると言葉を続けた。

「そういつた状況を考え、防衛範囲を王宮内に絞り込んだ籠城策を基本方針とする」

シードはそこまで話すと、卓の上に大きな羊皮紙を広げた。そこには、王宮の城壁とその内側にある王宮、元老院を上から見た図が描かれていた。レッドも含め、その場の全員がその羊皮紙に視線を移す。

「知つての通り、城壁の東西南北にある城門のうち、正門となる南門以外は全て掛け橋となっている。これらは全て上げておく。しかし、正門は石橋のため外すことは出来ない。よって、ここでセシル王国軍を迎え撃つことになる」

「正門を閉め、その内側で陣を張ると言う事ですか？」

一人の近衛騎士の質問にシードではなく、レッドが答える。

「いや、門は開けておいたほうがいいだろう。セシル王国軍が当初から王宮を攻めるつもりだったのなら、破城槌はつじょうきを準備しているはずだ。そうなると、城門を閉めたとしてもそれほどは持たないだろう。閉めていた門を突破されると、それだけで土気は大きく下がる。突破されて土気の低下を招くよりは、最初から開けておいたがほうが、こちらの土気を維持しやすい」

「確かに……」

「門を陣魔法で封印しては？」

別の近衛騎士の意見に、今度はシードが答える。

「門に鍵を閉めたのとそれほどの違いは無い。確かに陣魔法で門を開かなくすることは可能だが、材質を変えられるわけではない。門が木製である以上はそれほどの効果は望めないだろう」

門を陣魔法により封印しても、門そのものを破壊されては封印自

体も無意味となる。意見した近衛騎士はシードの話に納得したのか、力なく頷いた。

そのすぐ後にずっと考え込んでいたバルクードが発言を求めると、シードは軽く頷き発言を促した。

「今までのと少し外れた考えになってしまいましたがお許しください」
バルクードはそう前置きすると話始めた。

「陛下と王妃様に亡命しないまでも公都へ移動してもらおうというのはいかがでしょうか？ 加えて王宮の指揮機能も共に公都へ移転するのです。セシル軍が陛下と王宮の指揮機能の停止が目的なのであれば、その目的を失くしてしまうというのはどうでしょう」

バルクードの案に周りの近衛騎士達は賛同したが、レッドはシードと顔を見合わせると、首を横に振った。

「それについても検討した。元老院の文官達からも意見を聞いたが、指揮機能の移転にはどんなに早くても七日は掛かるとのことだ。それに、王宮に残る民達の中には移動が難しい者が多数いる。その者達を連れて行くことは難しい。そうなれば、陛下も王宮を離れることはないだろう」

レッドの言葉にバルクードは考えが浅はかだったと謝罪したが、レッドはそれを否定するように首を振った。その後もうつつかの案が出されたが、どの案も時間的に難しく最終的にはシードの説明した案を基本に細かい修正がいくつか加えられるに留まった。

最後にレッドは決定した王宮防衛策のまとめに入る。

「では、繰り返し返す。まず、本日中に東、西、北門の架け橋は上げておいてくれ。当日の朝は王宮に避難してきている民を一階の我々や文官達の食堂に誘導。そこであれば広さは申し分無い。そして……バルクードは近衛百五十名を連れて正門の内側で陣を張りセシル王国軍を迎え撃て。陛下と王妃様には謁見の間に移動してもらい、そこには俺とシードの他に四十名の近衛騎士を配置、それ以外の近衛は民と文官や侍従達のいる食堂に配置する」

ウォルトとフロリアを私室ではなく、謁見の間に移動させるのは

セシル軍に暗殺部隊が含まれていたが場合、室内戦に長けた暗殺者を相手することになった場合、狭い王家の私室よりは近衛騎士達の武器であるバスタードソードを存分に振れる謁見の間の方が戦い易いとの考慮である。

「それと、今日はかなり忙しくなると思うが、出来る限り交代で休憩を取ってもらいたい。明日の朝までには全員が一度は睡眠が取れるように作業を分担して欲しい」

レッドの言葉に全員が頷きながらも、その場にいる近衛騎士達は全員が近衛の使命を胸に刻まれている熟練の近衛騎士故か、複雑な表情を浮かべていた。既に決まったこととして、誰も口には出さなかったが、ウォルトとフロリアを護る最善の策は亡命だと感じており、今の案で本当にウォルトとフロリアの命を護れるのか不安と疑問を感じているようだった。

検討に参加していた近衛達が職務に戻ると、卓にはレッドとシードが残った。待機部屋に残っている近衛達の表情も一様に暗い。それを見たシードが口を開いた。

「団長、このままでは……」

「わかっている」

レッドはシードの言葉を遮るように返事をすると、シードもそれ以上は言葉にしなかった。規模で圧倒的に劣る近衛騎士団にとって士気の高さまで下回れば、一気に瓦解する恐れがある。しかし、その士気が現状とても高いとは言えなかった。

その後、レッドとシードは各所で直接指揮を執りながら、明日のための準備を整えていった。

一通りの準備が終わり、レッドは自室へと向かいながら窓の外を見ると既に日は半分沈み、夕日が美しく王宮を照らしている。しかし、レッドには夕日が沈む姿がダルリア王国と重なるようで目を背けた。

その日の夜、レッドは自室の窓の側に立ち夜空を見上げていた。既にあと数刻もすれば東の空より日が昇る時間になっていた。

明日の戦いに向けて準備を整え、シードと最終的な確認を先程までここで行っていた。しかし万全とは言えず、ただ出来る事をやっただに過ぎなかった。中でも近衛騎士団の士気の低さは深刻な状況になっていた。

俺のせいだ。手段を述べるばかりで、目的を述べていない……。だから皆が行動に疑問を抱き集中力を欠く。

我々の目的……

近衛騎士は王家を護る存在だ。そもそも俺は……王家を護ろうとしているのか？

一体、何を護ろうとしているのだ……

陛下とフロリア様を護るためには……今からでも遅くは無い陛下を……

レッド自身も未だ揺れていた。自分が何をしようとしているのか、何を護ろうとしているのか、それが自分でもわかっていないようだった。

(ポスト殿……あなたであればどう決断されたのか……)

夜空を見上げるレッドの表情は暗く、昼間にポストの言っていた言葉を重く感じていた。

その時、部屋の扉が夜中のためか静かに叩かれた。しかし、叩か

れただけであり、その後名乗る声もしない。レッドは扉の方を見ると訝しんだが、近付いて行くと警戒しながら扉を開ける。すると、そこには金色の髪の少女、ジュリアがいた。既に休憩に入っていたのか、鎧は着ておらず身軽な服装をしている。

「ジュリアか。どうした？ 声も出さないで」

「す、すみません。眠っていたら、申し訳ないと思って……」

突然扉が開いたためか、ジュリアは驚いている。

「休憩に入ったのか？」

「は、はい。少し前に。ただ、眠れなくて、レッド様の部屋から明りが見えたもので……」

「少し考え事をしていてな」

レッドはそう言うと、ジュリアを部屋へと招き入れソファに座らせた。

「何か飲むか？ と言っても、お前が飲めるのは紅茶くらいしか無いが」

「あ、いえ、大丈夫です」

ジュリアは断ったが、レッドは二人分の紅茶を入れるとテーブルに置きジュリアの正面に座った。

「どうしたんだ？」

「すみません。本当に何かあるわけではないのですが、その、寝れなくて。迷惑でしたか？」

ジュリアは申し訳無さそうに俯いて、上目づかにレッドを伺っている。

「いや、大丈夫だ。さっきまでシードと話をしていて、その整理をしていたところだ」

二人は紅茶に口を付けると、互いに口を開くのを待った。しかし、どちらも口を開くこともなく、少しの時が流れるとレッドの方が話始めた。

「お前まで残ることになってしまつてすまないな」

「いえ、そんな。私はフロリア様の護衛の任務がありますから。私

は最後までフロリア様をお護りします!!」

「そうか……」

ジュリアは声からは不安と力強さが感じられたが、その言葉を聞いたレッドの表情には悲しみが伺えた。レッドの本心を言えば、ジュリアもメリル達と共に都市同盟への亡命に同行させたかったのだろう。しかし、フロリアの護衛に付けたのはレッド自身であり、フロリアの護衛は他にもいる。この状況で、ジュリアだけ護衛から外し亡命の同行に加えれば、不信感を招き兼ねない。レッドは今更ながら、ジュリアをフロリアの護衛としたことを後悔していた。

「……レッド様」

「ん？」

「明日を乗り切れればまた、メリル様達に会えますよね？ また、今まで通りみんなで王宮に暮らせますよね？」

ジュリアは俯くと、そう呟いた。王宮に残ったことは決して後悔していなかったが、さまざまな不安がジュリアの心にあるようだった。

「……大丈夫だ。しばらくは別々になるだろうが、一月もすればまた今まで通りの生活に戻るさ」

レッドがそう言つと、ジュリアは嬉しそうに微笑んだ。だが、レッドは何の根拠も無く、下手をすれば一月後にはここは帝国の領土になっている可能性もある状況で、自分の言った無責任な言葉に嫌悪した。

「陛下が王宮に残られると判断されたと聞いて、その時私もシード様に手伝って亡命手続きの手伝いをしていたので、その事を聞いたときは驚きました。でも、陛下が民のため、王国のために王宮に残られると判断されたことをとても尊敬します！」

（俺もそう思うし、陛下を尊敬することは良い事だが、それだけでは近衛の使命は果たせない……）

ジュリアの言葉にレッドは頷いたが、心の内までは話さなかった。「陛下が示された意思のために、微力ながら私も精一杯がんばりた

「いいと思います！」

「……そうか」

ジュリアの無垢な言葉にレッドは優しく微笑んだ。「すみません。何か、わけもわからなく来てしまって……。でも、レッド様と話たらなんだか落ち着きました」

ジュリアも強がっているが、心は不安でたまらないのだろう。経験が浅く、全てを理解出来てはいるわけでは無いだろうが、明日起こるであろうこの国の存続を賭けた戦いに戦争はおるか実戦経験すらないジュリアが平静でいられるはずも無かった。

「眠れそうか？」

「はい」

「では、そろそろ休んだほうがいだろう。明日は厳しい一日になる。眠れる時に眠っておいたほうがいい」

レッドは立ち上がると、ジュリアは自分とレッドの紅茶のカップを手にとって立ち上がった。

「その言葉、そっくりお返しします」

立ち上がったジュリアはレッドに心配そうな視線を送った。

「？」

「レッド様が最近休まれているところをほとんど見てませんよ。部屋に来てほとんどいないし……」

そこまで言うと、ジュリアは『しまった！』という表情をして紅茶のカップを片付け始めた。

（最近来ないと思っていたら、俺がいなかったのか……）

「あ、あの、でも本当にレッド様も休まれたほうがいいですよ」

ジュリアはレッドとは目を合わせずに、紅茶のカップを片付けながら言った。

「ありがとう。大丈夫だ、合間にそれなりには休んでいるよ。昔からサボるのは得意なんだ」

「えっ！！ あ、危ない！」

ジュリアはレッドの口頃とは違う予想外の言葉に、驚いてカップ

を落としそうになったが、なんとか受け止めた。

「冗談だ。それはそのままでも良いからそろそろ本当に休んだほうがいい。それほど長い休憩では無いのだろうか?」

レッドは笑いながらそう言うと、ジュリアはカップを壁際の棚に置きレッドと共に部屋の入り口へと向かった。

「今日はすみませんでした。私の話につき合ってもらってしまって」

「いや、俺もいい気分転換になったよ」

「?」

「いや、気にするな」

レッドは入り口の扉を開けると、ジュリアは外に出た。

「じゃあ、しつかり休めよ」

「はい。レッド様ですよ。それでは、おやすみなさい」

ジュリアは敬礼しながらそう言うとレッドも敬礼を返し、ジュリアはそのまま小走りに自分の部屋へと戻っていった。

レッドはジュリアを見送ると部屋へと戻り、再び執務機の椅子に座った。

(……ジュリアの方が余程覚悟が決まっているな)

ジュリアの言葉を思い出し、苦笑する。レッドは椅子に座ったまま後ろを向くと窓から夜空を見上げた。

(王家の意思、か)

ジュリアが何気なく言った言葉がレッドの心に残り、頭の中で何度も繰り返し返されていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2080t/>

インペリアル・ガード

2011年8月1日03時24分発行